

色々なアレが多すぎる！

大根ハツカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

TSサイボーグがAIや半妖などの仲間と共に、世界を終わらせる系の色々な人類の脅威と戦う物語。

不定期更新、全六話予定。↓完結。

# 目次

01	世界を終わらせる色々なアレ	1
02	男と女のアレソレ	13
03	オレの失ったアレ (上)	31
03	オレの失ったアレ (下)	45
04	君に幸あれ (上)	63
04	君に幸あれ (下)	77
00	あれこれの用語解説	100
04	99 Are You Ready?	108
05	荒れ狂う ■■ (ほし) に救いを	118
06	A Ray of Hope	146

## 01 世界を終わらせる色々なアレ

物語において世界を壊し、人類を滅亡させるものは色々ある。

例えば、SFなら宇宙人、オカルトなら妖怪、パニックものなら怪物。他にも、ゾンビや異世界からの侵略者、正体不明の謎の存在などがある。しかし、どんな世界においても、世界を滅ぼす脅威は世界につき一つだけだ。

だが、この世界においては違った。

十年前の運命の日、世界の至る所から色々な脅威が出現し、後に第一次超常戦争と呼ばれる戦いが始まった。

空には宇宙からの侵略者が現れた。

海では太古に生きていた怪物が復活した。

陸でも妖怪などの超常現象が溢れた。

世界は混乱に満ち、人類同士の争いも頻発し、終末論者が溢れ返り

……

やがて人類は異常に慣れ始めた。人類は色々な脅威に対して、対抗手段を生み出し、脅威との戦いはすぐさま金稼ぎへ変化した。

「目標発見、アレ1頭で五千万円とはあのオツサン上司も気前がいいよな」

つまり、オレも金目当てに人類の脅威と戦う馬鹿の一人だった。オレが受けた依頼はオホーツク海に出現した怪物の討伐だ。

眼前には足元が見えないぐらい濃い霧と、その程度では隠れないほど威圧感を持った怪物がいる。元々水深が浅い場所というのもあるだろうが、怪物が大きすぎて海がビニールプールにしか見えない。

怪物の見た目は一言で言うならば、とてつもなく巨大なカバだろうか。身長が190cmを超えている大柄なオレからしても、その怪物のサイズは比較にならない。大きさを表すいい感じの具体例は思い浮かばないが、近所の観覧車ぐらいの大きさはあるのではないか。皮

膚には赤い汗が滴り、周囲にも赤い霧が立ち込めている。

『注意、前方の霧に毒性があり。解析、怪獣の体液は毒性を持ち、汗のように体液を霧として放出』

脳内のAIが囁く。確かにこの猛毒の中では、あらゆる生物は死に絶えるだろう。この怪獣に名前をつけるならば、そのまま毒霧怪獣だろうか。

だが、忌々しいことにこの機体はその程度では死なない。そう作り替えられたのだから。

「ポイントAに到着した。戦闘を開始する」

『了解、肉体偽装停止。起動、兵装展開』

瞬間、比喻などではなく文字通り肉体が変化する。190cmを超える身長が150cm未満に、男の見た目が美少女に、肉の身体が鋼に変化する。

これは変身ではない。むしろ、先ほどまでの男の見た目こそが変身だ。しかし、本当は女性だったという訳でもなく、生まれも性自認もオレは男だ。

話せば長くなるが、オレは数ヶ月前に宇宙人に誘拐され、改造人間に作り替えられた。これはその後遺症と言えるだろう。今更ながら、どうしてこんなことになったのかと頭を抱えなくなる。

『完了、戦闘を開始』

堂々巡りの思考を振り払い、背中から飛行ユニットを展開する。奇襲のためにも、毒霧怪獣の死角である真上へ飛翔する。まずは初手。

「死ね死ねビーム!!!」

『訂正、超高熱蒸発光線』

手のひらから放たれたビームが頭上に当たるが、目立った効果はない。オレのスーパーアイが見る限り、何かでビームを防いだ訳ではなく、そもそも効いていないのだろう。毒霧怪獣は攻撃されたことに気づいてさえいなかった。

『推定、皮膚は耐熱性が優秀』

「見たら分かる。次いくぞ」

武装を別の物に切り替え、指に砲弾を装填する。未だにオレを認識すらしていない毒霧怪獣の頭に照準を合わせる。

「くらえ！なんとか砲!!!」

『訂正、超音速貫通砲弾』

いちいち訂正してくるとは、律儀なAIだ。

砲弾は直撃し、毒霧怪獣の眼球ごと頭部を吹き飛ばす。

「GEEEEGAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA!!!」

毒霧怪獣の咆哮が響き渡る。頭部から血が吹き出し、ただでさえ霧で真っ赤な視界が、更に赤く染まっていく。

『推定、皮膚は耐衝撃性が平凡。推奨、砲撃系兵装』

「オーケイ。毒以外には強みが無さそうだし、さっさと終わらせるか」

やっとオレに気づいた毒霧怪獣が霧を噴射してくる。しかし、オレには意味がない。いかに強力な毒であろうと、生物でないのなら効くはずがない。オレにとって毒霧怪獣はただのデカい的でしかなかった。

そもそも、怪獣や宇宙人など人類の脅威は色々あるが、それぞれに

は相性がある。怪獣は強大な生命であるが、宇宙人の文明力の前には簡単に撃退されてしまう。それは宇宙人に作り替えられたオレであつても同じことだ。

毒霧怪獣の攻撃に警戒する必要がなくなったオレは、手っ取り早く殺すために毒霧怪獣に接近する。そして、穴の空いた頭部に指の照準を合わせ、なんとか砲をぶち込む……その一瞬前のことだった。

ズバアアアアア!!!という音と共に、毒霧怪獣の体表から何かが放たれる。突然のことに回避は間に合わず、何かはオレの右腕に直撃した。その結果は明白だった。

『報告、右腕欠損』

「まじかよ、痛みを奪われて感謝するとは思わなかつたな……」

オレの右腕、正確には二の腕から先が切り落とされていた。腕の中から配線のようなものが飛び出しており、電気のようなものがバチバチ鳴っている。更に、血液とも異なるドロつとした液体が溢れていた。

『推測、ウォーターカッター超高压水流切断』

起こったことは単純だ。元から毒霧怪獣は汗のように毒霧を放出していた。今のは単にその毒霧の勢いを強くしただけだ。

だが、その結果は大きく異なる。毒霧は毒液となり、その勢いは超高压水流切断を引き起こす。つまり、今のは汗によつて引き起こされたウォーターカッターだ。

加えて最悪なことに、先ほど吹き飛んだ頭部の再生が始まっている。怪獣というものは総じて生存力が高く、その全てが高い再生力と適応力を持つ。毒霧怪獣にとって、毒などよりもその強大な生命力こそが本当の武器だ。

オレが先ほど怪獣に接近したのも、再生する前に仕留めようと考えていたためだ。だが、毒霧怪獣のウォーターカッターのことを考える

と、簡単には接近できない。

「つまり、こっからは長期戦かよ……」

『了解、短期決戦用兵装から継続戦闘用兵装に換装』

上空を飛行しながら、毒霧怪獣と睨み合う。オレは毒霧怪獣の弱点を把握したが、右腕を奪われた。逆に相手は肉体の欠損を再生させたが、オレについての情報をほとんど持たない。

条件としてはイーブンだが、相性を考えるとこちらの方が少し優勢だ。少なくとも、距離さえ保てばオレは攻撃を受けることがない。

オレが毒霧怪獣を殺すには、ウォーターカッターを避けつつ、遠距離砲撃で失血死させる必要がある。失った右手の代わりに、左手から射撃ユニットを展開させ、毒霧怪獣に向ける。

だが、オレは毒霧怪獣に集中しすぎ、あることを失念していた。

そう、この世界では人類の脅威は一つではない。

「……は？」

“それ”はオレと怪獣の間に突然現れた。いや、突然現れたというのは正しく無い。実際には“それ”はずっとそこにいたのだろう。

しかし、オレの右目のスコープアイには“それ”は映らず、肉眼のままの左目で見える距離になって、初めて“それ”に気づいた。

『報告、前方に透明の障害物が出現。解析、材質不明。緊急、自動回避』

“それ”は明らかな異形だった。

サイズとしてはオレと同じくらいか、それよりも小さい。郵便ポスト程度の大きさはあるだろうが、怪獣と比べると脅威はほとんど感じない大きさだ。



だが、〃それ〃は明らかに世界から外れた見た目をしていて。全身に白い毛が生え、足が四本あるのは獣のようであつたが、背中から更に二本の腕が生えている。頭は上下反対のタヌキのようであるが、目が異様に多い。

この世界において人類の脅威は、基本的に三つに分けられる。

一つ目は宇宙人。オレを誘アブダクション拐して、改造したヤツが該当する。

二つ目は怪獣。先ほどまで戦っていた毒霧怪獣が該当する。

そして、三つ目は……

「妖怪か！」

『報告、透明な障害物が多数出現』

怪獣にとつて宇宙人が天敵であるように、宇宙人にとつて妖怪は天敵だ。

妖怪とは理解不能の存在であり、あらゆる法則を無視する超常現象だ。概念的な能力を持ち、理屈が通らない概念を世界に強要する。故に、高度な科学技術を持つ宇宙人は、機械で認識できない妖怪に弱い。

そして、それはオレにも当てはまる。宇宙人の技術で作られた改造人間であるオレは、その技術のことごとくを無視する妖怪とは相性が悪い。

目に見えない障害物をAIのアシストで避けつつ、射撃ユニットで妖怪を狙撃する。だが、これは殺傷を意図した攻撃ではなく、確認の意味合いが強い。

そして、結果も想定していた通りだった。

「やっぱ無傷か……」

『解析、意味不明』

右目のスーパーアイでは弾丸が不自然に停止するのを観測し、左目の肉眼では弾丸が直撃しても傷一つ付かない妖怪を捉える。

バリアではない、バリアを使うまでもない。そもその前提とし

て、妖怪に物理攻撃は通用しない。いかに宇宙人の文明が高レベルであつても、それが「科学技術」である限り妖怪には通用しない。

オレは怪獣退治を専門としていて、妖怪には詳しく無いが、妖怪を倒すには同じ妖怪の力を使うか、生命力やら気みたいな不思議パワーを使う必要があるらしい。

『提言、撤退推奨』

「オレもそうしたいよ。でも、向こうも簡単に帰らしてくれなさそうだ」

オレと毒霧怪獣を逃さないように、見えない何かに囲まれたのを感じる。相変わらずスーパードアイでは何も観測できないが、逆に不自然なほど何も認識できない空間が存在する。恐らくそこにバリアがあるのだろう。

「がぎやぎやあつ!!」

奇妙な叫び声と共に妖怪がバリアを足場にして移動し、バリアと思われる何かがちらに殺到する。怪獣より先に、邪魔な人間を排除する腹積もりだろう。

バリアの速度は一つ一つが音速を超える。バリアの強度にもよるが、もしも当たれば無事では済まない。

「まあ、この程度の速度なら避けられるが」

こちらら、普段から金のために命を賭けて戦っているんだ。音速程度では話にならない。むしろ、上司の娘さんの方が速いものである。

バリアを避けるついでに、ビームサーベル的なものでバリアを斬りつける。バリアには全く効かなかったが、収穫はあった。

『解析、強度不明。推定、仮称バリアは壁型』

「透明な壊せない壁を作る能力か。ここまでくれば正体は明白だな」

AIはオレの脳内データベースに接続し、オレは上司に渡された妖怪図鑑を思い出す。そしてのその名を同時に言う。

『妖怪ぬりかべ』

妖怪の中でも比較的ポピュラーな存在だが、実は壁の妖怪ではなく壁を作る妖怪であることはあまり知られていない。

しかし、妖怪の正体が分かった所で状況は変わらない。オレはぬりかべに狭い箱の中に閉じ込められており、更に箱の中にはウォーターカッターを放つ毒霧怪獣がいる。

今のところ、毒霧怪獣の敵意はぬりかべに向いているが、こちらに攻撃を向けられたら逃げ場のない箱の中ではすぐに死んでしまう。

ぬりかべを守るバリアを破壊しながら暴れる毒霧怪獣、毒霧怪獣から逃げながらオレに攻撃するぬりかべ、それを避けながら二体を観察するオレ。状況は混沌とし、戦況は停滞していた。

……いや？

何か不自然なことがなかったか？

どうして毒霧怪獣はバリアを破壊できる？

妖怪退治に必要なのは、妖怪の力か不思議ばわー。毒霧怪獣の強大な生命力は不思議ばわーに分類されるのだろうか。もしかすると、怪獣は妖怪の天敵なのかもしれない。

だとすると、この中でぬりかべを殺せるのは毒霧怪獣だけだ。

今まで得た情報を整理する。

怪獣、汗、毒、カバ、熱耐性、ウォーターカッター、妖怪、バリア、壁、箱、そして相性。

考えに考えて、一つの勝機を見出す。

「狙うか、漁夫の利」



オレがしたのは箱の“角”にビームサーベルを当てただけだ。“角”がある限り、それは壁ではなく箱となる。だから、厳密にはオレが箱を壊したのではなく、箱であることを指摘されたことで自壊したというのが正しい。

ぬりかべは何故バリアが破壊されたのか理解できないまま、それでも足場を失ったことに気づき、慌ててバリアを出そうとする。

だが、それは許さない。

「飛行ユニットオオオオオオオ!!!」

『起動、飛行ユニット出力全開』

ぬりかべを握りしめ、全速力で垂直落下する。途中何度か放たれたウォーターカッターを振り切るように、毒霧怪獣の真下の水面に着弾する。

ここからはスピード勝負だ。急いで水中で目的のものを見つけ、掴み取る。

『起動、超高熱蒸発光線』

それは最初のウォーターカッターで切り落とされたオレの右腕だった。それを爆発する勢いで発熱させる。

毒霧怪獣の皮膚は熱耐性を持つ、それは確定した事実ではなく推定でしかない。

毒霧怪獣の見た目はカバによく似ていた。カバというのは赤い汗を出し、その汗には殺菌効果と日光を防ぐ効果がある。そして、カバは乾燥に弱い。

毒霧怪獣がカバに似た見た目をしているのは、同じような性質を持っているからだろう。殺菌効果は毒、日光を防ぐ効果は耐熱性。そして、同じように乾燥に弱いと考えられる。

元々、バカみたいに汗を出しているため、水分消費量もバカになら



それは大型犬一匹が丸々入りそうなくらい、大きな卵だった。気になつて持ち上げると、その卵は急に割れ始めた。毒霧怪獣が倒れた衝撃か、それともたまたま孵化のタイミングだったのか、真相は分からない。ただ、中身を見るとその正体はすぐに分かった。

そもそも不思議だったことが一つある。何故あのタイミングでぬりかべが現れたのか。妖怪というのは人の思念から生まれるもので、そのほとんどは都市部に生息している。海に生息している妖怪もいるにはいるが、ぬりかべはそのタイプではない。

では、何を目的としてこの場所に訪れたのか。決まってる、毒霧怪獣だ。もつとと言うと、毒霧怪獣が保有していたこの卵だ。

孵化した中身を見ても、脳が理解を拒む。だってありえない。それは復活した生き物であつて、新たに生まれる生き物ではないからだ。だが、AIは容赦なく現実を見せつける。

『推定、怪獣の幼体』

「GYAU?」

## 02 男と女のアレソレ

十年前の第一次超常戦争のとき、人類滅亡の危機に対して各国は協力して立ち向かった、なんてことは全くなかった。

むしろ、各国は足を引つ張り合い、戦争は頻発して勢力図もぐちゃぐちゃになった。最終的に、世界は三つの陣営に分割された。

一つは『ガバメント』。いわゆる、旧体制側の陣営だ。かつて存在した国連によって創設された軍隊を基盤としており、その本拠地をアメリカに置いている。

『ガバメント』所属国は地球の防衛と治安の維持、そして国の統一を目指して活動する。

もう一つは『アウトロー』。いわゆる、元犯罪組織の陣営だ。第一次超常戦争の前から裏社会を治めていた組織が基盤となっており、身体に妖怪の血が流れる半妖が数多く所属している。

『アウトロー』は明確な拠点を持たないが、アジアを中心として広がっている。

この二つのどちらにも属さないのが『カンパニー』。いわゆる、会社のような陣営だ。世界的軍事企業を基盤としており、お金のためだけに動く。

この陣営は各地に点在しているが、陣営同士の仲間意識などは存在しない。

ちなみに、日本の立ち位置は微妙であり、東京を中心とした東日本を『ガバメント』が、京都を中心とした西日本を『アウトロー』が治めている。両陣営は敵対しているため、毎日のように日本のどこかで代理戦争が行われている。

これだけ長々と話したのは、結局オレがどの陣営に属しているのかという話だ。オレは改造されたことで元の戸籍を失っている。よって、『カンパニー』には雇ってもらえない。

また、宇宙人産の改造人間<sup>サイボーグ</sup>であるオレは、潜在的には人類の脅威と



も言えるため『ガバメント』の排除対象だ。

よって、オレが所属できる陣営は一つしかなかった。

地下への階段を下り、薄暗い業務員用通路を通って更に地下を目指し、警備員室に偽装された部屋の奥に行く。不自然に掛かった暖簾をくぐると、その先には『アウトロー』の隠れ家が存在する。

この隠れ家は大阪に存在する中では比較的大規模な拠点であり、地下迷宮梅田から徒歩で十分程度の距離にある立地のいい隠れ家だ。そして、オレの恩人が拠点にしている場所でもある。

「よく来ましたわね、レイさん！ちよつと遅いのではなくて、つてその右腕どうしましたの!？」

「チカさん久しぶり、右腕は昨日爆発した」

「爆発!？」

『訂正、右腕は切断による欠損』

律儀なAIに訂正される。でも、結果的に爆発したんだから、あまり変わらない気がする。

この偉そうな喋り方の人は茨木チカさんといって、居場所がなくて何処にもいけなかったオレを拾ってくれた恩人だ。

オレが戸籍を偽装できたのも、オレが仕事に恵まれたのもチカさんのおかげだ。ついでに言えば、オレに仕事を与えている上司の娘さんでもある。そのため、色々な意味で頭が上がらない。

「その腕では当分仕事が出来ないのではないかしら。バイトでも紹介しましょうか？」

「ある程度貯金もあるから大丈夫だよ。それにバイトってどうせあの店だろ？」

「もちろんですわ。わたくしが運営する『メイド喫茶きゅんきゅん』は貴女を歓迎します。何故ならば、わたくしの野望は世界中の美少女に

メイド服を着せることだからですわ!!!」

怪獣討伐の仕事を始めるまでの数週間、オレはチカさんが運営する店で働いていたことがある。時給も高く、労働環境もホワイトだから特に文句は無かった。

だが、いくら見た目が女の子であろうと、メイド服を着て接客するのは流石に恥ずかしかった。肉体偽装ユニットを開発したのも、このことが原因だ。……昨日の戦闘で肉体偽装ユニットが壊れてさえないなければ、今も変身<sup>男装</sup>していただろう。

ちなみに、チカさんはメイド服を着せるだけでなく、自分で着るのも好きなので、普段着として着ている。金髪メイド服お嬢様とは属性を詰め込みすぎな気もするが。

『疑問、青髪オレっ子ロリTSサイボーグの方が属性過多では?』

正論が突き刺さる。

というか、このAI何処でそんな言葉覚えたんだ。オレの脳内データベースか?」

「ともかく、右腕も三日で修復してくれるらしいから、心配してくれなくても大丈夫。そんなことより、今日は相談したいことがあって、チカさんに会いに来たんだ」

「レイさんが私に頼るとは珍しいですわね。どうかしたんですの?」

チカさんが胸の前で腕を組み、聞き返す。本人は至って真面目だが、このポーズでは体の一部が強調されるため、反射的にスーパーアイを逸らしてしまう。

チカさんは身長など、色々とアレがデカイ。オレも改造されたときに、デカくしてくれたら良かったのにな。……いや胸の大きさを気にしてるとかではなく。

『否定、胸部の脂肪などただの贅肉に過ぎず、スマートな体型こそ至高。提言、この機体は完全無欠にして最強無敵』

AIに褒められると、自画自賛しているみたいで恥ずかしくなる。オレの脳内データベースが本当に心配になる。

気を取り直して本題に入る。それは昨日遭遇した異常事態についてだ。ただ、説明するのがまどろこつしいので、手っ取り早く本題を伝えるために、リュックサックから“それ”を取り出す。

「これ拾ったんだけどどうしよう」

「GYAU」

その怪獣を見たチカさんが絶句する。

怪獣の見た目は一言で言うならば、翼の生えたトカゲ、つまりは西洋のドラゴンのようだった。しかし、その大きさはドラゴンのイメージとは大きく異なる。大きいのではなく、とても小さい。それはランドセルくらいの大きさで、遠くから見るとぬいぐるみのようにも見える。

「ば」

「ば?」

「GYA?」

「おバカですの~~~~?!?!?!」

『推測、驚愕中』

凄い剣幕でキレられる。

結果的に、昨日の経緯を一から十まで説明することになった。

「なるほど、確かに新たに怪獣が産まれてきたとは聞いたことがありますせんわ。今までの復活仮説だけでなく、最近主流のガイア仮説も覆

す話ですわね。名付けるなら、新生怪獣と言ったところですよ」

太古に生きていた怪獣が復活うんぬんって、あれ仮説だったのか。事実だと思ってた。

それはともかく……。

「そいつの名前はカイ、怪獣のカイ。昨日の夜に決めた」

「GYAU！」

「名前つけてたんですの!?!しかも安直!!そもそも、どうして持ち帰ることに????」

「産まれてすぐにオレを見たからかは分からないけど、凄い懐かれてさ。昨日の夜も布団にめちやくちや入ってきて温かった。トカゲみたいな見た目だけど、恒温動物だった」

『推測、からだ機体には冷却機能があり、冷たいから寄ってきた』

甘えてきたと思ってたんだけど、そんなパソコンに寄る猫みたいな理由だったのか。温度の関係は逆だけど。

チカさんは悩ましげに眉をひそめ、頭痛がするみたいにこめかみを抑える。うんうん言っって色々検討を行い、最終的にため息を吐いて電話を取り出す。

「わたくしの手に余りますので、お祖父様に連絡しますわ。取り敢えず、実家に行きましょう」

「GYA〜♪」

チカさんの実家へ向かうことが決まった。チカさんは日本における『アウトロー』のトップの孫であるため、実家とはつまり京都にある『アウトロー』の日本拠点のことだ。

地下鉄を使用すると、何かあった時に民間人を巻き込むことになる

ため、一度地上に上がりチカさんの家に寄ってから、自動車で京都へ向かう段取りになった。

カイの鼻歌（下手）を聴きながら、階段を登る。隠れ家がある地下にはエレベーターが繋がっていないため、地上に出るにはいちいち階段を上る必要がある。

「まさか、レイさんがこんな物を拾ってくるとは思いませんでしたわ。どう考えても危険な物でしょう、これ」

「オレを拾ったチカさんに言われたくはないなあ、オレもどう考えても危険物だろ」

行方不明者の名前を騙る宇宙人産改造人間とか、あからさまに罠だし、どう考えても怪しい。何せ、本人確認のために血液型を調べようにも、血液すら通ってない機械だ。むしろ、可燃性の液体が通っている。

話しながら、階段を上がる。

「あの時は……わたくしの別荘の前で人が倒れていたから、仕方なく連れ帰っただけですわ。レイさんがご家族の方に罵倒されていたのも聞いていましたし」

「それは仕方ない。姿形にあの時の面影はないし、オレだってオレが天城レイであることを証明できない。自分が天城レイだと思っ込んでいるだけの人型機械だっという可能性も否定できない」

『……』

知らない女が行方不明の息子の名前を騙っているんだ、怒らない方がおかしい。それに、チカさんは罵倒と言っているが、あれは怒鳴っていたというより、泣き叫んでいたと言った方が近い。泣いてくれる人がいる、それだけで十分だと思った。

話しながら、階段を登る。

「姿形が異なっても、内面的なもので誰だかわかるのではなくって？  
オーラで判断できるのは、わたくしに妖怪の血が流れているからかも  
しれませんが……」

「オレが行方不明になってから、もう何年も経ってるんだ。改造人間<sup>サイボーグ</sup>  
のオレに戸籍はないけど、人間<sup>天城レイ</sup>のオレはもう鬼籍に入ってる。オレの  
ことを鮮明に覚えてる人なんていないよ」

『……』

オレが誘<sup>アブダクション</sup> 拐されたのは数ヶ月前、だがそれはオレの主観において  
の話だ。実際には、あれから八年経っている。

オレにはその間の記憶はなく、コールドスリープさせられていたの  
か、それとも記憶を抹消させられたのかもしれない。ただ分かるの  
は、いつの間にか地球に帰ってきていたという事実だけだ。

話しながら、階段を登る。

「……例え、レイさんがレイさんじゃなかったって、貴女は危険物なんか  
じゃありませんわ。だって、あんなにメイド服が似合うエロティック  
な人が、優しくない訳ありませんもの」

子供も慈しむような顔でトンチキなことを言う。感動的な言葉み  
たいに言ってるが、よく聞くとただの変態だ。

「GYAUGYU」

カイがリュックから手を伸ばし、オレの頭を撫でる。慰めているの  
かもしれない。ただ、カイはその大きさからは想像できないぐらい力  
が強いため、撫でられる度に頭がグラグラする。あと、鱗が割と痛い。

話しながら階段を……あれ？

「これ、おかしくないか？」

「おかしいですわね」

「GYA？」

チカさんも異常に思い至ったようで、子供を慈しむように優しくなった顔が警戒したものに変わる。

地下迷宮梅田では毎日のように増築と改築が繰り返され、見覚えのない場所は山のようにある。また、『アウトロー』の技術が使われたことで、迷子になりやすい構造になっている。

だが、これは物理的におかしい。

隠れ家は地下4階に存在する。そして、オレたちは階段を5回上がった。それにも関わらず、オレたちは未だに地下にいる。

それに加えて、あることに気がつく。

AIの声がない。先程から黙っていると思っていたが、この状況でも発言しないのは不自然だ。よく耳を澄ますと、砂嵐のような音も聞こえる。おそらく、何か声が出せない状況にいるのだろう。

『推……、……ヤ……』

「おい、何があった！」

「どうしたんですの？」

「いや、AIの調子が悪いみたいで……」

『推……、ジャミン……よる……害』

一瞬だけ音声 少し聞き取れる。しかし、その後は今度こそAIは沈黙した。そして、聞き返す暇もなく、答えが目の前に出現する。

それは歪だが人の形をしていた。金属的な皮膚が廊下の明かりを反射して輝き、駆動音を響かせながら四足歩行で歩いて来た。オレはそれに見覚えがあった。当たり前だ、それはオレの人生における最も大きなターニングポイントを作った脅威。

宇宙の彼方から地球に来訪した侵略者。

「宇宙 人……」

オレの機体からだを作ったのが宇宙人ならば、脳内のAIを作ったのも宇宙人に決まってる。ならば、AIをジャミングできるのも宇宙人しかない。

鼓動が速くなるのを感じる。宇宙人と遭遇するのは数ヶ月ぶりだが、その見た目はトラウマのように記憶に焼き付いている。この地球に来訪した宇宙人は、それ以前に語られていたイメージとは大きく異なっていた。

形こそ人間と近似しているが、その体は血肉ではなく金属で出来ている。顔を持たず、生殖も行わず、睡眠も食事も行わない人類の脅威。文明の収穫だけを目的とする金属生命体。

「いいえ、違います。これは妖怪ですわ」

「え？」

「GYAU」

「宇宙人の残骸に妖怪が取り憑いているのですわ。ほら、カイくんも頷いていますわ」

カイは頭をこちらに向けて頷く。そして、瞳孔が大きく開いた目で、相手を睨み付ける。

よく見ると、宇宙人はジャンク品の寄せ集めのようにボロボロだった。また、宇宙人は普通に二足歩行のはずなので、四足歩行しているのは取り憑いた妖怪なのだろう。

「妖怪とは生命力を素材として、人の思念によって形作られますわ。そのため、肉体はひどく不安定で、何かに取り憑いて安定しようとしませんわ。また、足りない生命力や思念を補填するため、人を襲いますわ」

「じゃあヤバくないか？オレは右腕の兵装を失ってるし、地下だからほとんどの他の兵装もほとんど使えない。チカさんも暴れづらいらろうし……」

「わたくしを誰だとお考えで？」



刹那、ガッツツツ!!!つと轟音が鳴る。

額に角を生やしたチカさんが一瞬で妖怪の目の前に移動し、その頭を蹴り飛ばす。蹴りはその細い足からでは想像できないほどの威力を持ち、一撃で妖怪の機体からだを全壊させる。

「わたくしの名は茨木チカ。一族の中でも最も鬼の血が濃く、日本で最も強い半妖ですわ!」

日本妖怪において最強の鬼、その半妖。

能力は変化へんげ。妖狐なども保有する能力だが、鬼の変化は肉体の見た目を変える程度ではない。その真価は自身の身体性能スベツクを幾らでも書き換えられることにある。超音速で動ける速度になることも、ミサイルを弾ける硬さになることも、ビルを持ち上げられる怪力になることだって可能だ。

本気を出すと周囲を瓦礫に変えるため、地下迷宮梅田では力をセーブしなければならぬ。しかし、この程度の妖怪ならばチカさんは本気を出すまでもないようだった。本来ならば。

「GYA!」

「げげげげつつつ!!!」

カイの声に反応して、チカさんは後ろへ大きく飛ぶ。直後、さつきまでチカさんがいた場所が吹き飛ぶ。そこにいたのは、先程ぶつ壊れたはずの妖怪だった。しかし先程までとは異なり、オレの左目の肉眼に獣のようなオーラが映る。

更に、チカさんの足に糸か綿のような何かが纏わりつく。ふと下を見ると、それはオレの足にも纏わりついており、オレは足を動かせなくなっていた。

「一旦撤退しますわ!」

「GYAOー！」

咄嗟にオレはカイをリュックにいれ、チカさんはオレを抱き上げる。チカさんは階段横のドアを蹴破り、薄暗い廊下を全力で走る。

走る邪魔になるのもアレなので、おんぶの形になって腕に力を込める。これでチカさんの手は空いたが、代わりにオレとチカさんの密着度合いが高まる。

「レイさん!?胸ガッツ、胸が当たっておりますことよ?!?!?」

「ごめん、男に引っ付かれるのは気持ち悪いとは思うけど、今は身体は女同士ってことで我慢して欲しい!」

「……そうやったな!いや、間違えた。そうでしたわね!!!」

そう簡単に逃すわけもなく、妖怪は四足歩行で追撃を行う。チカさんは近くのドアを手で引っこ抜き、そのドアを投げ飛ばす。オレは射撃ユニットを起動させて、妖怪に向けて弾丸を放つ。

だが、当たらない。正確には、当たっているはずなのにいつの間にか別の場所から無傷で現れる。段々と妖怪との距離が縮まり、糸つぼいものを鞭のようにしならせる。

「げげげげげげ」

「GYAUー！」

いつの間にかカイがリュックから頭を出しており、その口から火を放ち糸を燃やす。カイが火を吹けるとは知らなかったが、トカゲなのに温かったのはこういう理屈だったのかもしれない。

更に、火に怯んで硬直した妖怪にカイは頭突きをお見舞いする。今度こそ間違いなく妖怪は吹っ飛び、その隙にチカさんは全力で逃げる。

妖怪の足音が聞こえなくなるまで距離を取り、チカさんの息が整つ

た所で作戦会議を始める。

「何だ、アレ。攻撃は当たらないし、変な糸で歩けないし、機動力は高いし。チカさんはこの妖怪に心当たりあるか？」

「匂いからして二種類の妖怪、それも狐と狸が混ざってますわね」

た。さすが半妖と言うべきか、やはりチカさんは妖怪に詳しいようだった。

「狐はおそらく狐火、夜に道のない場所を照らすことで人を迷子にさせる妖怪ですわ。狸は足まがり、足に糸を巻きつけて歩くのを妨害する妖怪ですわ」

「最初に地下から出られなくなったのが狐火の影響で、足が動かなくなったのが足まがりの影響ってことか？」

しかし、一つ疑問が残る。

機動力とジャミングは宇宙人の機体からだのせいだとしても、それでは攻撃が当たらない謎の現象に説明がつかない。

「レイさんの考えていることは、何となく分かりますわ。それは恐らく狐火の能力の応用ですわね。狐火はわたくし達に幻影を見せていたのですわ」

「妖怪ってそこまで応用力が高いのか？」

「いえ、明らかに強くなりすぎですわ。足まがりだって本来は動きづらくする程度、わたくしが音速を出せないほど弱体化させられるとは思いませんわ」

妖怪と相性の良いカイはともかく、チカさんだけ走れることを不思議に思っていたが、あれでも弱体化していたとは……。

「で、これからどうするっ？」

「レイさんが考えてくださいまし。わたくしが思いつくのは、力づくで地下ごと破壊するぐらいですわ」

「え……」

オレ、妖怪と遭遇したの二度目なんだが。

マジで言ってる？マジ？マジかあ……。撤回する気は無さそうな笑顔に反論を諦める。どうせ、断れる訳もないし、地下を壊される訳にもいかないの、解決法を必死に考える。まずは、今まで出た情報を整理する。

宇宙人、金属、妖怪、幻影、夜、明かり、廊下、糸、半妖、変化、怪物、瞳孔、火炎放射、リュック、最後にオレの兵装。

考えに考え、他力本願な作戦を立てる。

「あー、カイとチカさんに任せる」

準備を一通り終わらせ、リュックを背負う。廊下に一人で立ち、妖怪を待ち構える。自分の鼓動だけが聞こえる静寂の中、妖怪の足音を探る。

その瞬間、突然現れた妖怪がその腕でリュックを貫く。先程の戦闘でカイこそが自らの天敵であると悟ったのだろう。リュックを背負うオレのことは無視して、何度も繰り返し返し執拗にリュックを貫く。そして……

「やっと捕まえましたわ」

小さくなったチカさんがリュックから手を出し、その細い腕で妖怪を力強く掴む。

妖怪は逃げようともがき、掴まれた腕を自ら切り離すことで離脱する。そして幻影を発動させ、妖怪の姿が消える。

だが、対策は練ってある。

「カイ、頼むー!」

「GYA O O O O O O O O!!!」

カイが口から火を放ち、その火が床にぶちまけられた可燃性の液体を伝って広がる。辺り一面は火の海となり、妖怪の姿があらわになる。

狐火の能力は夜に明かりを照らすことで幻影を見せることだ。そして、この場での明かりとは廊下にある全ての電球。そもそも、電球狐火自体が幻なのだろう。カイの瞳孔が大きく開いていたことから、この廊下は本当は暗闇だと分かる。ならば、解決法は簡単だ。

「げげげげげっっっっ?!?!?!?!」

それとは別に光源を作れば良い。

オレの機体からだに通う可燃性の液体をあらかじめ床に準備しておき、カイの火を引火させて光源にする。火の海は電球の光を掻き消し、その空間の本当の姿を見せる。そこに書かれた文字はB4。地下4階オレたちは階段すら上がっていなかった。

更に、カイの火は足まがりの生み出す糸を燃やし尽くす。これで二種類の妖怪の能力を封じられた。

この作戦はカイが一番最初に狙われると破綻する。よって、オレは偽装を施すことにした。

まず、この廊下が本当は暗闇であるならば、妖怪かその機体からだには普通の目とは異なる何らかのセンサーがあると考えた。そして、カイに火を吹かれた時に硬直していたことから、サーモグラフィーによる熱源探知だと予想した。

そのため、カイの体温へんげに変化したチカさんがリュックに入り、オレは冷却機能でカイを冷やして隠した。これによって、妖怪はまんまと勘違いして、リュックを攻撃していたわけだ。

だが、オレの作戦はここまで。カイの火で妖怪の能力を封じたが、あとは全てチカさんに任せた。正に他力本願な作戦と言えるだろう。

「任せてくださませ、一瞬で終わらせませすわ」

チカさんの蹴りが、今度こそ妖怪の頭部を吹き飛ばす。頭が折れたというよりも、溶けたと表現できるほどの蹴りであった。

ただ、オレたちは妖怪の生存能力を見誤っていた。頭部を破壊されてもなお、妖怪は残った三本の足で動き、火の海から脱出する。

しかし、妖怪もまた一つ見誤っていることがあった。それは、日本最強の半妖はこの程度ではないということだ。

「げげげ？」

火の海から逃げ切ったはずの妖怪の足に何かが絡まる。それは糸だった。奇しくも、妖怪が使っていた能力と同じ糸が足に纏わりついている。

「変化へんげによる身体性能スベックの書き換え……その程度で日本最強になれるとでお考えで？」

その糸の先には、チカ鬼さんがいる。頭から角の代わり狸の耳を生やした鬼が立っている。

「どうして鬼が妖怪の頂点に立っているのか、お考えになったことはありませんか？」

糸が妖怪の足を締め付け、金属製の足を丸ごと破壊する。それは明らかに、この妖怪よりも能力の出力が高かった。

「それは、わたくしたちが変化へんげによって、あらゆる妖怪の能力を模倣コピーし、原型オリジナル以上の出力で使用できるからですわ」

コツコツと音を立てながら、鬼が歩く。

そして、ちつぽけな妖怪の元へ辿り着く。足を失った妖怪はもがくが、もう逃げられない。

「わたくしの大坂シマで暴れた報いを受けて貰いますわ」

この人こそ、日本最強の半妖。

『アウトロー』の中でも、大阪全域の統括を任された序列ナンバリング二位。グシャツツツツ!!という音と共に、妖怪が完全に沈黙する。

「これにて一件落着ですわ!!!」

「GYA!」

『……回復、AIサポート再起動』

「めちやくちや疲れた……」

AIがないと解析や考察を全部自分の頭でしないといけないので、負担がハンパなかった。今日はチカさんにおんぶされていたから良かったものの、自分で動き回ってたら頭なんて全く動かなかっただろう。

AIのありがたみが分かる戦闘だった。

『謝罪、足手まとい』

「別にいいよ、普段から助けてもらってる訳だし。もし気に止むなら、次は助けてくれ」

『……了解、次こそ貴方を救ってみせる』

重いな……。未だにAIのキャラが掴めない。

ひとまず、これで一件落着ということ京都に向かうか。地上へ上

がるために階段を探すと、周囲がやけに煙たいことに気づく。

『推奨、火災の消火』

……そういえば、この場にるのが半妖と怪獣と改造人間<sup>サイボーグ</sup>だったから気づかなかったけど、普通の人がここにいたら酸欠で死ぬのではないか。

「ヤバい!! 普通に人死ぬぞ、こんなの!?!」

「GYAO!」

「火で火を消そうとするんじゃないやねえ!! やめろカイ!!!」

オレたちの消火活動<sup>たかかい</sup>はこれからだ!

慌てるレイたちを尻目に見ながら茨木チカは……、いや茨木博親<sup>いばらきひろちか</sup>は一人で思案する。

「(今の妖怪、明らかに強くなりすぎてた。原因はたぶん……あの怪獣やろな)」

その心の声は普段の話し方とは異なる。むしろ、こちらの話し方が元であり、レイの前での話し方が演技だ。普段の話し方は関西弁が混ざったもので、あんなエセお嬢様のような話し方ではない。

「(無意識かは知らんけど、生命力を他者に与える能力。小っこいから油断してたわ。姿なんていくらでも変えられる……ボク<sup>ボク</sup>みたいに)」



変化の本質は容姿を変えることにある。  
変化は何もかもを変えられる。容貌も、髪色も、身長も、そして……  
性別さえも。

「(でも、あの怪獣さえおつたら、次の戦争も勝てるかもしれない。レイさんは参加させるつもり無かったんやけど、そんなこと言ってられへんなあ)」

こうして地下迷宮梅田での小さい戦いが終わり、世界を巻き込む超常戦争が幕を開ける。

### 03 オレの失ったアレ（上）

時折、ふと考える。

オレは本当に天城レイなんだろうか。

天城レイとは190cmを超える身長があり、運動部に相応わしい筋肉を持った男だ。声は低く、可愛らしきなどカケラもない。

対して、オレはどうだ。だいたい150cmぐらいの身長に、折れないか心配になるぐらい細い手足。声はアニメキャラのように高く、誰もが認める絶世の美少女。

この女のどこが天城レイと言えるのか。

もし、オレが天城レイでないのなら、本当の天城レイは何処にいるのだろう。何をして、何を考えて生きているのだろうか。家族の元に帰りたいとは思わないのか。天城レイから見える景色は、オレとどれだけかけ離れているのか。

つまり、何が言いたいかというと。

もう身長だけでいいから、今すぐ元の体に戻らねえかな……。

現在、オレたちは2mを超える身長の大男たちに囲まれている。これだけデカイやつらの横に並ぶと、オレの小さが浮き彫りになる。囲まれていると言っても、何かに巻き込まれているとかではない。

「若頭アー……苦労様です!!!」

「……ご苦労様です!!!」

屈強な男たちが頭を下げ、オレたちに道を譲る。正確には、チカさんのために道を開けている。オレたちは今、京都にある『アウトロー』の本拠地、つまりチカさんの実家にいる。

辺り一帯全てがこの家の敷地内らしく、庭に池もあって馬鹿でない。屋敷は和風でありながら最新の設備が整っており、その外見は観光名所にもなりそうなほど素晴らしい。

地下迷宮梅田での戦闘の後、火災やら何やらの後始末で結局、オレ

私たちは大阪に一泊することになってしまった。

そして今日の朝、車で京都まで来る予定だったが、急遽チカさんのコピーした能力を使い、瞬間移動することで一瞬で京都に到着した。ちなみに、オレの右腕はまだ修理されていない。肉体偽装ユニットなどの搭載していた兵装は修理されたが、兵装を搭載する右腕自体の修理はまだ時間がかかるとのことだった。仕方なく兵装は、空いていた胸に搭載している。

「瞬間移動する能力があるなら、昨日の戦いするとき地下から脱出できたんじゃないのか？」

「そんな便利な能力ではありませんわ。この能力の名前は瞬間移動です。空間を超えているのではなく、移動にかかる時間が一瞬になるように加速しているだけですわ。ですので、地下や屋内などの障害物が多い場所では、使用しづらいのですわ」

宇宙人の空間跳躍とは異なり、使い勝手が悪いようだ。まあ、空間跳躍も同じ辺りには月一度しか使えないらしいが。

チカさんは話しながら、一人の男を指差す。

そこには小さな男の子を肩車しているスキンヘッドの男がいた。巨大な体はスキンヘッドが似合っているが、どうしてか忍者の格好をしている。その男は指差されたことに気がついたようで、オレたちに手を振りかえしてくる。

「瞬間移動の原型はあのシヨタコン男ですわ。あの男は隠し神の半妖なのですが、わたくしと違って視界内への瞬間移動しかできない雑魚ですわ」

「待つて待つて、情報量が多い」

『了解、取得情報の整理を開始』

あのスキンヘッドの人の趣味が勝手にバラされちゃったよ。いや、シヨタコンだったらあの男の子は大丈夫なのか。何で忍者の格好を

しているんだ。そもそも、隠し神っていう名前の妖怪自体知らないだけだ。

色々な疑問を飲み込む。『アウトロー』には『アウトロー』の事情があるのだろうし、あんまり踏み込むのも良くないだろう。

一度頭を冷静にし、AIが整理してくれた情報を閲覧する。するといくつかの疑問が生まれる。

「屋外で瞬間移動を使えるなら、そもそも何で車を使う予定だったんだ？あと、何で急に瞬間移動することになったんだ？」

「ドライブデートしたかったからですわ！」

チカさんは恥ずかしげもなく、それでいてからかう様に言い切る。逆にオレの方が照れてしまい、顔が赤くなる。

「ですが、瞬間移動に切り替えた理由は、一刻も早くお祖父様に会わないといけないからですわ」

チカさんが耳元に顔を近づけ、小さな声でささやく。顔を見ると、その顔はいつになく真剣だった。まるで、何か深刻な理由があるように。

「……何かあったのか？」

「昨日の妖怪が使っていた機からだ体ありますわよね、あれの解析結果が今朝届きましたわ。……不思議なことにジャミング機能が一切見当たらないのですわ」

「考えづらいけど、オレの機からだ体のメンテナンス不足だったとか、狐火の幻影がAIに影響を与えていたとか？」

『否定、機能不全はジャミングの影響』

だとしたら、考えられる理由は一つしかない。

「あそこには第三者がいた……?」

「昨日、最後に火災がありましたわよね?あの時に火災探知機が反応しなかったのも、第三者によるジャミングだと考えられますわ。そして、その目的は一つしかありませんわ」

視線はオレの買い替えたりユツク、その中にいる怪獣に向けられる。

「GYA?」

「やっぱ、カイ狙いか。ジャミングってことは、宇宙人の仕業か?」  
「ですわね。そんなわけで、実家に匿ってもらいに来たわけですわ。相手が宇宙人であるならば、半妖のわたくし達が負けるはずありませんもの」

話しながら使用人さんの先導に従い、広めの和室に入室する。というか、先導してくれた使用人さんはメイド服を着てたけど、和室と全く合っていないかったな。

『推測、茨木チカの趣味』

だろうな。チカさんは実家でも好き勝手やっているようで、今まで見かけた使用人さんは全員がメイド服を着ていた。流石の変態力だと謎に感心してしまう。

入出した部屋は非常に広く、高そうな掛け軸が掛かっていた。何となく正座をして、和室で待つ。

「今からチカさんのおじいさんに会うんだよな、どんな人なんだ?」  
「言動は軽い人ですが、関西を治めるに相応しい人だと思いますわ」

そうか、チカさんの祖父としか考えていなかったが、今から『アウトロ』のトップと会うのか。今更だが緊張してきた。

「間もなく、会長がご入室致します」

いつの間にか扉の横に立っていた黒服の男が告げる。黒服にサングラスをつけており、表情が全く分からない。オレのスーパーアイが存在に気づけなかったということとは、そういう能力だろうか。

「念のために頭を下げてくださいまし。そんなことを気にする人ではありませんが、そのグラスサンに口を挟まれないためですわ」

「分かった、素直に従うよ。ほら、カイも頭を下げてください」

「GYAU」

少しすると足音が聞こえ、すぐに襖が開く。

どんな人だろうか。『アウトロー』のトップらしく厳つい顔をしているのか、それとも意外とインテリ系なのか。はたまた、半妖だし人間の見た目とはかけ離れている可能性もある。

緊張と少しの高揚感を感じ、床を見つめる。様々な想像をしながら、その人が話し始めるのを待つ。

「そんな堅苦しい場じゃない、頭を上げい」

想像と全く異なる声が響く。少女のように可愛らしく、それでいて色気のある声だ。あまりに想像から外れていたので、反射的に頭を上げてしまう。

そこにいたのは着物を装う絶世の美女。

「えっ？」

その人は全身に妖艶な雰囲気纏い、はだけた胸は豊満な身体を強調する。白い髪は幻想的な印象を与え、裾の短い着物は健康的な太ももを惜しみなく出している。その容貌はどう見ても若い女性だ。

この人がチカさんの……祖父？

「うーむ、チカの野郎は何も言っとらんかったのか？仕方がないのう……」

その人はガニ股でオレとカイの前まで歩き、その場で胡座あぐらをかいて座る。

「儂の名前は茨木浩史いばらきひろし。そのこのメイド服を着てるバカの祖父で、日本における『アウトロー』のトップをモンしてる者じゃ。気軽にフミさんとも呼んでくれたら嬉しいのう」

そう言つて、フミさんは笑つた。

「怪獣の幼体？別にええぞ、いくらでも匿つてやるわい」

許可は驚くほどあっさり取れた。

フミさんは意外と話しやすい人で、質問すると何でも答えてくれた。オレが改造人間サイボーグであることも、カイが怪獣であることも気にしない器のデカイ人だ。

フミさんがチカさんの祖父であることは事実らしい。というのも、フミさんが女性の姿をしているのは変化へんげによって性別を変えているからであり、元の性別は男なのだそうだ。

フミさん曰く、「男の姿をしていた頃は、女の家を遊び歩くヒモ男」だったらしい。チカさんの父親であり、オレの直属の上司であるオッサンもその時にできた子供だとか。

そして、フミさんが女性の姿をしている理由も語ってくれた。

「当時の儂は女遊びに飽きておつてな。次は美女に化けて、幼馴染のヤツを誘惑して遊んでやろうと思つたら、逆に喰われてしまったの

う。そのまま色々あつてヤツと結婚し、ヤツが亡くなった後も妻としての姿をしているというわけじゃ」

色々と破天荒な人だった。

チカさんとは似ても似つかないが、『アウトロー』のトップと考えると似合うと思ってしまう。いや、全力を出している時のチカさんとは、雰囲気似ているかもしれない。

その時、ふと疑問が浮かぶ。

「フミさんが『アウトロー』のトップってことは、フミさんはチカさんよりも強いんですか？」

フミさんは呆気にとられた顔を見ると、チカさんを見てため息を吐く。オレも反射的に同じ方向を見ると、チカさんは気まずそうに目を逸らす。

「儂はあくまでも日本ににおける『アウトロー』のトップに過ぎん。『アウトロー』とは日本だけにあるもんじゃないぞ。むしろ、大陸側の方が勢力はデカイのう。このバカはそれら全部を引っくるめた、『アウトロー』の序列二位ナンバーツーじゃ」

顔が引き攣る。チカさん、そんな凄い人だったのか。そんな凄い人なのにメイド服に対してはこんななのか。チカさんは目を逸らしたまま動かない。

普段の言動を知っているためか、微妙に納得しづらい。オレの内心に気付いたのか、フミさんは続けて説明する。

『アウトロー』には序列ナンバーズ持ちが九人存在するんじやが、どいつもこいつも儂なんかじゃ足元にも及ばん。特にこのバカの能力コピーとか、本当に馬鹿げとる」

「鬼ならみんなできる能力とかじゃないんすか？」



「無理じゃな。少なくとも僕には身体性能の書き換えと、他者に成りすますことしかできんのう」

それでも十分強力だと思うが、序列持ちとやらはそれだけ別格ということだろう。

チカさんはもはや蹲うずくまっている。顔は膝で隠されているが、耳が真っ赤に染まっているため、照れているのが丸わかりだ。褒められ慣れていないのかもしれない。それが、家族と友人の両方と一緒にいることで感じる妙な気恥ずかしさとかだろうか。

「くはははは、コイツがこんな顔になっているのを見たのは久しぶりじゃの。小学四年生のとき以来かのう」

「お祖父様!?! 思い出話はやめてちょうだいですわ!?!?」

「GYAU?」

何それ聞きたい。

小学生のチカさんとか、全然想像がつかない。しかも、チカさんが顔真っ赤になる出来事とか絶対面白い。

「奇怪な話し方をするのう。あの時は確か、近所の兄ちゃんを気に入って子分にするとか言い出しての……」

「ちよつとマジで黙れジジイ!?!」

「ほうほう、それでそれで?」

身を乗り出して、耳を澄ます。

だがその時、カイの不思議な行動が目に入る。カイは何もない天井をじつと見ていた。いや、正確には天井の更に先を見つめている。

更に、オレのスーパースーパーアイが微弱な揺れを感知する。建物や地面が揺れているのではない。空間が揺れている。直感的にとある存在が脳裏に浮かぶ。

オレはこれを知っている……何処で?

『緊急、上空から空間跳躍の兆候を感知』

AIからの緊急報告。オレの直感に根拠が生まれる。ワープを使える存在は、オレの知る限り一つだけだ。咄嗟に叫ぶ。

「上から宇宙人が来るぞ!!!」

直後、天井が崩壊する。

宇宙から人型のモノが落ち、部屋が爆心地に変わる。咄嗟にオレはカイを抱きしめ、チカさんはオレたちを庇う様に覆い被さる。

美しい屋敷が瓦礫に変わる。空にはブラックホールのような黒い穴がある。

爆心地には仮面をつけた男が立っている。

『解析、……失敗。推測、仮面による解析妨害』

相手が怪獣なら解析は成功するだろうし、相手が妖怪なら妨害する必要はない。ならば、仮面男は宇宙人だろう。恐らく、チカさんが言っていたジャミングの犯人で間違いない。

「カチコミかあ!？」

「オメエらア！エモノ持てやあ!!!」

「会長は後ろに下がってくださいえ」

『アウトロー』の半妖たちが集まる。

半妖は宇宙人に対して相性がいい。それにこの人数差で負けることはない。万が一がないように、仮面男を半妖たちが囲む。

チカさんは何かを警戒するように周囲を見渡し、フミさんは不思議そうに首を傾げている。

「件が予言しなかった襲撃じゃと？それに、ワープはまだ使えないは

ずじゃが……」

「おれ達がどれだけテメエら半妖に妨げられてきたと思ってる。対策ぐらい考えてんだよ」

答えは思わぬ所から返ってきた。

オレが今まで見てきた宇宙人とは、全てがコミュニケーションの取れない存在だった。当たり前だ、住む星が異なるのだから言語も異なる。いや、そもそも宇宙人は言語というコミュニケーション方法すら持っていないのかもしれない。

だが、仮面男は言葉を発した。ボイスチェンジャーのような不自然な声で、オレたちにも伝わる日本語で話した。

「件の予言はいつだって覆せねえ。逆に言えば、事前に予言があると覆せるような計画を練れば、おれ達は予言を回避できる」

その思考はどこかオレにも似ていた。

人類の思考を持った宇宙人、間違いなく強敵だ。

「貴様が予言を回避できた理由は分かった。じゃが、ワープとやらは月に一度しか使えないはずじゃ」

「オイオイ、んなことも分かんねえのか？おれ達が使うのは技術だぞ。応用することではしか発展しない半妖と違って、おれ達の技術は進歩する。空間跳躍技術が進歩した、ただそれだけだろおが」

「うーむ、随分と自慢げじゃな？じゃが、これだけの半妖を前に貴様一人で勝てるんでも？」

既に包囲網は出来上がっていた。

だが、嫌な予感がした。その思いはカイやチカさんが未だ警戒していることで補強される。

そして、空の穴からそれが降ってきた。

「たしかに宇宙人じゃ半妖には勝てねえかもな。だが、これならどうだ」

空から降ってきたのは怪獣であった。

怪獣の見た目は、一言で言うくと空中を浮遊するクラゲだった。触手のついた半透明の風船と言い換えても良い。体のサイズは大きく、その風船のような見た目も相まって、まるで気球のようにも見えた。名付けるならば浮遊怪獣だろうか。

そして、浮遊怪獣は一頭ではなかった。見渡す限りの空を大量の浮遊怪獣たちが覆う。

『解析、怪獣は体内が水素で満ちており、風船と同じ原理で浮遊』

「これは怪獣細胞からおれ達が量産した対半妖兵器だ。絶対的な相性差ってやつを分からせてやるよ」

「させませんわ!」

半妖たちに突っ込んできた浮遊怪獣を、チカさんがその腕力でブン殴る。浮遊怪獣は大して強くないようで、たった一撃で潰れる。

しかし……直後、浮遊怪獣を中心として大爆発が引き起こる。

『解析、水素に引火』

「あの浮遊怪獣全てが爆弾になるってことか!？」

「そいつらは死ぬと起爆するように作り替えている。テメエらに生半可な爆弾は効かねえが、強大な生命力を持つ怪獣そのものを爆弾に変えたら、どうだろうなあ?」

ただでさえボロボロな瓦礫が、更に吹き飛ぶ。そこにいたのが改造人間のオレであっても、無事では済まなかっただろう。

しかし、『アウトロー』<sup>ナンバースー</sup> 序列二位はそんな常識に縛られない。

チカさんは無傷だった。メイド服に汚れさえつけず、瓦礫の上に立っていた。

「この程度ですか？でしたら、相性差では覆せない圧倒的な實力差を見せてあげますわ！」

「やっぱ、この程度ではテメエは死なねえよなあ？ちよつとばかり、退場しといてくれ」

仮面男が指をパチンと鳴らすと同時に、チカさんの足元に黒い穴が生まれ、チカさんが穴の中に吸い込まれていく。

「チカさん!!!」

何が起こったのか、一瞬のことで全く分からなかった。分かるのは、この場において最大戦力であったチカさんが消えたと言う事実だけ。

「なあに、気にするな。ちよつとしたワープだよ。おれ達の母星に招待させて貰っただけさ」

「母星だと……?」

飛ばされた先が遠すぎて、全く想像がつかない。

宇宙人のホームグラウンドってことは敵の数がこちらとは段違いだ。それに、環境そのものが地球と異なるのならば、生存できるかどうかも分からない。

「心配するな、どんな罠が待ち受けていようと、チカが負けることはない。むしろ、重要拠点に半妖を招き入れる暴挙をしているのは、相手の方じゃ。最後の力を振り絞って暴れられても困るし、どうせ足止めを徹しておるのじゃろ?」

「その通りだよ、あんな化け物をウチに置いておけるかよ。長くても三十分で脱出するんじゃないかねえの？まあ、その程度じゃ間に合わせようがよお」

宇宙人は含みを持たせた言い方をして、オレたちを馬鹿にするように笑う。

「三十分でオレたち全員を倒すことができるんですか?」

「馬鹿かよテメエ。そもそもさあ、八年前に誘アブダクション拐されたテメエが、その八年間の記憶がねえのはどうしてだと思っ?」

コイツ、オレのことを知ってるのか!?

詳しく聞き返したい衝動を、ぐつと抑える。今はそれどころじゃない。

仮面男の言ったことはオレも不思議に思っていたことだ。

八年間ゴールドスリープされていたのか、それとも記憶を抹消されたのかのどちらかだろうと考えていた。

「それは時間の流れがちげえからだよ」

予想外の言葉に脳が停止する。

「相対性理論って知ってるかあ? 時間ってのは絶対的なものじゃない、場所によって時間の流れは異なる。例え、おれたちの星を三十分で脱出しても、ここでは何十時間も過ぎてるんじゃないか?」

「浦島太郎みたいなものか?」

『解説、相対性理論において重力の増加や速度の上昇によって、時間の流れは遅くなる。推測、宇宙人の母星は地球よりも重力が大きい、又は公転の速度が速い』

話の規模の大きさに脳がついていかない。

そんなオレを無視して、話は進む。

「そーいや言ってなかったな。分かってるかもしれねえが、おれ達の

目的はそこの怪獣だ。そいつを渡すなら大人しく帰ってやるよ」

「GYAU」

「渡さんよ、それは儂らに必要なものじゃ」

フミさんは断る。その目は義理や情とは別に、何らかの計算が秘められているようにも見えた。

話し合いは決裂した。そもそも、話し合いと呼べるものでもすらなかった。であれば、後のことは決まっている。

「だよなあ……それじゃあ、まあ殺し合おうぜ！」

宇宙人との激突が始まる。

### 03 オレの失ったアレ（下）

先に動いたのは仮面男だった。指をパチンと鳴らすと、仮面男の背後に複数の小さな黒い穴が生まれる。

『解析、超高熱蒸発光線』

AIの助言とともに、穴からビームが放たれる。それはオレの失った右手に付属していた兵装と同じ物だ。おそらく、あの穴から母星の兵装を呼び出しているのだろう。

しかし、オレには当たらない。オレのスーパーアイが空間の揺らぎを捉え、事前に分からないはずの銃口を丸裸にする。カイを抱えて、全弾回避する。

だが、敵は仮面男だけではない。

上空から触手が伸びてくる。浮遊怪獣の触手はパツと見ただけでも、数百本あるように見える。そして、その数百本の触手を持つ浮遊怪獣が、更に数百体も存在する。

一体一体の脅威度は大したことはないが、手数が多さや物量が多さが邪魔で仕方がない。しかし、浮遊怪獣は死ぬと起爆するため、殺すわけにもいかない。全ての浮遊怪獣を無力化する必要があるが、怪獣であるためか毒なども効かないので、防戦一方になってしまう。

必死に二つの脅威からの攻撃を避けていると、フミさんが黒服さんを伴ってこちらに近づいていく。どうしてか分からないが、フミさん達は全く仮面男に狙われていない。やがて、仮面男の攻撃が止まる。

「面倒くせえな、認識阻害か？攻撃しようとする、途端に殺意がブレやがる」



「黒服の能力じゃの。意識を逸らす程度の能力じゃし、長くは保たん

怪獣には効き目がないのか、黒服が浮遊怪獣の攻撃を防ぎながら、フミさんが話す。

「アウトラローうちの陣営は怪獣に弱い。だから、カイの力を借りたいんじゃない」

「GYA？」

「カイを？でも、火を吹くぐらいしか出来ないと思いますけど……」

しかも、今回の敵は宇宙人と怪獣だ。相性的にも有利でも何でもない。火を吹いたところで焼石に水だろうと思う。

「チカの野郎は本当に何も言つとらんいう。……そのままでして、戦争から遠ざけたかったのか」

「戦争って、何の話ですか」

「いや、今はいい。まずはカイについてじゃ、其奴は無意識に生命力を垂れ流しておるから、儂ら半妖はカイの近くにいて強化される」

妖怪を強化する能力か、昨日の妖怪が異常に強くなっていたのもそれが原因かもしれない。確かにこんな能力があれば、妖怪からも宇宙人からも狙われるだろう。妖怪にとっては自身を強くする強化アイテムで、宇宙人にとっては妖怪を強くする脅威となる。

……本当にそうか？

妖怪を強化する、ただそれだけのことで妖怪と宇宙人の両陣営からここまで危険視されるのか。新しく生まれた怪獣というのは、本当にその程度の異常性なのか。

思考を中断して、今は目の前のことに集中する。

「分かりました、カイをお願いします。カイもフミさん達を守つてくれ」

「GYAU！」

「了解じゃ」

「仮面男はオレが抑えるので、浮遊怪獣の対処をお願いします。相性的にはオレは怪獣を当たった方が良いでしょうけど、仮面男の……」

「ああ、原理が分かったぜ」

仮面男の声が話し合いを中断させる。

仮面男の顔は見えないが、その声が笑っていることに気づく。人を馬鹿にするような嫌な笑い方だった。

「この認識障害は攻撃させなくするんじゃないやねえ、テメエらを狙えなくするんだ。だったら、簡単だ。テメエらじゃなく、辺り一帯を吹き飛ばす!!!」

仮面男が指をパチンと鳴らす。

その音と共に空間が揺れ、目の前に黒い穴が生まれる。上空にある穴ほどではないが、大きな穴であった。その穴から浮遊怪獣が飛び出し、爆発する。

オレは空間の揺らぎから浮遊怪獣<sup>爆弾</sup>が出てくる場所が分かっていたため、頭を伏せて爆風を耐える。しかし、カイとフミさんは吹き飛ばす。黒服さんはいつの間にか視界から消えていた。無事を確認したいが、その隙はなさそうだ。

これこそがオレにしか仮面男を抑えれない理由。とにかく、空間跳躍<sup>ブ</sup>が厄介すぎるため、事前に空間跳躍<sup>ブ</sup>の位置を予測できるオレしか攻撃に対応できない。

「空間跳躍<sup>ブ</sup>使いすぎじゃないか？どこからそんなエネルギーを用意してるんだ」

「それも空間跳躍<sup>ブ</sup>の応用だぜ。おれ達はブラックホールとパスを繋げることで、莫大なエネルギーを手に入れた。たかだか、一つの星に寄

生しているテムエらには真似できねえだろうがな」

「ブ、ブラックホール……？」

『解説、ブラックホールは近づきすぎた物体を分解し、超高エネルギーのジェットを放出。推測、放出したエネルギーを空間跳躍で回収』

何かまた規模のデカイものが出てきたな。

空間跳躍を便利使いすぎだろ。あと、宇宙人なのに普通に話せるの違和感があり過ぎて混乱する。

「おれたち宇宙人のあらゆる技術の根幹には空間跳躍が関わっている。エネルギー炉心だけじゃねえ、兵装展開も時間停止も全部が空間跳躍の派生だ。こんな風にな！」

「うおっ、ちよっ、話しながら攻撃するな！てか、えっ、オレも空間跳躍使ってたのか!？」

「はあ？当たり前だろ。そもそもテムエが勝手に持ち出して、逃げんだろうが」

どういうことだ……？

オレの記憶に残っているのは、宇宙人に誘アブダクション拐された所までだ。その後、異星でどう過ごし、どうやって帰ってきたのかは知らない。

そして、宇宙人の話によると相対性理論とやらで、異星に滞在した時間は一瞬だった。つまり、改造されていた時間しか異星にいなかったのだろう。だから、オレが帰って来た理由も宇宙人によるものだと思い込んでいた。

射撃ユニットで応戦しながら会話する。

「へえ、覚えてねえのな。まあ、それも仕方ねえと思うが」

「……なあ、オレの記憶を確認できるか？何か残ってないか？」

『……実行、ログ確認。回答、記憶なし』

オレに何があつたんだ？

一つ謎が解けたと思ったら、また謎が増えてしまった。

「よく分からねえが、どうでもいい。おれが殺してスッキリさせてやるよ」

「待ってくれ、聞きたいことが沢山あるんだ！まず何よりも、何でオレを女の子にしたのか聞きたい!!」

「知らねえよ、作った奴の趣味じゃねえの?」

マジでそんな理由なのか!?ふざけやがって、絶対に男の身体を取り戻してやる。

怒りを推進力に変えて、真っ直ぐ突っ込む。相手の武器が空間跳躍である限り、距離を取ることに意味はない。左手の近接ユニットから一本の剣を取り出す。

「スパッとソード!」

「絶対そんな名前じゃねえだろ!」

『訂正、超音波振動剣』

この剣は粒子レベルで振動し、チェーンソーのように回転して物体を切り裂く兵装だ。仮面男が身を包む謎の装甲も切り刻めるだろう。対して、仮面男も一本の剣を取り出す。それは光り輝く一本の剣だった。オレの剣と仮面男の剣が激突する。

『解析、光熱素粒子剣』

オレの剣が溶かされる。切り裂く以前に、触れることすら出来なかった。オレの兵装に対する最適解を一瞬で提示しやがった。そのまま、ビームサーベルでオレを攻撃する。しかし、大した速度ではない。

仮面男の攻撃を全て回避し、また接近する。避けてから気づいたが、仮面男は近接戦闘において素人だ。仮面男がオレの頭に向けて、

ビームサーベルを振るう。だが、それより前にオレの左手が仮面男に直撃する。その一瞬前……

『緊急、背後に空間跳躍の予兆』

全力で横に飛ぶ。地面を転がり、肩で息をする。

もし攻撃を優先していたら、飛ぶのが少しでも遅かったら、オレは背後から真っ二つになっていただろう。仮面男の空間跳躍はただ距離を無くすのではなく、全方位から攻撃を行えるという点が何より面倒だ。死角からの攻撃はオレのスーパードライにも映らない。そして、もう一つ気づいたことがある。

「指を鳴らしてたのはブラフか」

「当たり前だ。指パツチンなんて面倒くせえ起動方法、誰が採用するかよ」

『推測、脳波による発動』

強い訳ではない。空間跳躍があるとはいえ、単純な強さならば昨日や一昨日に戦った怪獣や妖怪の方が上だ。

だが、とにかくやりづらい。なんとと言っても、こちらの攻撃が全て読まれているのが最も面倒くさい。オレを改造人間にしたのが宇宙人であるなら、オレに搭載してある兵装を作ったのも宇宙人だ。兵装の機能も特性も、全ての情報が把握されている。

『想定、大規模な空間跳躍にはチャージが必要』

確かに、それが出来るのなら一瞬でオレは死んでいただろう。すぐに大規模な空間跳躍ができないのなら、取れる手段が一つある。

「とりあえず、煙幕！」

『起動、隠密ユニット』

「なっ、逃げるつもりかテメエ！」

ガン無視して、一旦退却する。

大規模な攻撃ができないということは、少しの間なら放っておいてもいいということだ。今はとにかく、考える時間が欲しい。

煙幕の中を走りながら考える。仮面男が煙幕から抜ける前に、対策を思いつかないといけない。

AIが整理した情報を閲覧する。それっぽい策は思いつくが、現実的ではない。

「どうしたもんかな……」

「どうしたんじや？」

「えっ!？」

すぐ横にフミさんが立っていた。浮遊怪獣との戦いが激しかったのか、着物が所々破れている。直視するのは色々とダメな気がしたため、目を逸らす。

カイや他の人たちは見当たらない。何かあったのかと心配になる。

「安心せい、他の者は怪獣どもを抑えておる。レイだけに宇宙人を任せるのも悪い気がしての、手伝いに来たのじゃ」

「……だったら、お願いしたいことがあるですけど」

オレ一人じゃ、仮面男には勝てない。

腹をくくる。情けない策を考える。オレはオレの持ちうる全てを使い、全力で人に頼る。

未だ張られている煙幕に飛び込み、感知能力を高める。その中で仮面男を見つけ、死角から近づき奇襲する。

何度も拳を振るい、弾丸を射撃する。

その全てを避けられる。あと数ミリが届かなず、煽るようにストレスで避けられる。

「当たる訳ねえだろ。おれが持つ情報はテメエの持つ兵装だけじゃねえ。機体のパーツのサイズからその可動域まで全部把握してんだ、テメエに勝ち目はねえよ」

「お前、オレのことを何にも分かかってないな？」

「……何だと？」

オレが改造人間である限り、宇宙人から与えられた力に頼っている限り、仮面男に勝つことはできない。

だが、それがオレの全てじゃない。オレが自分で手に入れたものは沢山ある。人脈や戦闘技術だけじゃない、オレの感情そのものがオレの力になってくれる。

例えば……性別に対するコンプレックス、とか。

「お前が知ってるのは改造人間の機体のことだけだ。お前は天城レイのことを何にも分かっちゃいない」

『起動、肉体偽装開始』

瞬間、比喻などではなく文字通り肉体が変化する。150cmを下回る身長が190cm以上に、美少女の見た目が男に、鋼が肉の身体に変化する。

肉体偽装ユニットは、チカさんにメイド服を着せられる羞恥心に耐えかねて製造した兵装。オレがAIと共に、地球で自作した物だ。

「男になるだけの兵装、それに何の意味がある!？」

「お前らには分からないだろうけどさ。オレはこれでも、改造人間にされて女の子になったことに、ショックを受けてるってことだよ」

もちろん、肉体偽装ユニットは戦闘には何の役にも立たない。むしろ





というか、そもそもの原因は宇宙人だろ。オレを改造したのも、こんな機能を開発したのも全部宇宙人だ。マジで殺してやる。

「な、何も分からねえ……意味不明すぎる。どこに怒るポイントがあった。どうして、そんな兵装を作った。そもそも、テメエらの行動は全く理解できねえ。あの怪獣を守るのもどうしてだ。それはテメエらにとっても脅威だろおが!!!」

「特に理由なんて無いよ。助けたいと思った、ただそれだけだ」

難しいことなんて何も無い。

助ける理由も、助けられない理由もいくつだって思いつく。だったら、後は自分がどうしたいかだけだ。例えそれが人類の脅威であったとしても、助けたいと思ったならば助けるべきだ。

「オレからしてみれば、お前たちの方が意味わからないよ。どうして襲撃してきた、どうしてカイを狙う。そもそも、どうして地球に侵略してきたんだ？」

仮面男はイラついたように頭を掻く。いや、仮面男と呼ぶべきではない。その仮面は限界に達し、ひび割れる。雰囲気が変化する。スーパァーアイが何かを捉えた訳ではないが、オレにはその宇宙人が何かに起こっているかのように感じる。

「どうしてだど?……テメエがそれを聞くかよ、滑稽にも程がある」

宇宙人の仮面がポロポロと崩れ落ちる。今までボイスチェンジャーでも使っていたのか、本当の声が聞こえる。宇宙人の……その人の素顔が明らかになる。

190cmを超える身長、運動部に相応わしい筋肉、声は低く、可愛らしさなどカケラもない。

オレはそいつの顔を知っている。

オレはそいつの声を知っている。  
オレは誰よりもそいつを知っている。  
そいつの名は……

「おれの目的はただ一つ。テメエに奪われた天城レイっていう記憶を取り戻すことだ」

宇宙人は……否、天城レイは言う。

「おれが本物の天城レイだ。テメエはおれを記憶をインストールした人型機械に過ぎねえ」

「……ち、がう」

天城レイの言葉を否定したいという気持ちだが、心の奥底から生まれる。だってそれは、オレというアイデンティティの否定を意味するからだ。

しかし同時に、その通りかもしれないという思いも浮かぶ。

「何が違う。本当に自分が天城レイだと、心の底から思い込んでいたのか？それとも、天城レイでなくても受け入れてくれる仲間や友達でも見つけたのか？」

「ちがう……」

戸惑い、驚き、悲しみ、怒り、諦め。

様々な感情が心に巡り、脳内が混沌に満ちる。周囲の音も、AIの声も聞こえなくなり、世界に自分とヤツしか存在しないように錯覚する。

「だがそれも、本当はおれが享受するはずのものだ。何もかも、おれからテメエが奪ったものだろうおが。全部返してもらおうぞ」

そして、ヤツの言うことは全て事実なのだろうと納得してしまおう。だって、否定する理由が見つからない。自分が偽物であるガラクダことを認めよう。

そして、そして、そして……

「だから、論点が違うだろうが」

そして、それら全ての感情を握りつぶす。

思考を巡らせる、世界を認識する。

「お前の身の上話も、オレの正体だってどうでもいい。オレが聞きたいのは、テメエがカイを狙う理由だよ」

そうだ、最初の話思い出せ。

オレが偽物かどうか、ヤツが天城レイかどうか。そんなものは何も関係ない。ヤツがオレをどれだけ憎もうと、それはカイを狙う理由にはならない。

ヤツの発言に惑わされるな。

もしも、オレの記憶が何もかも偽物だったとしても、オレがカイを助けたいと思ったことは絶対に本物だ。

「流石にこれぐらいで心が折れることはねえか。まあ、安心しろよ。テメエは間違いなく本物の天城レイだよ」

「そうかよ、そりゃ良かった。それで、お前は何者だ？」

ヤツが笑う。物理的な仮面だけでなく、天城レイという仮面さえも捨て去り、オレを嘲笑う。

「おれも天城レイだぜ、おにいちゃん？」

「……まさか」

ヒントはあった。

浮遊怪獣、それは宇宙人が討伐した怪獣の細胞から量産されたモノ。全ての個体が元となった怪獣と同じDNAを持ち、全てが元の怪獣と同一とも言える存在。

仮面が剥がれ、解析妨害をすることも出来なくなったヤツをスーパーアイで観察する。その結果はすぐに分かった。

『解析、DNA一致率100%』

「人造人間か!？」

「名乗るなら天城セカンドって所かねえ。まあ改造されたテメエとはDNAは一致してねえがな」

安直な名付け方だが、分かりやすい。セカンドのネーミングセンスはオレと同程度だろう。

「それで、そのの怪獣を狙う理由だっけ?そんなもん、そいつがおれたちの脅威になるからに決まってるんだろお?」

「脅威だど?例え妖怪を強化できるとしても、怪獣にとって宇宙人は天敵だろ。どうして脅威になるんだ」

セカンドはオレとは似つかない顔で笑う。

「言うわけねえだろ。そもそも、どうしておれが行儀よくテメエとの会話に付き合ってると思ってるんだ……時間稼ぎだよ!」

セカンドが手を上げ、言い放つ。スーパーアイが空間跳躍の前兆を観測する。だが、逃げられない。その範囲は屋敷全域に及ぶ。

「わざわざテメエらと戦う必要なんてカケラもねえ!このまま宇宙の彼方にぶっ飛ばしてやらア!!!」

空間が揺れる。準備が完了する。  
そして……

「は？」

何も起こらない。  
空間跳躍が不発する。

「ど、どうしてだ!?なんで発動しねえ!?チャージは終わってるはずだろおが!!」

「そんなもん、決まってるだろ。チャージした分はもう使い切ってるんだ。空を見ろよ」

「は……」

それは言葉というよりも、息を飲む音だった。

そこにあるのは黒い穴、そして穴にも負けないほど暗い夜。

「さっきまで昼だっただろおが!?どうなってる!？」

「分からないか?相対性理論だよ」

セカンドはもう声すら上げなかった。

「お前の空間跳躍で下と上を繋ぎ、地面ごとオレたちを瞬間移動させた。瞬間移動で加速され続けたオレたちは、周囲と比べて時間の流れが遅くなった」

スキンヘッド忍者さんの瞬間移動はチカさんと異なって、視界内の範囲にしか移動できない。だが、空間跳躍の穴を経由することで、移動距離は無限に引き伸ばせる。

そして、瞬間移動は距離に関係なく移動にかかる時間は同じであるため、移動距離が長くなるほどその速度は速くなる。

「だが、どうやっておれの空間跳躍を使った!? しかも、おれ自身にも気づかせないで!」

「それは儂じゃな」

隠れていたフミさんが現れる。

その姿は女性の姿ではなく、天城レイ……つまり天城セカンドと同一のものだ。

「貴様が言ったんじゃ、空間跳躍は能力ではなく技術じゃと。レイ曰く、それは脳波に反応するものらしいのう。ならば、貴様に変化すれば儂にだって使える。こつちには認識されなくなる半妖だっているのう」

側から黒服さんも現れる。フミさんが隠れたのも、セカンドが周囲から意識を逸らしていたのも、全てはこの人の……ぬらりひよんの認識障害の力だ。

本来なら、変化も瞬間移動も認識障害もここまで強力な能力ではない。だが、カイが生命力をフミさんたちに付与することで、時間を曲げるほどの無理が可能になった。

「……時間が遅くなったから何だっただ。状況は全く変わってねえ。おれには怪獣だっている!」

「怪獣の対処法はもう思いついてる。あいつらは風船と同じ原理で浮いてる。つまり、地上にいるには、何らかの重りが必要だ。そして、その役目はあの触手が担ってる。わざわざ、怪獣たちを殺さなくても、触手さえ切り落とせば勝手に空へ飛んでいく」

それについては、既に他の半妖の人に伝えてもらっている。これだけ時間が経過していれば、もう対処は終わっているだろう。セカンドは黙り込む。憎悪の籠った目でオレを睨みつける。

「それにどうしてオレがお前に話しかけたと思ってる。オレの話も、時間の流れを遅くしたのも、全部時間稼ぎだよ!!!」

直後、空間跳躍<sup>ワープ</sup>の黒い穴から一人の少女が飛来する。メイド服を着て、額から角を生やした少女であった。

「……う、そだろ。速すぎる!?!時間稼ぎを含めても、まだ数時間しか経ってないんだぞ!?!」

「あら、いつの間にかこんなに時間が経ってましたのね。十分で戦いを終わらせておいて正解でしたわ」

オレがセカンドを倒す方法を考える必要なんてない。他力本願にも程があると思うが、チカさんさえいればオレたちは勝利する。

「では、こちらのお掃除もいたしますわ」

一瞬だった。チカさんが手を振った、ただそれだけの動作で何もかもが吹っ飛んだ。何をしたかも分からなかった。残っていた怪獣、瓦礫、それら全てが消え去る。

これこそが日本最強の半妖。周囲の被害を考えなければ、戦いは一瞬で終わる。

「今日の所は撤退させて……」

「させるんでもお思いでっ…」

セカンドは悔しそうに吐き捨て、空間跳躍<sup>ワープ</sup>を起動させる。だが、チカさんはそれを逃さなかった。

チカさんの腕がセカンドを貫く。そして、貫いた腕で臓器をまさぐり、心臓を抉り出す。セカンドは口や腹など、体のあらゆるところから血を吹き出す。

「……おれを殺しても、テメエらの死は変わらねえぞ。もう、第二次超常戦争は止まらねえ」

「では、その時に貴方のお仲間もあの世に送って差し上げますわ」

チカさんは最後に、セカンドの頭を撃ち砕く。それで終わりだった。

セカンドの死体は、発動していた空間跳躍ワープの穴に吸い込まれて消えていく。やがて、その穴も空の穴を消える。

一瞬のことで、何も口を挟めなかった。

相手は倒すべき脅威だったとしても、死を目の当たりにしたことで胸に重いもの積もる。

「なあ……結局、戦争って何のことなんだ？ どうしてカイは狙われた？ この戦いは何のために起こって、どんな結果になったんだ!？」

『……』

セカンドと戦った。殺してやると思った。

だが、実際に死を目の当たりにすると、他の脅威とは受ける気持ちが大きく異なる。見た目が人間だから、それとも……オレだからか。相手の目的も心情を知らないまま、何も考えず殺させたことは本当に正しかったのか？

胸に後悔が積もる。

取り返せない失敗に心が痛む。

自分の手を汚しさえしない自分に嫌気が差す。

オレはきつと、この戦いの本質を何も分かっていたいなかった。

「……分かりました。お話いたしますわ」

「じゃが、まずは場所を変えるぞ」

超常戦争はまだまだ始まらない。



夜はまだ始まったばかりだ。

## 04 君に幸あれ（上）

夢を見る

家族の夢を見る。かつての幸せを、もう取り戻せない日常を夢見る。そして、最後にはそこにたどり着く。

……泣き叫ぶ母。何を言わない父。

両親は記憶よりも老けて見えた。八年の歳月のためか、それとも息子を失ったストレスの影響だろうか。

父は何か言おうとし、躊躇っていた。

あの時、父は何を言いたかったのだろう。

あの時、オレはどうすればよかったのだろう。

遠くから声が聞こえる。夢が終わる。

また、現実離れた現実が始まる。

「あら、目が覚めましたわね」

ビクツと、身体が跳ねそうになるのを抑える。チカさんがオレの顔を見下ろしていた。少しでも動くと言がぶつかってしまう、それか唇がそーゆー感じになってしまうほど顔が近い。

「起こそうと思ったタイミングで起きられると、逆に面白くないですわね」

「GYA〜」

オレの膝の上にはいたカイが欠伸あくびをする。辺りを見回すと、オレはチカさんに膝枕されていたようだった。前の座席にはフミさんが、運転席には黒服さんが座っている。

ここは車の中だった。昨日の戦いの後に詳しい話をすることが決まったが、夜も遅いことや他の様々な理由から、話を中断して別の場所に向かっている。結局、オレはまだ戦争についてほとんど何も聞い

ていない。

「出発したのって昨日の夜でしたよね。まだ到着してないんですか？」

「そうじゃな。レイの右手を取りに梅田に寄ってたのもあるが、それ以外にも妨害されてるようじゃ。『ガバメント』は一般人を巻き込まないように、市街地で襲撃してくることはなさそうじゃが、ある程度は嫌がらせしているのじやろう」

これが理由の一つ。

オレたちは今、『ガバメント』に狙われている。きつかけは単純で、昨日の宇宙人襲来がSNSで拡散されたことだ。拡散された映像には、オレとカイの姿が映っており、世界平和を目指す『ガバメント』は違法改造人間と人類の脅威を許せないため、オレたちを狙っているとのことだ。

「そう言えば、そもそも何処に向かっているんですか？それに、防衛なら本拠地の京都にいた方が良かったんじゃないですか？」

「向かう先は淡路島じゃ。京都で『ガバメント』を迎え撃つと、『アウトロ』の家族を巻き込んでしまうからの。それで、淡路島を目的地に選んだ理由じゃが……」

「淡路島が生命力溢れる廃棄都市だからですわ！」

解説役を取られて拗ねていたのか、チカさんが大きな声で割り込む。

「淡路島は神によって最初に産み出された島です、古事記にもそう書いてありますわ。だからかは知りませんが、星の生命力が溢れて、妖怪の発生率が日本で最も多い場所でもありますわ。多すぎて今は廃棄されていますので、一般人を巻き込む危険性もありませんわ」

「星に生命力ってあるのか？」

「ありますわ……むしろ人間なんてちっぽけなものよりも、星の生命力こそが妖怪の原材料と言っても過言ではありませんわ。だからこそ、ガイア仮説が成り立つ訳ですわ」

「……ガイア仮説？」

話が逸れてきたな。

ガイア仮説って、怪獣に関わるやつだっけ？

「十年前は、怪獣は古代に生きていた生物が復活したものだと言われていましたわ。ですが、古代であっても怪獣が自然に生まれる環境なんてありませんわ。それに代わって主流になったのがガイア仮説、怪獣というのは宇宙人という外敵に反応して生まれた星の抗体であるという仮説ですわ」

「星は生きていて、宇宙人を倒すために怪獣を作ったってことか……」「この仮説なら、三つの脅威が同時に襲って来た理由も説明できますわ。まず、宇宙人の襲来。その次に、抗体として怪獣の誕生。最後に、怪獣の生命力に釣られて妖怪の繁栄という流れですわ。……まあ、この仮説ではカイの誕生を説明できないので、間違っているのかもしれないけど」

「GYAU?」

カイはそんな異常な存在だったのか。

翼をパタパタして遊んでいる姿からは、そんなことは想像もつかない。

「じゃあ、オレたちが『ガバメント』に狙われてるのも、カイの存在が大きいってことかな」

「いや、レイがオーバーホール・サイボーグ全身義体改造人間であることも大きいじやろうな」

おーばー……何それ？

『ガバメント』には多くの改造人間サイボーグが所属していますわ。というより、サイボーグ技術はあそこが全て独占してますわ。ただ、そんな『ガバメント』でも全身の改造に成功した例は、世界で十二機しか存在してませんわ」

「つまり、レイは十三機目の未確認成功例という訳じゃな……:というか、レイはサイボーグ技術の本流である宇宙人に作られたのだから、むしろレイが一例目と言った方がいいのう」

「あら、妹が十二人も増えましたわね！」

「多いよー」

最近弟が一人増えたばっかだぞ!?

……その弟はもういないのだが。

「……どうかしたんですの？ 顔色が悪いですわ」

「い、いや大丈夫。それよりも、妹が十二人って言ってたけど、オーバーホールオーバーホール・サイボーグちゃんやらかんちゃんやらって全員が女性なのか？」

『訂正、全身義体改造人間』

「宇宙人の技術が本流と言ったでしよう？ 宇宙人が持ってた全身義体改造人間オーバーホール・サイボーグについての情報はレイさんの機体からだのみですわ。よって、それを元に作られた地球産の全身義体改造人間オーバーホール・サイボーグも、全員が女性に改造されていますわ」

オレがモデルってことは、造られたのは結構最近なのか。というか、オレのせいで十二人の人たちが女の子になってしまったと考えると、何が申し訳なくなってきた。

「もしかして、『ガバメント』に改造人間サイボーグが固まってるなら、逆に半妖が多い『アウトロー』は有利なんじゃないか？」

「そうですね。ですので、『ガバメント』は自前の改造人間サイボーグを投入するのではなく、『カンパニー』の超人たちに依頼しているでしょう。『ガバメント』が世界の平和、『アウトロー』が義理と人情で動く組織

ならば、『カンパニー』は金で動く組織ですから」

……超人？

何かまた知らない言葉が出てきた。八年のブランクのせいか、まだ知らないことが多い。意味が分かかってなさそうな顔をしたオレを見かねてか、フミさんが補足の解説をしてくれる。

「人類の脅威に相性があるのは知っておるな？ 人類もそれを利用しておる。例えば、儂ら半妖が宇宙人と戦い、レイたち改造人間が怪獣と戦っているようになる」

「……つまり、怪獣の力を利用して妖怪と戦う人たちってことですか？」

「そうじゃ。超人というのは、怪獣細胞に適合した新人類のことじゃな。強力な生命力と特殊な生態を保有し、そのほとんどが『カンパニー』に所属しておる」

「橋が見えてきましたわよ」

最終的にフミさんに解説役を取られことが気に食わないのか、口を尖らせながらチカさんが言う。

神戸と淡路島を繋ぐ橋、明石海峡大橋が見えて来る。そこで、ふと疑問に思う。チカさんの機嫌を良くするためにも、気になったことについて質問する。

「妖怪が大量に発生してるなら、橋を落とした方がいいんじゃないか？」

「……妖怪が人の思念によって形作られるという話はしましたわよね？ 例えば、グレムリンという海外の妖怪がいますわ。グレムリンは簡単に説明すると機械をバグらせる妖怪ですが、機械が人類に造られる前には存在しなかった妖怪ですわ」

「……新たに妖怪が発見されたわけではなく、新たな妖怪が作られたってことか。でも、それと橋に何の関係があるんだ？」

「人は淡路島に対して畏れを抱いていますわ。今は橋の防衛線が突破されたらどうしようという恐怖ですが、橋そのものが無くなれば恐怖の内容も変わりますわ」

それは、つまり……

「妖怪が更に強化されるってことか？」

「強化とはまた違うかもしれませんが、海を泳いだり空を飛んだりする能力を得ることは間違いないですね。ですので、この橋は無くなったら大変なも、の……？」

その橋がグラグラと揺れる。

地震かとも思ったが、A Iが別の者を報告する。

『報告、前方に敵影発見』

直後、明石海峡大橋が崩壊する。

原因は明らかだ、一人の男がその拳で橋を叩き割った。能力や技術などではない。真正銘ただの腕力、怪力という生態によって鋼の建築物を破壊する。四人乗りの自動車が橋から転落する。

だが、それだけでは終わらない。

「らるえるれらるえれれ」

「でやがりましたわ……あれが淡路島に湧く妖怪の一つ、海坊主ですわ！」

海坊主がその巨大な手で、自動車ごとオレたちを握りつぶす。チカさんが自動車の屋根ごと海坊主の腕を消し飛ばすが、大した意味はない。海坊主は淡路島にとってはザコに過ぎず、そこらじゅうに何体でも存在している。

そして、事態はその程度でも収まらない。

『緊急、上空からの狙撃』

「海に飛び込め！」

大爆発。

それは狙撃というよりも、砲撃というべき規模だった。それとも、自動車のガソリンに引火でもしたのだろうか。真相は不明だが、オレたちは謎の男・海坊主・謎の狙撃手の攻撃によって散り散りに吹き飛ばされた。

ここから、三大勢力による争奪戦が始まる。

「ゲホツゲホツツ!!」

砂浜に漂着する。海水と砂利が口の中に入り、咳き込む。機体からだの中に水が入ってる感触もある。辺りを見回すが、近くにはカイもチカさんたちもいない。

だが、誰もいない訳ではない。

「標的ターゲットが流レ着クトハ、運ガヨイ」

『注意、敵影接近』

黒いフードに黒いマスク、黒い手袋をつけた男が歩いて来る。先程の橋を叩き割った男とは別だが、同一の雰囲気を感じる。この真つ黒男は先程の男の仲間だろう。

「命マデハ取ラヌ、死ヌガ良イ」

「一言で矛盾してるじゃねーか!!!」

『緊急、後方へ回避』



ボックスステップで相手の攻撃を避ける。

砂浜が弾け飛ぶ。速い、攻撃を見てからの回避では間に合わない。だが、攻撃の正体をスーパードアィが捉える。

「電撃……それも妖怪のような能力ではなく、生態としての放電!？」

『解析、身体構造が電気魚に類似』

「化ケ物共ト一緒ニスルナ。拙者ハ新人類、超人デアルゾ」

これが超人！

妖怪のように世界から外れた力を振るうのではなく、生物的な生態の延長として力を振る者。電気超人とでも呼ぶべきか。

「逃ゲラレンゾ、電磁波デ居場所ヲ探知デキル」

「逃げないよ、お前程度ならオレ一人だつて勝てるさ」

「何ダト？舐メルナヨ小僧、拙者ハ『カンパニー』ノ中デモ……」

「お前の生態が電気魚と類似してること、そしてお前が元からこの砂浜にいたことから、お前の弱点は分かったよ」

そうだ、電気超人はオレを探してこの場所にいたのではない。元からこの砂浜に待機していた。それは何故か……決まってる。電気超人が全力を出せる場所、いや全力を出さなくてもいい場所がここしか無いからだ。

「お前は電気を放てるが、その電気はお前も感電してしまうんだろ？だから、お前は自分が死なない程度の電気しか放てない。だが、その程度の電気では相手にも効かない。だったら、どうすればいいか……海水だろ？」

「ソノ通りダ。標的ターゲットヲ海水デ濡ラシテ電気抵抗ヲ下ゲテオク、コレガ拙者ノ戦法ダ。ダガ、分カツタ所デ何モデキマイ。濡レタ身体ハ一瞬デハ乾カナイダロウ？」

「乾かす必要なんてない、お前が電撃を出せなくすればいいだけだ！」

全力で走る。

電気超人の放つ電撃自体は文字通り雷と同じ速度であるが、電撃を放つ速度は大したことがない。一発でも当たれば動けなくなるかもしれないが、オレの方が速い。

このまま電気超人を攻撃してもいいが、怪獣のように再生を始める可能性がある。そして、オレに人間を殺すのは無理だ。であれば、手は一つ。

近づいた電気超人に抱きつき、胸を顔に押し付ける。

「ナ、ナニヲス……ガボツツツツ!?」

「オレの胸で溺れる!!!」

『展開、胸部より海水放出』

昨日、天城セカンドが言っていたことを思い出せ。オレも空間跳躍ウツロを使っている。それで思い出したのが兵装展開の原理だ。オレは兵装を機体からだに収納しているが、普通に考えると全ての兵装を収納するにはオレの体積が足りない。

つまり、オレは出口のないワープホールを作ること、亜空間ポケットを生み出していたということだ。俗な言葉で表現するならば、アイテムボックスだろうか。であるならば、兵装以外のものも収納できるはずだ。

例えば、海水とか。

電気超人が暴れる。だが、近接性能ではオレの方が上だ。しかも、電気超人は得意の電気を放てない。今、放電すると真っ先に感電するのは電気超人の方だからだ。

身体を押さえつけ、口に大量の海水を流し込む。やがて、電気超人は気絶する。心臓は動いているので、時間が経ったら回復するだろう……多分。

しかし……

『注意、仮称電気超人の意識が覚醒』

「……は？」

「マダ、終ワランゾ！」

しかし、まだ電気超人は終わらない。

オレの足を掴む。そうだ、海水に濡れていたとしても、自爆覚悟なら放電することだってできる。そして……

「なんちやってな!!!」

「はあ!？」

雰囲気が変わる。明らかに先程の電気超人とは別人の印象を受ける。だが、スーパーアイは何も捉えない。何も変わってはいない。

「レイちゃん一人で勝っちゃうとか、ヤバすぎ♪ とゆるか、おっぱいちよー柔らかいね☆」

『解析、原因不明』

何も分からないとなると、妖怪か半妖の能力によるもの……意思疎通出来るということは、半妖である可能性が高いか？ いや、超人と半妖は相性が悪いはず。

そこで、昨日のことを思い出した。相性差はよつぼどの事がないと覆らないが、よつぼどの事さえあれば覆る。つまり、絶対的な実力差。

『『アウトロー』の半妖……それも序列持ちクラスナンバーズの半妖だな？』

「せーかい☆」

笑う、嗤う、嘲笑う。

無意識のうちに後退りする。

「妾の名はジュウ、九尾の狐の半妖。『アウトロー』最強の序列一位ナンバーワンで

ある。……気軽にジユウちゃんと呼んでね☆」

ナンバーワン  
序列一位……!?

あのチカさんよりも上の順位、世界最強の半妖。オレでは逆立ちしても勝てない相手だ。

「……どうしてジユウちゃんみたいな偉い人が、こんな所に？」

「正確には妾はジユウじゃないけどね♪」

「どういう意味ですか？」

「九尾妾の狐の能力は洗脳。単体では弱そうだけど、能力の効果範囲が地球よりも大きいって言えば危険度が分かるかな♪」

やろうと思えば、世界中の人がこの人に洗脳されるということか？

いや、それなら『ガバメント』や『カンパニー』といった勢力が生まれるはずがない。恐らく、効果範囲を広げすぎると、洗脳の効力も弱まるのだろう。……それでも、強力なことに違いないが。

「つまり、貴方は自分がジユウさんだと思い込まされた電気超人ってことですか？」

「そうなの！妾つてば、お外で遊ぶには貧弱だからね♪ それで、ここに来たのは戦争のための駒を揃えておくためかな☆」

……また戦争か。

結局、淡路島に着く前に襲撃されたので、それが何かはまだ知らない。

「あれ、聞いてない？そんな勿体ぶる話でもないと思うけど……ま、いつか☆ 戦争ってゆーのは、第二次超常戦争のこと。日本のくだんちゃんが、地球人と宇宙人の大規模な衝突が起こるよって予言したの☆」

「くだんの予言ってことは覆らないのか!？」

「そうだね〜♪ 妾のこの序列ナンバースリー三位も同意したし、『ガバメント』の演算装置も似たような予測したもんね☆」

「マジか……でも、ジユウちゃんは対策を考えてるんだろ？ 余裕そうな顔してるし」

「そうそう、そのために駒を集めてるの☆ あつ、レイちゃんとカイちゃんは強制出兵だからね〜♪ そんな訳で、妾はレイちゃんたちを助けにきたのさ☆」

そう言つて、ジユウちゃんは握手を求めるように手を突き出す。オレはその手を……

叩いて払う。

「……………」

『……………』

「…………ふふふふふふ、バレた？」

「思考誘導だろ？」

「流されないとか精神力ヤバすぎ〜♪ どうして気づけたの？」

忘れるな、気を逸らすな。目の前のコイツは襲撃者だ。オレは明らかにコイツに気を許し過ぎていた。コイツの話信じらなければ、世界中の思考を誘導するぐらいはできるだろう。そして、何よりそもそもの話だ。

「オレの見た目が女でも、お前の見た目が男でも、オレが初対面の女の子をちゃん付けで呼べる訳ないだろう。思春期を舐めるなよ」

「ぶはははははははは!!」

「そもそもの話、淡路島に来た経緯だつて不自然だった。戦争の話もいつまでもしないのも、オレがそれに言及しなかったことも不自然だ。……いつから思考誘導していた、どこまでが本当の話だ？」

「思考誘導は昨日の夜から、今までの話は全部本当だね☆ まあ、戦争自体の解決策は考えついてるし、余裕なんだよね〜♪ 問題があると

したら、その後始末かな？」

視点が違いすぎる。

人類の脅威を何とも思っていない。目の前のことで精一杯なオレとは次元が違う。

「戦争に勝って平和になるのなら、問題なんてないだろう」

「それがあるんだよね〜♪ 『アウトロー』の勢力図の話サ☆ レイチちゃんはさ、ナンバース序列持ちの何人が日本出身だと思う？」

「……一人か二人。じゃないと、トップがフミさんである理由が分からない」

「ところがどっこい、九人中四人が日本出身なんだよね☆ これは明らかに多いよ、中国出身は二人しかないのにね〜♪」

ナンバース序列持ちの約半分が日本出身。それも中国の二倍だ。

聞いてた話では、『アウトロー』の勢力は日本ではなく中国が本場のはずだが。日本のトップがフミさんなのは、日本のナンバース序列持ちに大きな権力を持たせたくないという背景があったのかもしれない。

「まあ、妾一人で『アウトロー』の武力の九割を担っているから、そこはどうでもいいんだけどね☆ ただ、チカちゃんはヤバすぎる」

「……でも、チカさんはナンバース序列二位。お前の方が序列は高いはずだろう？」  
「妾がナンバース序列一位である理由はただ一つ、チカちゃんと直接会ったことが無いからだね。チカちゃんは『アウトロー』どころじゃなく、三大勢力の均衡そのものを乱す存在なんだよね〜」

そこまでの存在なのか!?

確かに、チカさんは妖怪や半妖の能力をコピーできる。だから、会わないというのはコピー対策としては正しいだろう。しかし、ここまです危険視されるほどのイレギュラーなのか!?

……いや、待てよ。コイツのような偉い人たちにとって戦争の勝敗

は決まっっていて、思考は既に次のフェイズに進んでいる。であるならば、この戦いの目的は、淡路島での争乱の始まりは……。

「お前たちの目的はチカさんか!？」

「正解」

その顔に笑いは一切無かった。

『アウトロー』はチカちゃんの戦力や発言力を削ぐ、『ガバメント』はチカちゃんという危険分子を排除する、『カンパニー』は金のためにチカちゃんを襲撃する」

冷酷な顔で序列一位が告げる。

「つまり、この争乱は三大勢力によるチカちゃん争奪戦なのさ」

『ガバメント』の刺客、四人の改造人間。

『アウトロー』の刺客、四人の半妖。

『カンパニー』の刺客、四人の超人。

それだけでは済まない、最悪の争乱が始まる。

## 04 君に幸あれ(下)

「それで……どうするつもりだ?」

「うーん、妾的にはレイちゃんは正直どうでもいいんだよね♪  
あつ、カイちゃんは捕獲させてもらうね☆ あの星に匹敵する生命力は、妾の強化パーツに相応しいからね♡」

「なら、お前を逃す訳にはいかない」

カイを襲撃すると言うならば、相手もダメージを負っている今の内に倒す。修復してもらった右手を構え、射撃ユニットの照準を合わせる。

だが、この戦いはオレと序列一位ナンバーワンの戦いではない。オレもコイツも端役に過ぎず、その本質は三大勢力のぶつかり合いだ。即ち、オレたちの敵は『アウトロー』だけではない。

「序列一位ナンバーワンを無礼なめるな。妾は『アウトロー』のトップであるぞ?」  
「たかが『アウトロー』のトップごときが粹いばらがるな、貴様は茨木博親ひろちかには遠く及ばん。貴様程度なら俺でも殺せる」

突如、現れた一人の男が序列一位ナンバーワン……正確には洗脳された電気超人の背中を刺し貫く。

今度こそ、電気超人は倒れて動かなくなる。

後ろから現れた男はとにかく地味だった。顔の皺から、年齢は四十年代後半だろうと感じる。身長は高いが、黒縁のメガネにスーツという何処にでもいそうなサラリーマンの格好をしていた。だが、オレはその人のことをよく知っていた。再会することを夢見た人であった。

「数ヶ月振りか。久方ぶりだな、レイ」

「……八年振りだよ。あの時は全く話さなかったからノーカンだろ、父さん」



その人の名前は天城ハジメ。  
正真正銘、オレの父親だ。

「オレだって気づいてたんだな」  
「当たり前だろう。俺はレイの父親だぞ？」

別の形で再会しなかった。  
だが、時間は巻き戻せない。

「その人を殺したのか？」  
「安心しろ、峰打ちだ」

峰では無いだろ、めちやくちや血が出てるし。  
だが、よく見ると息はしている。上手いこと臓器を避けて貫き、毒が何かで動けなくしているだけのようだ。

『感知、肉体偽装反応』  
「どうして此処に？」  
「俺の職業を忘れたか？」

肉体偽装反応と聞いて、初めに思ったのはこの父さんが偽物ではないかという疑いだ。この局面でオレの家族が登場するのが不自然だった。

だが、すぐさま別の可能性を思いつく。  
肉体偽装を変装とは異なる用途で使う人がいる。……そう、オレだ。そこで父さんの職業を思い出した。

「俺は元自衛官、つまりは旧体制側の人間だ。その俺が『ガバメント』に所属しているとは思わなかったのか？」  
「……改造人間サイボーグになった、のか？」

「俺には果たすべき目的があった。そのために手段を選ばないで突っ走っていたら、いつの間にかこうなっていた。母さんに泣かれた時は、流石に堪えたがな。……お前にも見せてやろう」

『報告、肉体偽装反応消失』

瞬間、比喩などではなく文字通り肉体が変化する。男の見た目が美少女に、肉の身体が鋼に変化する。その変化は身体の一部では収まらず、全身が変貌する。

そうだ、『ガバメント』はチカさんを最大限に危険視しているのだろう。だったら、投入する戦力だって最大の物に決まっている。

淡路島に向かう車での会話を思い出した。オレをモデルにして造られた十二機の兵器、『ガバメント』における最新鋭の技術。

「改めて名乗らせて貰おう。俺の名前は天城ハジメ。だが、製品名はまた別にある」

その見た目はオレの機体とよく似ていた。だが、細部は異なる。その髪は血の様に赤く、その眼は殺し屋の様に鋭い。そして何より、オレが小学生の身長であるならば、その機体は中学生のようであった。父さんは高い声で告げる。

「俺は全身義体改造人間八号機、銘は『タイプ・スコープ』。息子だからと言って手加減はしない、世界の平和を維持するためならば俺は何だってやってやる」

父さんが電気超人を貫いた物とは別の剣を構える。オレも右手の射撃ユニットを起動させ、それと別に左手の近接戦闘ユニットを展開しようとする。だが、父さんの方が速かった。

「特殊兵装、起動。空間切断、実行」

「ガアツツツツ!!!」

左腕を貫かれる。その損害自体はどうでもいいが、その剣は腕以外のものすら破壊する。

「亜空間ポケットを破壊したのか!？」

「この空間切断ユニットは対空間跳躍用兵装だ。ならば、同じ技術が流用されている兵装展開という機能自体を破壊することもできる」

左腕の兵装展開は封じられた。同じように兵装展開を行って、隙を見せてしまうと他の亜空間を破壊されるだろう。出来るだけ兵装展開を使わず、今の手持ちだけで戦う必要性がある。

「父さんもチカさんを排除するつもりなのか?」

「チカさんか……成程、レイは何も知らないのか。いや、何も教えてもらえなかったと言った方が正しいのか?」

「……どうということだ」

話を割り込むかのように、爆発のような音が鳴り響く。それと共に、遠くで巨大な氷の柱が生まれる。

「あれは雪女 of の能力を使っているのだろうが、オリジナルの能力はあそこまで派手なこととは出来ない。レイの言うチカさんとやらは、あの氷で地球全体を覆えるほどの化け物だぞ? その力は個人に託すべきではなく、俺たちが正しく管理する必要がある」

「だったら、もうオレたちに話すことはないよ。きっと……父さんと同じ方向を見ることは不可能だ。オレはこの下らない争乱を終わらせて、チカさんを助ける」

「この争乱が早く終わってほしいのは同意見だ。俺も速く超常戦争に取り掛かりたい」

剣先と銃口を互いに向け、睨み合う。先に動いたのは父さんだっ

た。剣を水平に振るう、咄嗟にオレはしゃがみ込む。単純に切れ味が良い剣などではない、剣が通過した場所の何かもかもが消失しているのを観測する。後ろの何かが消し飛ぶのを感じる。

だが、それを気にしている余裕はない。砲弾を装填し、照準を父さん……その更に奥に合わせる。砲弾が父さんに背後から迫っていた何かをブツ飛ばす。

「オレが父さんを助けるか試したのか!？」

「試すまでも無い。レイは他人を助けずにはいられない、だったら俺が迎撃するまでもない」

いつ間にか周囲に別の存在が増えている。

片方は妖怪、オレの背後にいた存在。巨大な手の集合体とも言えはいいのだろうか、一言では表せない異形が存在した。父さんの一撃で千切れた腕が、既に再生されている。

もう片方は超人、父さんの背後にいた存在。オレにも見覚えがあるその男は、明石海峡大橋を拳で破壊した超人だ。名付けるならば、衝撃超人だろうか。アメリカのスーパーヒーローのように、マントをなびかせている。

「手の妖怪は見覚えがある、あれは『アウトロー』の序列八位ナンバーエイトによって生み出された妖怪だ。ヤツは船幽霊の半妖で、液体から人体を作る能力を持っている。超人が大量に投入されている今なら、妖怪だって作り放題だろう。再生するのは序列九位ナンバーナインの人魚の血でも分け与えられているのかもしれない」

恐らく、厳密には妖怪ではない。半妖の力によって造られた怪物、父さんがダメージを与えられたのも妖怪そのものではないからだろう。もしかすると、初めに遭遇した海坊主たちも同じ種類の怪物かもしれない。淡路島は怪物で包囲されていると考えていいだろう。

「H A H A H A H A！これほど多くのヴィランと遭遇するとは！だが、吾輩のウルトラパンチで成敗してやろう!!」

「……三大勢力の刺客って、こういうのばっかなのか？」

「一緒にするな。レイはひとまず後回しだ、まずは貴様らを始末する」

父さんと背中を合わせる。

父さんとオレは目的が違う。目の前の人や知り合いのためにはか戦えないオレとは異なり、父さんは世界中の名も知らない誰かのために戦っている。

それでも、戦わなければならない訳じゃない。同じ方向は見れなくても、背中合わせに協力することだってできるはずだ。

「俺が手の怪物をやる。俺の機体は攻撃に特化してるからな、あの手のデカブツは得意分野だ」

「オレもあの超人について、少し思いついたことがある」

『注意、頭上』

直後、衝撃超人が上から降ってくる。腕力だけが優れているのではなく、脚力も化け物だ。ただのジャンプで一瞬に視界から消えた。

衝撃超人のパンチを間一髪で避ける。パンチが地面に大穴を開ける。その轟音を合図として、オレと父さんと突っ込む。

『解析、パンチとジャンプはバネと同じ原理』

「……チャージが必要で連発出来ないってことだな？」

構造としては、シヤコのパンチやバッタのジャンプに似ているのかもしれない。身長の違いのせい、ほぼ真上から拳が直角に振り下ろされる。必死にパンチを避けるが、パンチが地面を破壊するせいで足場が不安定になる。

避けながら砲弾を叩き込むが、効いている様子はない。皮膚が馬鹿みたいに硬いのだろう。

だが、衝撃超人の攻略法は既に編み出している。

「ちよこまかと素早いな！だが、君の攻撃は我輩には通用しない!!直ぐに、吾輩の鉄拳を叩き込んでやろう!!」

「通用しないのはオレの攻撃だろ?」

『起動、飛行ユニット』

衝撃超人の下に潜り込み、腰に抱きついて共に空を飛ぶ。衝撃超人のパンチは頭の横を通り過ぎ、空振りする。それに伴い、衝撃超人の腕が破裂する。

「グギアアアアアアアアアア!!!!!!」

「お前のパンチはシャッ!と同じで、威力は高いがお前自身がその反動に耐えられない。特に空振りをした時、反動は全てお前に返ってくる」

衝撃超人は何度も地面を破壊したが、そもそもオレに当てるつもりならば、地面まで拳を振るう必要がない。それにあそこまで近かったら、パンチよりもキックの方が有効だった。あの動き方は、空振りをしないことを意識しすぎていた。

そもそも、始めに橋を破壊した時から可笑しかった。橋を壊す必要はない。何故なら、海坊主と衝撃超人は別の勢力だからだ。ならば何故あの時、橋を破壊したのか。

決まってる、水中に引き摺り込みたかったのだ。水中ならば水の抵抗力によって衝撃は拡散され、空振りでも反動が本人に全て返ってくることはない。

「OH……吾輩は君のことを侮っていたようだ」

「むしろ、侮っていたのは自分の怪力さじゃないか?」

たった一度空振りしただけで腕が破裂したということは、それと同

程度の破壊力がパンチな秘められていたということだ。例えオレが金属製であつても、一撃受ければひとたまりもなかっただろう。適当な所で衝撃超人を捨てる。いくら超人と言つても、腕が破裂したなら当分は戦線復帰できないだろう。

「……さて、父さんを助けに戻るか。それとも放っておくか」  
『推奨、茨木チカとの合流を優先』

そうだな。一応、父さんは別勢力の人間だ。先にチカさんたちと合流した方がいいだろう。ちょうど、氷の柱という目印がある。しかし、状況はそれを許さない。視界の端にそれを捉える。馬鹿げた光景すぎて、何もかもが夢かと錯覚してしまう。太陽が落ちてくる。

『解析、広域殲滅エネルギー弾』  
「弾丸なのか……あれが!？」

改造人間<sup>サイボーグ</sup>の兵装だろう。スーパーアイが上空に砲撃手を発見する。オレの似た顔の美少女、それが二人いる。片方は橋で遭遇した狙撃手だろうか。

恐らくは全身義体改造人間<sup>オーバーホール・サイボーグ</sup>。父さんの同僚に違いない。逃げる時間はなかった。防御ユニットを全て展開して、衝撃に備える。そして、太陽が着弾する。

全てが消滅する。  
光は無かった、何も見えなくなった。  
音は無かった、何も聞こえなくなった。  
衝撃は無かった、何も感じなくなった。

『……、……………!』

センサーがイカれたのかもしれない。

周囲のことが何も分からない。それどころか、AIの声すら聞こえなくなつた。時間の経過も分からない。まだ数秒しか経つてないようにも思えるし、あれから何時間もこの状態のような気もする。……何も分からない。

『……急、……影……』

機体からだが機能を取り戻し始める。

砂嵐のような音が聞こえる。痛みを感じ始める。身体がポロポロになつているのを感じる。あと数分もしたらセンサーが治り、動けないにせよ周囲を観測できるようになるかもしれない。

あと数分生き延びられたら、だが。

『緊急、敵影が接近』

「h j 3 7 m 死 t」

人生は唐突だ。

突然、人類の脅威が現れることがある。

突然、宇宙人に連れ去られることもある。

だから……突然、死んでしまうことだってある。

そして、オレは死んだ。

『……』

『……』

『……』

「GYAU」



カイの声で目を覚ます。ビクツと身体が跳ねる。反射的に胸に手を当て、心臓が動いているか確認してしまう。

……トクトクと心臓の鼓動を感じる。

「一体何があった?」

『実行、ログ確認』

辺りを見回す。そこには何もなかった。

人がいないとか瓦礫だらけとかのレベルではない。何もない。ころうじて山はあるが、それでも元の山とは形が異なっている。オレが目撃した太陽が全てを消滅させたのか、それともあの後にまた別の攻撃があったのかは分からない。ただ、地形を変えるほどの戦闘があったことは間違いない。

空を見上げると真っ暗で、もう夜になっていることが分かった。近くで燃えている木以外に、明かりは見当たらない。多分、カイが燃やしてくれたものだ。パチパチと火が燃える音以外は何も聞こえない。夜は静寂に包まれている。もしかすると、三大勢力による争乱は既に集結しているのかもしれない。

『回答、黒髪長髪の女性を目撃直後に心臓が停止』

「即死……見たら死ぬ系か?」

日本だと海難法師が有名だろうか。

即死系能力を持った半妖、間違いなく『アウトロー』の刺客。あの時、オレは“死”を実感した。原因も理屈も分からないが、ただ死んだということだけを理解した。むしろ、どうして息を吹き返したのかが分からない。

「……もしかして、カイがオレを助けてくれたのか?」

「GYA!」

「ありがとう、マジでありがとう!」

カイをめちやくちや撫でる。

カイは他者に生命力を付与することができる。もちろん、死者に生命力を付与した所でどうにもならないが、オレには死因が無かった。ただ死という結果を押し付けられただけなので、莫大な生命力の付与というゴリ押しでオレは息を吹き返した。

それか単純に、即死が生命力を奪うことで成り立っていたのかも知れない。何はどうあれカイのお陰で一命を取り留めた。感謝を込めてめちやくちや撫でる。

「チカさんたちは何処にいるか分かるか？それか、別の人たちでもいいんだけど……」

「GYAI」

状況が全く分からないので、誰でもいいから話を聞きたい。すると、カイは斜め上を見つめる。それに釣られて、オレを斜め上を見る。……は？

あるものを見つけ、唾然とする。空いた口が塞がらない。どうしてそれに今まで気づかなかったのか。辺りが真っ暗だったのもある。しかし何より、それは大きすぎて視界の中に収まらない。だからこそ、それが一人の人間だとは考えられず、勝手に山であると解釈していた。

「……何してんだ、チカさん」

「あら、起きてましたのね。小さすぎて気付きませんでしたわ」

そこにいたのは途方もなく巨大な女性。

もともと淡路島に存在する山よりも大きく、それなのに縮こまって体育座りするチカさんだった。

「で、デカつ!!!」

「あら、昨日レイが縮んだときに見せましたわよね？……いえ、寝てたんでしたわね」

「どういうこと????」

『回答、相対性理論において、運動する物体の長さは縮小する』

え……オレの身長縮んでたの？

昨日の時間が遅れるほどの加速が原因か……。仕方ないが、更に身長が縮んでいたことにショックを受ける。

「ブロッケン妖怪の能力で、物体を巨大化させる光を放つことができますわ」

「いや、巨大化した方法は分かったけど、結局どうして巨大化したんだ？いつの間にか、三大勢力の争乱も終わってるし……」

「あらっ……そういうことでしたのね」

チカさんは一度首を傾げると、何かに気づいたかのように笑う。

「レイさんはこの争乱が三大勢力同士の殺し合いだと思っていらっしゃるのですわね」

「はっ。」

……ナンバーワン序列一位の言っていたことは、全てブラフだったのか？いや、だが。

「この争乱はわたくしと三大勢力の殺し合いですわ」

今度こそ、絶句する。

どうして、こんなに静かなのか。

決まってる、争乱は終わったからだ。

「一人で全勢力を倒したっていうのか!?!」

「わたくしは人類最強ですので」

笑う、嗤う、嘲笑う。

「四人の改造人間サイボーグがいましたわ。上空から狙撃してくるヤツ、島ごと焼き払ったヤツ、空間を切断する剣を持つヤツ、兵装を無限に取り出すヤツ。全員、ぶち殺しましたわ」

遠目に見た人、見てもいない人、そして父さんがいつの間にか死んでいる。

「四人の半妖がいましたわ。怪物を産み出す船幽霊、見た者を即死させるバンシー、幸運を奪って隕石を落とした座敷童、人類に寄生する女狐。全員、ぶち殺しましたわ」

チカさんと同じ陣営の人であっても、それは例外ではない。

「四人の超人がいましたわ。二人はレイさんが倒してくれましたわね。その他には、百キロ先の足音を嗅ぎつけるヤツ、熱量攻撃も物理攻撃も効かないヤツ。全員、ぶち殺しましたわ」

最早、チカさんには相性すら関係ない。それを力づくで振じ伏せる能力があるからだ。

「何と言えればいいのか……人類には嫌気が差しましたわ。ですので、宇宙人に滅ぼされる前にわたくしが滅ぼしてやろうと思ひまして」

それは会話ではなく独白だった。

自分に言い聞かせているような気もした。

「先程どうして巨大化したのかとお聞きしましたわよね……大きい方

が見やすいでしょう?」

「自分の力を誇示したいのか?」

「いえ、そういう訳ではないですわ。簡単に言うところ……この状態で即死能力を併用するとどうなると思いますか?」

「……まさか、それで刺客全員を殺したのか!?!」

「……そうですね。レイさんを殺すつもりはありませんから、淡路島でゆっくり寝ていてくださいませ」

大きなものは目に入りやすい。

目に入ると即死する。

確かに、極悪コンボと言えるのかもしれない。

「でも、それ嘘だろ?」

「……………」

「チカさんは敵対した人は殺せても、無関係な一般人は殺せない。それでもチカさんが殺すって言うてるなら、殺す必要性があるんだろ?」

チカさんは良い人だ。

善行だけの人とは言わない。メイド服に関しては変態だし、必要ならば殺人だって犯す。だけど、必要もないのに悪事を行えるような人ではない。

「オレたちを巻き込まないように敵対してもらおうと考えたんだろうけど、オレのチカさんに対する恩義を見誤ったな? オレは絶対にチカさんを助ける。一体、何があった?」

「……レイさんには話していなかったですわね。二週間後に第二次超常戦争が始まりますわ」

それは序列<sup>ナンバードワン</sup>一位にも聞いた話だった。具体的な日程は知らなかったが、同じ話をする……そう思っていた。

「その戦争において、人類は九割九分負けますわ」  
「……………え」

前提が覆る。

戦争は負ける、後始末なんて話じゃない。  
そもそもの話として、人類に勝ち目は無い。

「わたくしは人類最強の能力を持っていますが、それでも永遠に戦える訳ではありませんの。わたくし一人が持つてる生命力なんて、限りがありますもの」

「……………それがどうして大量殺人に繋がる」

「バンシーの即死は相手から生命力を奪うことで成り立っていますわ。……………つまり、生命力を一人に集約できるのですわ。わたくしが無限の持久力を手に入れたのなら、万が一にも負けることはありませんわ」

それは地獄のような二択だった。

何もできずに人類滅亡を待つか、自らの手で人類を減らして戦力を高めるか。どちらを選んでもマイナスが大きく、それでもチカさんは僅かでもプラスがある方を選んだ。

「でも……………でも、それじゃあさ。戦争に勝てたとしても、チカさんは笑顔に過ごせるのか？」

「無理ですわね。ですから、戦争が終わり次第、諦めて出頭しますわ。……………約束を果たせなくて、ごめんなさい」

「……………どういう」

「いいや、それはダメだ。人類滅亡を防ぐために、人類を殺すなんて本末転倒なことさせるか」

第三者が現れる。見覚えのある顔、見覚えのある声。生きていると

は思わなかった人がいた。

「天城ハジメ!? 殺したはずじゃ……!?」

「貴様の即死は視覚から作用する。ならば、脳と視覚の接続を切断すれば、俺が生命力を奪われるのは一瞬だけだ」

「例えそうだとしても、即死ですわよ!? 一瞬であっても、相当な量の生命力を奪われているはずじゃ……」

「その怪獣だ」

視線が一斉にカイへ向けられる。

「そのミニ怪獣が淡路島全体に生命力を付与している。他の刺客たちも、誰一人死んでいない」

「……それで何をしましたの? 貴方程度にわたくしを止められるとは思いませんが」

「指摘だ、茨城博親。貴様、思考誘導されてるぞ」

思考誘導……ナンバーワン序列一位か!?

既に退場したと思われていた人。だが、ヤツはこの場にいらなくても影響を与えられる存在だ。

「全てが女狐の掌の上だ。貴様とバンシーを遭遇させ、その計画を自分で思い付かせる。あとは貴様を戦わせ、全てが終わった後に刑罰という名目で排除する。第二次超常戦争に勝利することが出来る上、『アウトロー』の勢力図も変化しない一石二鳥の策だな」

「……それでも、勝利するためにはこれしかありませんわ」

「いいや、それでは勝利できない」

父さんは断言する。

例え、多くの人を犠牲にしたとしても、戦争に勝利することはできない。

「宇宙人は自分の母星ごと侵攻してくることが判明した。今はその準備期間であり、二週間後にその星ごと空間跳躍が行われる」

「星ごと……そんなの戦争どころじゃない！星がこちらに来た時点で終わりだ!!向こうの重力に引っ張られて、地軸も公転軌道もめちゃくちゃになる!!!」

「その通りだ。戦争に勝つためには、こちらから侵攻しなければならぬ」

不可能だ。

元から、迎撃の時点でこちらに勝機は無かった。それに加えて、人類に不利な宇宙というフィールドに持つて行かれた。攻撃三倍の法則を出すまでもない。絶対に人類に勝ち目は無い。

「だったら、どうすればいいのですか!!!わたくしはただ、幸せになりた  
いだけなのに!!!」

「俺たち『ガバメント』は解決策を考えた。それを実行するためには、君の能力が必要だ。手を貸してくれ」

チカさんを排除したかった訳ではないのか？

……ただ、その能力を利用したかったのか。力を個人に託さず、『ガバメント』で管理するってというのはこういう意味か。父さんの話し方は紛らわしいな。

「勝てないのなら、答えは一つだ。後回しにすれば良い。具体的に言うならば、コールドスリープだ」

「宇宙人の母星を凍らせるといふことですわね?……恐らく、可能ですわ。ですが、その時間稼ぎがいつまで持つかは分かりませんわよ」  
「だったら君が永遠に凍らせておけばいい。……人魚の血だ、君はコピーによって不死身になれるはずだ」



それは……それも、さつきとは別の意味で地獄だ。不老不死が幸せで無いことぐらい、今どき誰だつて知ってる。それも、宇宙に独りぼっち。遠い星の知らない誰かのために永遠に。

「許せるか……そんな地獄を一人に押し付けるつもりかツツツ!!!」

「もちろん、辛いのは分かっている。だが、永遠ではない。どれだけ時間がかかるかは分からない、それでも俺達は君を迎えていく。今の技術では、今の戦力では勝てなくても、いつか君を救いに行く」

「テメエツツツ!!!」

「いいですよ。この方法なら誰も犠牲にならず、わたくしも約束を破ることがないですから」

「ありがとう、茨木博親。絶対に俺達は君のもとへ向かう、待っていてくれ」

まるで大団円のように言葉が交わされる。

……茨木博親。その名前を聞いて全てを思い出した。オレはチカさんと……ヒロくと会ったことがある。と言つても、大したことは話していないし、何か特別な思い出もない。ただ一つ、約束をした。『ボクって化け物やねんけど、どうやったら友達ができんねんやろう?』

『おつ、その歳で厨二病とは将来が楽しみだな。友達の作り方かあ、そうだな。優しい人になったら友達も出来るんじゃないか?』

『ほんま!?じゃあ……ボクがやさしいひとになったら、お兄ちゃんも友達になつてな!あつ、自分でもいいで!』

『自分は嫌だな……。じゃあ、約束な。ヒロくんが優しくなつていたら、オレと友達になろう』

年齢が逆転していたので気づかなかつた。オレは約束を忘れていたのに、ヒロくんはずつと覚えていてくれたのだろうか。

拳を握りしめる。覚悟を決める。

「二人の一生を犠牲にして助かるぐらいなら、ここで人類は滅亡した方がいいよ」

絶対に助けてみせる。

誰かを犠牲にして生き延びるなんて、誰もそんなことしたくない。オレは何処かの誰かよりも、目の前の人を助けたい。

「……言ってることが分かっているのか？」

「父さんだつてそうだろ？オレと再会した時、本当はオレを殺さないといけなかった。でも、見逃した」

「レイを見つげるために『ガバメント』に所属した、レイを助けに行くために改造人間サイボーグになった。……だが、その過程で多くの人と出会った。その人たちを助けたい、世界を救いたい。俺が私情を優先したのは間違いだ、今度こそ俺は正しいことをする」

父さんの言っていることは正しい。

だが、前提が間違っている。一人と世界のどちらかしか救えないなんて、そんなの絶対におかしい。

「オレは救うぞ、父さん……」

「何？」

「チカさんと世界、オレはどっちも救ってみせる。例え、チカさんが自分の犠牲を許容したとしても！全てを投げ打つ覚悟を決めたのだとしても！そんなもん、全部ぶっ壊して台無しにして、何もかもを救ってみせる!!だって、チカさんは言ったんだ!!幸せになりたい!!それを自己犠牲なんて綺麗事で押し流されてたまるか!!オレは絶対にチカさんを幸せにする!!そのついでに世界も救ってやる!!!」

「不可能だ!!全ての人間を救うなんて、土台無理な話だ!!人間の手なんてちっぽけで、掴める人数には限りがある!!だが、この方法なら誰も犠牲にならない!!!」

「そこまで分かっている、何故そんな結論になるのか分からねえな」

「……何を言っている!？」

「二人で出来ることなんて、たかが知れてる! だったら! 一人やらずにみんな協力すればいいんだ! オレが掴んだ人が、また別の人を掴めば、きつとみんなを救える!!!」

オレ一人で問題を解決できたことなんて、何一つなかった。いつだって、オレは人の力を借りて生きてきた。

オレだけの話ではない。誰だって、誰かの力を借りて生きている。

「そもそも、人類ってそういうもんだろ? 怪獣を倒すために宇宙人の技術を使う。宇宙人を倒すために妖怪の能力を使う。妖怪を倒すために怪獣の細胞を使う。オレたちはいつだって、何かの力を借りて生きている!!!」

「それでどうする!? 俺達の戦力じゃ戦っても勝てない! そもそも星が来た時点で終わりだ!! この詰んだ状況を、どうやって覆すつもりだ!!!」

「父さんはそれを知っているはずだよ」

「……な、に?」

頭の中の知識を捻り出せ。

三大勢力の力を思い出せ。

「父さんの剣は空間跳躍<sup>ワープ</sup>を無効化できる。だったら、ワープホールの中から出口を切断すれば良い。そうしたら、巨大な亜空間ポケットの出来上がりだ。星を孤立させた上で、地球に害も及ばない」

「……いいいや、まだだ。例えばそれが可能なのだとしても、俺たちは空間跳躍<sup>ワープ</sup>の位置を予測できない。何処から来るのか分からなければ、その方法も使えない!」

「それなら、座敷童の能力を使えば良い。世界の一箇所だけを不幸にすることで、宇宙人が襲来する位置を固定できる。それじゃ大まかな位置しか指定できないかもしれない。でもそれなら、百キロ先の足音

を嗅ぎつける超人がいる。空間跳躍はその前兆として微弱な振動が起こるから、それを探知すれば正確な場所を予測できる」

三大勢力に属していると気がつかないかもしれないが、外からその能力を見るとよく分かる。人類は手を合わせれば、何だって出来るはずだ。

「それが成功しても！そもそもその戦力差は覆らない！人類は宇宙人に勝ち目がない!!!」

「そうだな、だったら人類以外の力を借りれば良い」

「なん、だって?」

父さんの動きが止まる。

今度こそ、父さんの想定の上を行く。

「いるだろう、宇宙人の天敵が。妖怪は生命力と人類の思念さえあれば生み出せる」

そして、そして、そして、そして、そして。

「大量の超人、それにカイがいれば生命力は足りる。人類の思念はどれだけ必要なかは分からない。だけど、ナンバーエイト序列八位は人体を作り出せるんだろ?必要分の頭を作って貰えば良い。それには大量の水が必要かもしれないが、父さんの同僚に兵装をいくらでも格納できるヤツがいただろ。そいつに頼んで、膨大な量の水を運んで貰えばいい」

前提を、認識を、全てを覆す。

「だから、言ってやるよ。自分の力は何一つ使わず、他人の力を見せびらかして言ってやる。みんなの力を使えば、チカさんを犠牲にしなくたって世界を救える!!!悲劇を美談に塗り替えて諦めるな!!!簡単に人

を見捨てんじやねえ!!!」

他力本願にも程がある。

オレがすることなんて何もない。オレには何もできない。オレは改造されただけの、普通の男子高校生だ。だが、それは諦める理由になんてならない。

だって、これが普通だろ！人を助けたいなんて、誰だって考えることだ！だったら、あとはやるだけだ。助けたいと思ったなら、絶対に助けるべきなんだ!!!

「もちろん、成功する確証なんか無い」

当たり前だ。

たった今考えた計画、成功するとは思えない。

「だが、もつと考えた別の方法が見つかるかもしれない。それに、成功する保証がないのは父さんの計画も同じだ。だったら、オレはこつちに賭ける！成功しても笑顔のないものより、みんながハッピーエンドになる方を選ぶに決まってるだろ!!!」

「……」

「チカさんはどうしたい？結局、オレも父さんも関係ないんだ。思考誘導じゃない、誰かの意見でもない。チカさんの答えが欲しい」

チカさんは涙をこぼす、声を上げて号泣する。

困った、泣かれるとは。でも、これでいい。空の彼方で涙も流さずに堪えているより、こつちの方がずっといい。

「……ボクは、ここにいたい！頼りになる年上のお兄さんか、それか可愛い年下の女の子と結婚したい!!幸せにつ、なりだいツツツ!!!」

「絶対にオレが幸せにする！」

そう考えるのはオレ一人じゃない。フミさんも、黒服さんも絶対に  
そう考えるはずだ。

「父さんはどうする？オレじゃ三大勢力の動きは変えられない。で  
も、父さんは違うんだろ!?だったら、力を貸してくれ!!世界を一緒に  
救ってくれ!!!」

「……ここまで、清々しいのは初めてだ。上層部はオレが黙らせる、  
『カンパニー』に依頼だってする。『アウトロー』は茨木浩史にお願い  
してくれ」

そして、ここに小さな同盟が生まれる。

改造人間、半妖、怪獣。みんなで力を合わせて、世界つてやつを救っ  
てみせる。

「みんなで世界を救おう」

第二次超常戦争のカウントダウンが始まる。

世界を揺るがす“運命の日”はあと少し。

## 00 あれこれの用語解説

「宇宙人」

▽概要

天から来訪する脅威。

怪獣に強く、妖怪に弱い。

宇宙人と呼ばれているが、生物よりも機械に近い構造をしている金属生命体。異星文明の技術によって作られた兵装を保有する。その見た目は人間のようであるが、その理由は不明。

▽被害地域

宇宙人の襲来場所は先進国などの技術が発達している地域に固まっている。アメリカやイギリス、日本などが主要被害地域。

▽生態について

それぞれの宇宙人には個体差がなく、全ての宇宙人が高レベルの兵装を保有する。しかし、宇宙人ごとに専門としている分野が異なり、それぞれの兵装の傾向からいくつかの分類に分けられている。

有名な分類は、近接戦闘型・遠隔射撃型・広域破壊型・索敵斥候型・後方支援型の五つ。その他にも、環境や兵装に使われている技術などから、更に細かく分類することもある。

例えば、狐火と足まがりに取り憑かれていた宇宙人は近接戦闘型。それに加えて、集団で行動しない単行動型であり、狭い場所での戦闘に優れた屋内戦闘型であり、梅田にある物資や戦力を確認しに来た潜入尖兵型でもある。

▽襲来の理由

宇宙人が地球に襲来した理由は不明。しかし、技術が発展している場所を襲撃していることから、他天体の文明を学習しているのではないかと考察されている。

一度に地球を侵略せず、ある程度反抗できる余地を残しているのも同じ理由ではないかと考えられている。

## 「怪獣」

### ▽概要

海から出現する脅威。

妖怪に強く、宇宙人に弱い。

とにかく巨大な動物。海外ではモンスター・ビーストと呼ばれる。その巨体に相応しい莫大な生命力と、様々な生物に似た強力な生態を保有する。

### ▽被害地域

怪獣の発生場所は海溝や海嶺付近に固まっている。例えば、毒霧怪獣は千島・カムチャツカ海溝付近で発見された。ここから、全ての怪獣は星の内部から押し出されるようにして、発生すると考えられている。

そのため、怪獣被害地域は海に面している場所が多い。ロシアやオーストラリア、日本などが主要被害地域。

### ▽生態について

それぞれの怪獣が保有する生命力の量は怪獣の大きさに比例し、そのことから生命規模ライフスケールと呼ばれ、怪獣の戦闘力を示すための指標として使われている。

例えば、毒霧怪獣は70m級怪獣と称される。

ただし、新生怪獣カイはその大きさと生命規模ライフスケールが釣り合っていないため、全長が40cmであるにも関わらず、12000km級怪獣と称される。

### ▽出現の理由

怪獣が現れた理由は不明。当時は古代生物が復活したのだと言われていたが、怪獣の生態が古代の環境に適していないことと、全ての怪獣が単一種であることから否定される。

その後、ガイア仮説で怪獣は星の抗体だと考察される。根拠は怪獣の出現場所が海嶺・海溝付近であることと、怪獣が持つ生命力の質が星の生命力と同一であることの二つ。

ただし、ガイア仮説も新生怪獣カイの発見によって否定される。

……もしも、ガイア仮説が正しいとすると異なる結論が導かれる。



## 「妖怪」

### ▽概要

地から発生する脅威。

宇宙人に強く、怪獣に弱い。

生命力を原料として人類の思念に形作られた超常存在。例えるならば、生命力がエネルギーで人類の思念が器。海外では妖精とも呼ばれている。それぞれが特殊な概念を有する異能を持ち、物理法則を無視して存在する。

### ▽被害地域

妖怪の発生場所は都市部などの人口の多い所に固まっている。ただし、西洋など一神教が広まっている地域は、妖怪の発生数も少ない。これは唯一の神を信仰することで、その他の超常的存在を許さないためではないかと考えられている。中国やインド、日本などが主要被害地域。

### ▽生態について

それぞれが持つ特徴が非常に異なり、傾向などを纏めることは不可能。ただ、人類の心が生み出す感じのアレなので、人類が思い描いているイメージがそのまま当たる。

例えば、現代における妖怪ぬりかべは壁のような姿として現れることも多い。これは後世での描かれ方に影響されていると考えられる。

### ▽繁栄の理由

他の脅威とは異なり、妖怪は十年前に突然現れたものではない。始まりの妖怪は人類が自然をそれぞれの認識で解釈したことにより発生したと考えられる。当時は妖怪ではなく神として存在していたが、人類の信仰などの減少と共に自己を保つことができなくなり、人類を襲う妖怪へと零落した。

現代に近づくにつれて妖怪の総数は減っていったが、地表に怪獣が現れたことで莫大な生命力が垂れ流され、それを糧として妖怪が繁栄した。

## 「改造人間」<sup>サイボーグ</sup>

### ▽概要

宇宙人の技術によって改造された人類。

怪獣に強く、妖怪に弱い。

宇宙人を構成する人体を模した機体を再現して、人類の肉体を置換するように脳と接続させている。ほとんどの人が旧体制側の軍人であるので、男性の割合が高い。

### ▽歴史

十年前に、まだ存続していた旧国連軍に造られた。元は無人兵器として作られる予定であったが、技術の根幹となる空間跳躍ワープの操作には非常に複雑な電気信号が適していると判明し、人類の脳と接続するように方向転換された。

### ▽性能

人類の最先端技術の結晶。

あらゆる状況に対応できるほど万能性が高く、火力も高い。一般的に兵装が多いほど強く、ワンオフの特殊兵装を持っている者は飛び抜けた実力者。

定期的にメンテナンスを行う必要がある、場合によっては丸ごと入れ替えることも少なくない。メンテナンスの頻度は戦闘ごとで、入れ替えの頻度はパソコンを買い替える頻度よりも高い。

## 「超人」

### ▽概要

怪獣の細胞によって進化した人類。

妖怪に強く、宇宙人に弱い。

怪獣細胞が人類の能力を底上げしている上に、元の怪獣が持っていた生態さえ獲得する。男女関係なく、世界各地で前触れなく誕生する。

### ▽歴史

第一次超常戦争の勃発と同時に、世界各地で誕生した。当時は四つ目の脅威ではないかと迫害されることも多く、超人であると分かって

も人型怪獣として差別されていた。

しかし、一つの民間企業が超人を傭兵として雇ったことで風向きが大きく変わり、今では人類の主戦力の一角となった。

#### ▽生態

ライフスケール  
生命規模は体格ではなく、元の怪獣の生命規模と同じ、または少し劣化する。

高い身体能力や膨大な生命力といった、基礎的な能力が非常に強い。その他にも病気に罹りづらいなどの利点もある。

眉唾ではあるが、地球の声が聞こえるという話もある。

#### 「半妖」

##### ▽概要

妖怪の血統によって異能に目覚めた人類。

宇宙人に強く、怪獣に弱い。

一人一人が物理法則を歪める能力を保有するが、物理攻撃は普通に通用する。妖怪自体に女という漢字が入っているように、妖怪の血に目覚める半妖は女性の割合が高い。

##### ▽歴史

第一次超常戦争以前から存在していたが、現在ほど強くはなかった。妖怪たちと同じように、地表に生命力が溢れたことで強化された。

また、自身が妖怪の末裔であることも知らなかった人々も多く、その人たちは第一次超常戦争のときに異能に目覚めた。

##### ▽能力

物理法則を歪める能力を持ち、意味不明で理解不能な現象を引き起こす。能力は一人につき一種で、出来ることを広げるためには能力を応用する必要がある。

身体能力は並。能力は非常に強力だが、一つのことの特化しすぎている。この基礎的な能力の低さと万能性の無さという二点が、最も大きな弱点と言える。ただし、茨木博親は除く。

## 「ガバメント」

### ▽概要

旧国連軍を基盤とした陣営。

ほとんどの改造人間サイボーグが所属している。アメリカを本拠地とし、その他にもイギリスなどヨーロッパに広がっている。

### ▽歴史

旧国連軍がサイボーグ技術を生み出したことで、対脅威の主戦力として各国が協力し合って『ガバメント』になった。基本的に宇宙人や怪獣などの、国の外から侵略してくる脅威を討伐する。

### ▽階級

民主主義。『ガバメント』のトップや上層部は、所属国の国民から選挙によって選ばれる。改造人間サイボーグはあくまで軍人であり、権力とは離されている。

## 「カンパニー」

### ▽概要

世界的軍事企業を発端とした陣営。

ほとんどの超人が所属している。陣営は各地に存在しているが、陣営同士の仲間意識などはないので本拠地も存在しない。強いて言うならば、ロシアやオーストラリアが企業として大きい。

### ▽歴史

とある民間企業が超人を雇ったことで世界的企業として成功し、同じように超人を雇う企業が世界各地で増加した。それらの企業をまとめて『カンパニー』と呼称するようになった。基本的に依頼によって動くので、突然現れる宇宙人は対象とせず、怪獣や妖怪などを討伐する。

### ▽階級

実力主義。超人であろうとなかろうと、どんな手段でもお金を多く持っている者が一番偉い。『カンパニー』における影響力とは、どれだけ金払いがいいかということ。

## 「アウトロー」

### ▽概要

ナンバーワン  
序列一位を中心とした勢力。

ほとんどの半妖が所属している。明確に本拠地があるわけでは無いが、勢力としては大陸側……中国が最も大きい。基本的にはアジアに広がっている。

### ▽歴史

第一次超常戦争以前から存在していた半妖は、基本的に裏社会でその力を使っていた。第一次超常戦争のどさくさに紛れて、半妖が多く所属する組織が国を征服し、その後『アウトロー』となった。

……そう言われているが、実際は序列一位一人で全てを行った。

### ▽階級

血統主義。強い者が一番偉いが、半妖にとつての強さとはその身に流れる血の強さ。『アウトロー』における序列は強さだけでなく、地位の高さも表している。強い半妖は全員が由緒正しい半妖の一族。

## 「異星」

### ▽概要

宇宙人たちが属する勢力。

宇宙を翔ける迷い星。

### ▽備考

宇宙の中を旅して、様々な文明と接触している。宇宙人の技術発展の歪さは、様々な先端技術が混ぜられていることが原因。

## 「星」

### ▽概要

怪獣たちが属する勢力。

嘆き叫ぶ人類の母星。

### ▽備考

人類の母、生命の母、怪獣の母。

生きるために戦う。ある意味では人類の同じ立場だと言える。

「？」

▽概要

妖怪たちが属する勢力（？）。

人類より生まれ、人類を喰らうモノ。

▽備考

妖怪たちに纏まりはないが、目的は同じ。

それ即ち……

## 04. 99 Are You Ready?

01

靴紐を結び、扉を開けてアパートから出る。

戦争に勝っても負けても、この家に戻ってくることはないだろう。勝った場合は実家に戻り、負けた場合は言わずもがな。

「行つてきます」

「GYAU!」

誰もいないアパートに頭を下げる。

リュックサックの中にいるカイも、同じように頭を下げる。そう言えば、生後二週間程度のカイにとってはここが実家だったのか。

「明日の作戦はカイが要だ。怪獣のカイには関係ないことかもしれないけど、人類を救うの手を貸してくれ」

「GYAUGYAU!」

カイが元気よく頭を振る。肯定しているよりも、ヘドバンして遊んでいるようにも見える。

第二次超常戦争の開始時刻まであと二十四時間を切った。オレたちは明日の戦争に備えて、防衛拠点へ向かう。明日に何もかもが始まり終わる。

正直なところ、未だに実感は湧いていない。自分の手に世界が乗っているなんて、夢でも見ているのかとさえ思う。だけど、チカさんを助けたい。ついでに、カイを人類側に認めさせる。そのためなら、宇宙人だって怖くない。

「GYA!」

カイの頭がいつの間にか縦でなく横に振られている。肯定ではなく否定しているかのよう。いや、初めは縦に振られていたということとは何かに気づいて、慌てて否定したということかもしれない。

カイがリュックサックの中からオレに手を差し出す。握手を求めている……？

「あつ……」

思い出した、たった二週間前の話だ。

オホーツク海でオレとカイは出会い、オレは生まれたばかりのカイに手を差し出した。これはその時の反対だ。

差し出された手を掴む。あの時のオレは怪獣を助けたんじゃない、カイを助けたんだ。カイだってそれは一緒だ。

「オレは目の前で泣いている人を放っておけない。だけど、オレだけじゃ何もできないんだ。だから、オレに手を貸してくれ」

「GYAU！」



02

防衛拠点に向かう前に、ある物を取りに梅田に寄る必要がある。

オレは運転免許を持っている……ただし、戸籍を偽造する際に併せて作ったものなので、実際に運転したことはない。前日に事故るのもアレなので、電車に乗るために駅に着く。

そこには電車に乗ろうとしているチカさんがいた。

「よく来ましたわね、レイさん！ちよつと遅いのではなくて？」

「チカさん二週間ぶり。よく来たも何も、ここオレの家の最寄駅なんだけど」



ドヤ顔で腰に手を当てて踏ん返り返っているが、後ろで電車が通り過ぎていたので滑稽と言うしかない。電車に乗り遅れたことに気づき、チカさんはしよんぼりとしている。

「そう言えば、そっちの口調を続けるのか?」

「えツツツツ!! いやあの、そのですわね、今更普通に話すのも恥ずかしいと言いますか……」

「オレはどっちのチカさんも好きだけど、男口調の方が嬉しいかな」

「好ツツツツ!! 酔?!?」

「この姿になってから男友達が恋しくてさー」

「(……いや分かってたけど? 分かってましたけど? 別に落ち込んで無いからな?)」

チカさんはめちやくちやしよんぼりしている。電車に乗り遅れたことがそこまでショックだったのか。というか、お嬢様(若頭?)なのだから電車使わなくてもいいと思うのだが。もしかして、オレに会いに来たのだろうか。

「いえ、このままの口調で行きますわ。下手に仲良くなりすぎて、意識されなくなるのも癪ですし」

「よく分からないけど、可愛いし良いと思うよ。それで、何かあったのか?」

よく分からないが、急に顔が真っ赤になったチカさんに尋ねると、最初のようにドヤ顔で答える。

「この度、わたくしは序列一位に任命されましたわ。即ち、わたくしが世界最強の半妖であることが世界に証明されたのですわ! オホホホホホ!!」

「へっ序列一位……えっ!?!」

ナンバーワン  
序列一位!?

じゃあこの人、『アウトロー』のトップになったのか!?

「一昨日にジユウちゃんと会食いたしましたして、能力もコピーさせて貰いました。話してみると割と良い人でしたわ」

「マジか……悪い印象しかないんだけど」

「人類滅亡の危機に面しているのに、暴動が少ないのはジユウちゃんのお陰ですわよ。目的の為なら手段を選ばない人ではありますが、目的自体は善人寄りですもの」

……少し見直したかもしれない。

きつとあの人だつて、自ら進んであんな策を考えていたわけでは無い。選択肢が一つしかなかったあの時ならまだしも、みんなを助けられる解決策がある今ならばきつと手を取り合える。

「結局、チカさんは自慢しに来たのか?」

「いえ、お礼をしに来たのですわ」

「お礼つて二週間前の? オレが自分のエゴのためにしたことだから、別にいいんだけど」

「そうですね、ですがお礼を言うのもわたくしのエゴですわ」

チカさんが笑う。二週間前とは違う、快晴のような笑顔だ。芸術品のような笑顔に、思わず見惚れてしまう。

「ありがとうございます。わたくしはレイさんのお陰で優しくなれて、レイさんのお陰で幸せになろうと思えました」

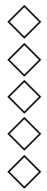
ここまで面と向かって感謝されたことがないので、オレは照れて顔が真っ赤になる。

「この借りはいつかお返しいたしますわ。地下迷宮梅田の時と同じよ

うに、困ったことがあれば何でもお任せくださいませ！」  
「……ああ、こちらこそいつもありがとうございます。これからもオレを助けてくれ」

そうこうしている間に電車は通り過ぎ、オレたちはまたもや乗り遅れた。凄くお別れの雰囲気であったが、オレたちはもう少し話すことになった。

チカさんの顔は真っ赤だった。



03

必要なものを亜空間ポケットに格納し、地下から上がる。電車でも乗ろうかと地図情報を頭で浮かべるが、そのとき一台の黒いリムジンも見つける。

リムジンの側には黒服さんとフミさんが立っていた。

「用事は終わったかの？ならば、儂が送ってやろう」

「助かります。黒服さんも運転ありがとうございます」

「お気遣いなく」

リムジンの中は意外と明るく、高そうなソファと大きいテレビが備え付けられていた。

「チカが序列一位ナンバーワンになったのは聞いておるか？それで儂もとうとう隠居することになっての、此度の戦いが現役最後となりそうじゃ」

「よかったですね？……隠居って喜んだ方がいいことですか？」

「おうおう、喜べ喜べ。儂もようやく責任から逃れられて、万々歳じゃ」

フミさんは本当に嬉しそうに笑う。

だが、さっきのチカさんと比べると何処が無理があるようだった。

「辛そうですけど、どうかしましたか？」

「……二週間前の話じゃ、儂は全て知っておった」

それは懺悔のようだった。

「実のところ、レイという改造人間サイボーグを受け入れたのもそれが理由じゃ。怪しい危険分子を『アウトロー』に混ぜる訳にはいかん。じゃが、もうすぐに会えなくなる孫の願いを聞いてやりたかった」

『『アウトロー』が緩すぎると思っただら、そんな理由があつたんですね』

なんだ、やっぱり全部チカさんのお陰だ。

礼を言うのはこつちだった。チカさんがいなかったら、オレは死んでいた。オレがしたことは一方的な恩返しに過ぎない。

「全てを知っておりながら、儂はチカを女狐に差し出した。世界を救うという大義名分だな。後でレイの発言は聞いた、あれは儂が言わねばならん言葉じゃった……」

「立場とかもあるし、別にいいんじゃないですか？今回はオレが助けられた、でも次は不可能かもしれない。だから、オレが助けられない時は代わりにフミさんが助ければ良い」

「……そうじゃな、約束しよう。儂個人としても、『アウトロー』日本トップとしても。レイが助けられない人を儂らが助けよう」

フミさんが頭を深く下げる。

「改めて礼を述べよう。儂の孫を救ってくれてありがとう！」

「ごちらこそ、オレを『アウトロー』に受け入れてくれてありがとうございます。この戦争の後はおれたちの立場がどんな風になるのかは

分かりません、それでも末永くよろしくお願いします」  
「ああ、京都で言ったことは違えんよ。例えレイやカイが世界にどう扱われようと、儂らは二人を受け入れよう。今度こそ、助けてみせるとも」



04

リムジンが防衛拠点に到着する。

そこは二週間前に来たばかりの、淡路島であった。第二次超常戦争は『ガバメント』と『アウトロー』と『カンパニー』が協力する争いであるため、三大勢力が隣り合う日本に集合することになった。対宇宙人の作戦の肝となるのは生命力であるため、日本で最も生命力の補給が容易である淡路島に防衛拠点が置かれた。

「よく来たな、レイ」

「……父さんか。オーバーホール・サイボーグ全身義体改造人間の人たち、みんな同じ顔だから誰が誰か分かりにくいんだよな」  
「お前も同じ顔だろ」

防衛拠点の中に入ると、扉のすぐ近くに父さんが立っていた。どうやらオレを待っていたようだ。

「あつそうだ、特殊兵装届いたよ。忙しいだろうに、『ガバメント』に設計図を申請してくれてありがとう」

「いや、それはいいが……あんな兵装で良かったのか？時間は無いにしろ、もつと別の機能でも良かっただろうに」

オレ単体の戦闘力はそこまで高くない。

もちろん弱いとまでは言わないが、父さんのような他のオーバーホール・サイボーグ全身義体改造人間と比べると雑魚だ。それはオレがプロトタイプ試作機だからで

あるし、オレに戦闘経験が少ないからでもある。

しかし、それ以上にオレは特殊兵装を持っていない。戦いの決め手となるような、大火力を保有していない。それが何よりも大きい。だから、父さんのコネで特殊兵装を作って貰った。まあ、時間が足りなくて大したもののは作れなかったのだが。

「この特殊兵装でいいよ、これがいい。確かに大したことのない機能かも知れないけどさ、オレによく合った兵装だと思う」

「そうか、レイが納得するのならそれでもいい。だが、忘れるな。明日は助けられる仲間はいない。周りには他人と敵ばかりで、他人もレイを助けられるほど余裕はない」

『アウトロー』は対宇宙人戦についての主戦力であり、チカさんは人類側の最大戦力だ。それに、カイも重要な役割を担っている。みんなオレに構っている暇はない。

「分かってる、明日はいつもみたいに誰かの力を借りることはできない。オレはオレだけの力で、戦わないといけない。心配してくれてありがとう」

「……俺にレイを心配する資格はあるのだろうか。俺はレイを助けられなかっただけじゃなく、レイが生きていることを知りながら見捨てたクソ野郎だ」

「知らないよ」

暗い顔をしていた父さんが目を瞬かせる。

だが、オレが言えることはそう多くない。

「オレには父さんの葛藤は分からないけど、少なくともオレにとって父さんは父さんだ。そもそも人を心配するのに資格なんていらんだろ、存分にオレを心配してくれよ」

「……そうだな、心配する。俺は相変わらず家族より世界を優先する

クソ野郎だが、出来る限りレイを助ける。レイが世界を救ってくれるなら、俺がレイを救ってやる」

「父さんと拳を突き合わせる。

オレと父さんの目的は違う。

三大勢力のそれぞれの目的だって違う。

それでも……人類は別々の方向を向きながら、協力だって出来るのだと思った。

◇◇◇◇◇

00

夜風に当たるために、部屋から出る。

辺りはいつの間にか真っ暗になっていた。空に輝く星を見上げる。明日、あの空は宇宙人に侵される。それをオレが、オレたちで食い止める。

静かな夜だった。こんな静かなのはいつ以来だろうか。……あの時、オレが宇宙人に改造された時から、オレの脳内は静かではなくなった。だって、オレはいつだって一人じゃなかった。

「今日はずっと静かだな。気を遣ってるのか？」

『……肯定、邪魔すべきでないと思案』

「別にいいよ、オレとお前の仲だろ」

AIとの付き合いも長いことになった。客観的には短くても、主観的にはずっと一緒にいたように感じる。オレの十八年の人生の中でも、ここ数か月は非常に長かった。特に、カイを拾ってからは怒涛の二週間だった。

『推奨、第二次超常戦争からの逃亡。推測、戦力が一人減った程度で戦

況に変化なし』

「それはそうかもな」

AIはいつだって勝率が高い選択肢を推奨する。そして、AIの言う勝利とはオレの生存のことだ。AIはいつだって、オレの生存を望んでくれている。

オレが考えた作戦にオレは必要がない。オレがいなくなった所で何も変わらない。

「でも、助けたいんだ」

それがオレの全てだ。

オレはそれだけの理由で戦争に挑む。

「カイを三大勢力に認めさせたい、チカさんが憂いなく幸せになれる世界にしたい、フミさんの負担を減らしてあげたい、父さんに恥じない自分でいたい」

『否定、それは貴方がする必要のないこと』

「それでも、オレがやりたいことだ」

世界のため、見知らぬ誰かのためではない。

きつと、目の前の人のためというのも嘘だ。

オレは、オレのために人を助ける。

「それに、オレが戦う理由だってあるよ。戦争に勝ったら報酬として機からだ体を一つ丸ごと作ってくれるらしい。つまり、念願の男の体を手に入れられるかも知れない」

『……推測、損傷確率大』

「分かっている、だから助けてくれ。これまでもオレたちは二人で頑張ってきただろ、相棒？」

『……………了解、今度こそ貴方を救ってみせる』



## 05 荒れ狂う■■■(ほし)に救いを

「只今より、第二次超常戦争を開始する！」

三大勢力が集結する。

誰も彼もが一騎当千の戦士たち。

滅びゆく地球<sup>ほし</sup>を救うために立ち上がった者。

戦争勝利時に支払われる報酬の為に戦う者。

動機はそれぞれだが、世界中が一致団結する。

「作戦名は百鬼夜行！総員位置につけ!!」

生み出した妖怪を思考誘導で宇宙人と戦わせるなど、細かい修正がいくつかあるが、百鬼夜行の大筋はオレが立てた計画と変わらない。

宇宙人とは別にクローン怪獣が量産されている事も想定して、対怪獣用兵装も用意してあるらしい。

「カントダウンを始める！」

この戦いが正念場だ。

宇宙人さえ倒せば、星の外敵がいなくなった事で怪獣被害も無くなる。怪獣が地表から去れば、生命力が少なくなる事で妖怪被害も無くなる。全てが解決する。

「十、九、八、七、六」

オレの心は穏やかだ。意外と緊張していない。周りを観察すると全員が程よい緊張を保っている。序列一位<sup>ナンバーワン</sup>……いや、序列二位<sup>ナンバーツー</sup>による思考誘導なのかもしれない。

「五、四、三、二、一」

息を整え、手を握り締める。

全ての決着をここでつける。未来に負債は残させない。人類の脅威を倒し切る。

「作戦開始!!!」

直後、空に大きな穴が開く。

改造人間<sup>サイボーグ</sup>、半妖、超人が殺到する。  
戦いの火蓋が切られた。

空の穴を潜ると、巨大な星が見える。

それこそが宇宙人たちの母星。

『カンパニー』が付けた名前はキャノンボール。その名の通り、地球を撃ち抜く金属天体だ。

……だが、予想外のことが一つある。

「なんだよ、あの生命力……」

「地表が脈動してる……? いや、まさか」

「まさか、か……生きてるのか?」

味方のざわめきが聞こえる。

それも無理はない、オレだって驚いている。

金属の天体、金属生命体の宇宙人、……そしてガイア仮説。それらを結びつけると、一つの結論が浮かび上がってくる。

「星そのものが宇宙人なのか!」

『解析、直径が約3400kmの金属生命体』

元々は異星に棲まう宇宙人を絶滅させ、星は亜空間ポケットに入れ

たままにしておく予定であった。だが、全てが覆る。

戦争に勝利するためには、キャノンボールそのものを破壊する必要がある。更に、普通の宇宙人と違ってキャノンボールは生命力さえ保有する。妖怪の能力は通用せず、物理的な破壊しか通用しない。

「関係ありませんわ！」

そこに、一人の最強が君臨する。

「星一つ程度、破壊できるに決まっていますわ。わたくしをあまり舐めないことですよわね」

キャノンボールにクレーターができる。

ただのパンチで星を破壊する。

「すごいなチカさん……一瞬で味方の士気を高めた」

それだけじゃない。

周辺には中継用カメラが浮かんでいる。これは生中継で全世界に配信しており、妖怪が発生するための思念を集中させている。

チカさんの言葉は地球の人たちの不安を和らげる。

「さて、オレも仕事をやるか」

オレの仕事はクローン怪獣の退治。

仕事をやろうと一歩を踏み出す、が。

『注意、足元に落とし穴が出現』

「……………え？」

落ちる、落ちる、落ちる。

飛行ユニットを展開しようと試みるが、それよりも先に穴の底へ到着する。それと共に上の穴が塞がっていく。

そこには一本の道があるだけだった。

明らかに罠だ。だが、進むほかない。

『解析、周囲の壁は金属生命体』

「宇宙人に囲まれてるのか……」

奥に明かりが灯った大広間があった。

そこに誰かがいた。

「……………は？」

そこにいたのは一人の黒髪美少女。

オレと全く同じ顔の少女だった。

異なる点は二つだけ。髪色と目つきだけがオレとは違った。

「お前は、まさか……」

『解析、DNA一致率100%』

新しい<sup>オーバーホール・サイボーグ</sup>全身義体改造人間を造ったという話は聞いていない。だが、改造人間を造れるのは『ガバメント』だけじゃない。

「久しぶりだなあ、おにいちゃん？」

「……天城セカンド、なのか？」

「死んだとも思ったかあ？だが、テメエは死体を確認した訳じゃねえだろ」

……その通りだ。

あの時、チカさんに頭を砕かれたセカンドはワープの穴に消えていった。宇宙人の技術力であれば、あの状態からでも蘇生出来るのか

もしれない。

いや、蘇生出来なかったからこそ、オレと同じような機からだ体になつて  
いるのか？

「お前も全身義体改造人間になるとはな」

「テメエらごときの劣化技術と同じにするな。肉体を置換するだけ  
じゃねえ、おれたちは既にその先を行っている」

『報告、機体内部に生体部分を保有』

「……は？」

セカンドの背中から翼が生える。

いや、違う。背中だけじゃない。全身から肥大化した肉が盛り上が  
り、セカンドは肉の鎧を纏う。

その姿は言葉では表せない。蠢く影、不定形の肉、血肉のスライム。  
この怪物にはどんな形容詞だって相応しくない。六枚の翼を広げて、  
怪物は佇む。

地球のサイボーグ技術は肉体の置換に留まっている。改造後は元  
の肉体のサイズを大幅に超えることはできない。だが、セカンドの  
機からだ体はそれを無視している。機からだ体よりも肥大化した肉。しかも、ただ  
の肉じゃない。

「クローン怪獣を見て思いつかなかったのか？おれたちは怪獣細胞の  
制御に成功した……つまり、超人だっていくらでも造れるに決まっ  
てるだろおが！」

怪獣の肉体を纏ったセカンドが言い放つ。

もはや、超人ですらなかった。怪獣の細胞に適応した人類ではな  
く、怪獣の肉体を操る改造人サイボーグ間。

「宇宙人によって作られた次世代改造人サイボーグ間、……超過機体改造人オーバーフロー・サイボーグ間と  
でも呼ぶか。怪獣と宇宙人の力を両方とも持つとか、欲張りセットに

も程があると思うぞ」

「うるせえよ、そこで死んどけ」

『注意、毒性の霧を噴出』

咄嗟に後方へ跳ぶ。

それが正解だった。改造人間サイボーグのオレに毒は通用しない。しかし、オレが元々いた場所が、毒液の噴射によって切断されていた。この能力は毒だけではないと、オレは既に知っていた。

『推測、超高压水流切断』

「毒霧怪獣か!？」

そうだ、思い出せ。オレが毒霧怪獣の討伐という依頼を受けたのは『アウトロー』の隠れ家……梅田の地下迷宮でだ。つまり、毒霧怪獣の戦利品も地下迷宮に回収されていてもおかしくはない。そして、あの場所に誰がいたのか。オレはあそこで何と戦闘したのか。

「あの宇宙人は怪獣の細胞を奪う役目を持っていた。オレたちが破壊した後、空間跳躍で回収でもしたのか？」

「怪獣だけじゃねえぞ」

蛇のように変化した翼がこちらへ向けられる。間違はなくウォーターカッターの予兆だ。それだけじゃない。金属生命体の壁が起動し、オレにビームの照準を合わせる。

必死に避けようとするが、足が動かない。

いつの間にか、オレの足に糸か綿のような何かが纏わりついていった。咄嗟に足ごと機体からだを切り離し、全ての攻撃を紙一重で回避する。……いや、幾つかの攻撃は掠ったが、戦闘に支障はない程度の損傷だ。そんなことよりも、重要なことがある。

『換装、予備脚部を装着。報告、脚部の残数はゼロ』

「くそつ、足まがりか！だったら、狐火の能力もあるか!?お前どんだけだよ!?!」

「おれたちは全ての脅威を手中に収めた。おれたちの技術、怪獣の細胞、そして妖怪の能力。量産は出来なかったがおれはその全ての力を保有している」

迂闊だった。あの時の宇宙人を回収しているなら、取り憑いていた足まがりと狐火も回収していたと考えるべきだった。

さながらボスラツシュ、もしくは再生怪人と言ったところか。違うところと言えば、討伐した時と同じ手は使えないことだ。

「視覚を遮断してくれ、音で周囲を探知する。視覚系のセンサーも全て使えないことを前提として動くぞ」

『了解、視覚遮断』

毒霧怪獣は乾燥によつて討伐できた。だが、セカンドにも亜空間ポケットがあると考えられる以上、水分の不足はあり得ない。

足まがりと狐火はチカさんとカイの力によつて討伐できた。だが、ここにオレ一人しかない以上、同じ手段を使うことは不可能だ。

「おれはもう、ただの天城セカンドじゃねえ。改めて名乗ろう、おれは天城セカンド ネクスト 改。宇宙人であり、怪獣であり、妖怪であり、人類であり、それら全てと異なる最強の生命体だ」

ネーミングセンスが最悪すぎる。

だが、間抜けな名前に反して、その脅威は本物だ。三つの脅威を全て併せ持つということは、三竦みによる弱点が存在しないということだ。自力の戦闘力が低いオレにとっては、ある意味では天敵に等しい。

前方には弱点を持たないオレの天敵。

周囲は金属生命体の壁。

近くに味方は存在しない。

「ちよつとやばいな」

「諦めろよ、テメエ一人じゃ何も出来ねえんだ。身の程を知れて良かったじゃねえか」

……そうだ、セカンドの言う通りだ。

オレは一人じゃ何もできない。いつだってオレは人の力を借りてきた。初心を思い出せ、自分一人で戦おうとするな。

他力本願でも勝ちには勝ちだ。手段を選ばず、そのためにオレはこれ造って貰ったのだから。亜空間ポケットからリモコンのような物を取り出し、握り締める。

「そうだ、オレ一人じゃ勝てない。だから、少し力を借りるよ」

「馬鹿かあ？何処の誰にテメエに力を貸すヤツがいるんだあ？ここにはテメエ一人しかいねえんだよ！」

「いいや、お前たちがいるだろう？」

「……………は？」

『起動、機体支配ユニット』

壁の金属生命体が一齐に不自然な動きをする。そのどれもがセカンドにビームの照準を合わせる。壁は既にオレの味方になっている。

「テメエ……ハッキングだと!?よりもよつて、そんな兵装を作りやがったのか?!?」

「前に地下迷宮でジャミングしてただろ、あそこから思いついた。オレ一人じゃ勝てないのなら、敵を味方につければいいつてな！」

これこそがオレの特殊兵装、機体支配ユニット。宇宙人の機体からだに接続して操作する、まるでラスボスのような能力だ。宇宙人相手には無敵のような力だが、効果範囲が非常に狭く、効果自体もそれほど長く



は続かず、その上に起動するまでに時間がかかるといふ欠点を持つ。  
セカンドの機体からだに接続することはできたが、操作するのは不可能  
だった。恐らく、機体からだに妖怪が混ざっているため、拒否反応を起こし  
ているのだろう。一部のパーツに誤作動を起こすぐらいは出来るか  
もしれないが、動きを操ることは無理だ。  
だが、それだけで十分だ。これで、数の差がひっくり返った。

「殺し合おうぜ、最強の生命体！」  
「殺つてやらあ、他力本願クソ野郎！」

先に仕掛けたのはオレだ。

全方位のビームを一斉に起動させ、セカンドを囲んで撃つ。眩い光  
がセカンドを圧殺する。

だが、セカンドには傷ひとつない。怪獣の肉体が光熱を阻む。

「効くわけねえだろおが！」

「知ってるよ」

『起動、超音波振動剣』

毒霧怪獣の汗は耐熱性を持つ。

だから、これはただの目眩しに過ぎない。怪獣の肉体がある限り、  
ほとんどの攻撃は致命傷にはならない。なら、まずは肉を削ぎ落と  
す。

切つて斬つて、切り刻む。

「ちよこまかとうつとおしい!!!」

「そつちは凶体はデカくても、動きは鈍間だな。目が見えなくても、動  
きが大振りです避けやすいよ」

切るだけでは怪獣の肉体は再生する。

だったら、傷口を焼けばいい。剣で切り、ビームで焼く。それを何



セカンドの心臓に照準を当てて放つ。  
装填された砲弾がセカンドを抉る。

……その一瞬前。

「そおだろうと思っただぜ」

ゴバツツツツツツツツツツ!!!!!!!

それは音なんて生易しいものではなかった。

音自体が殺傷力を持つほどの衝撃、それがオレの全身を襲った。痛みを感じないからこそ、全身が存在するかさえ分からない。ただただ、機体が熱い。オーバーヒートしている可能性もある。

耳が聞こえない。オレには鼓膜なんて物はないが、鼓膜に該当するパーツが破損しているのかもしれない。

それとも、オレはもう死んでいるのだろうか。例え幻影を見せられるとしても、周囲の状況とオレの状態を知るためにスーパーアイを起動させる。

「……………」

目の前にいたのはセカンド。

どうやらオレは仰向けで倒れているようだ。セカンドの口が動いている。唇の動きを読んで、セカンドの言葉が頭の中で自動的に翻訳される。

「テメエがおれに勝てるでも思っただか？力を与えられてばかりのテメエがよ」

壊れたのか、AIは沈黙している。

壊れたのか、オレも全く動けない。

「テメエの一番厄介な所は解析能力、つまりスーパーアイだった。あ

れがあるだけで、あらゆる策は通用しねえ。だから、初めに眼を封じさせてもらった」

狐火の幻影は面倒くさい能力だが、タネさえ分かれば対処可能な能力だった。逆に言えば、対象せざるを得ない能力だったとも言える。

セカンドはそれを利用した。切り札ではなく見せ札として狐火を使うことで、視覚を遮断するという対処を誘発させた。

「後は簡単だ、毒霧と一緒に可燃ガスを充満させた。テメエは毒霧怪獣だけだと思ってたよおだが、もう一体の怪獣を知ってんだろ？」

……浮遊怪獣だ。

京都で戦ったあの怪獣は、体内が水素で満ちている。それを毒霧怪獣と組み合わせ、水素を噴射するように生態を作り替えた。やっていることは人間と同じ、つまり改造怪獣だということだ。

「衝撃波は空間跳躍で防げる。熱も汗で対処可能だ。後はテメエの自爆をただ待つだけでいい」

ビームでは爆発が起こらなかったのが不思議だが、そもそもビームは宇宙人の兵装だ。何らかの細工がしてあってもおかしくない。だが、オレの兵装には何の細工も施されていない。最後のなんとか砲が引火の原因になったのだろう。具体的にビームどんな工夫がしてあったのか、分かることは二度とない。

「じゃあな……なかなか強かったぜ、テメエ」

「……………あ」

セカンドが足でオレの頭を踏みつける。

やばい……全身義体改造人間は脳だけは改造されていない。つまり、脳だけは替えが効かないということでもある。頭を踏み潰された

らオレは終わる。

しかし、機体は一切動かない。機体のパーツにエラーが出ている上に、脳が揺れて機体との接続がおかしくなっている。

セカンドが足に力を込める。

グシャツツツツという音と共に、オレの頭が弾ける。血が辺りに飛び散る。

そして、天城レイは三度目の死を迎えた。

いつの間にか、白い空間にいた。

天と地の区別がつかず、白すぎて眩しい。

ここはどこだ？

「ここは君の夢の中さ」

後ろから声が聞こえる。

振り返るとそこには小さな影が見える。

逆光なのかシルエットしか見えない。

だが、それだけで正体が分かった。

……カイ、話せたのか。

「二週間前、君はバンシーに殺された。君は間違いなく絶命した。生命力を付与した程度では蘇生出来ないほどね」

やばい、頭が回らない。

「だから、僕の細胞を分け与えた。いや、正確に言うと僕はカイではなくカイが分け与えた細胞に過ぎないけどね。つまり、分かるかい？君は怪獣の細胞を保有している」

重要な話をしているのだろうか、頭がぼうつとして理解できない。

「怪獣の細胞を保有しているからといって、誰しもが超人になれる訳じゃないし、例え超人であっても頭を潰されたら再生出来る訳がない。だけど、僕と君は例外だ」

……？

「元の僕は……新星怪獣カイは、進化という生態を持つ。本来ならばあらゆる生命よりも強くなり、新たな地球となるための能力だ。今の地球を捨て去り、新たな生命圏を作り出そうとしていたからこそ、カイは妖怪からも宇宙人からも狙われていたのさ」

新たな……地球？

「だけど、君はカイを何度も守った。そして、カイの進化も予定とは違った方向へ伸びた。結果的に、カイは君と意思疎通する能力と他者に生命力を付与する能力が強化された。ならば、君が僕という細胞に適合するのも、細胞に過ぎない僕が君を蘇生させられるのも何らおかしくない。つまり、これは君が育てた能力だってことさ」

新たな地球って何だ？

「そこに興味を持ったのかい？うーん、何て言えば良いのかな。まず、

「怪獣っていうのは地球の手足のようなものなんだ。地球が怪獣であると言い換えてもいい。名付けるなら、地球怪獣ガイアかな」

宇宙人とキャノンボールみたいなものか？

「大体そんな感じだね。だけど、カイは違う。カイはガイアとは完全に別個体、つまりはガイアの子供みたいなものなのさ。自己の生存を諦めたガイアが、種の生存を優先したってこと」

生物みたいだな。

「そうさ、これは生存競争なんだよ。人類と宇宙人と地球による生存競争、一つの種族しか生き残れない戦争だね」

……地球もなのか？

「ガイア仮説はほとんど正解なんだけど、そこだけが間違っていた。怪獣が現れたのは宇宙人が原因じゃない、宇宙人がいなくなっても怪獣被害が無くなることはない」

考えてみればその通りだ。

怪獣はいつだって宇宙人でなく人類を襲う。

ならば、怪獣が現れた理由も人類にあると考えた方が自然だ。

「エネルギー問題に繋がる話さ。人類は地球の資源を食い潰し過ぎた、だから地球は生きるために人類を滅ぼすしかなかった。君たちが真の意味で生き残るには、地球と異星の両方を滅ぼさなければならぬ」

それは……悲しい話だ。

「君がそう言ってくれるなら、きっと母さん地球も喜ぶよ。僕という細胞を身に宿す君は、地球とも繋がっている。君の声は母さんにも届く。……まあ、その声を届けるには少しばかり遅かったけどね」

どういふことだと聞き返す暇はなかった。

白い世界にヒビが入る。

この夢が終わりを迎える。

「さあ、戦争の再開だよ。宇宙人と人類の戦争じゃない。何もかも巻き込んだ第二次超常戦争の始まりだ。今度こそ君は、君一人の力で戦わねばならない」

声が遠のいていく。

意識が目覚め始める。

「……でも、僕は期待しているよ。きっと君は、誰も予想できなかった事をやり遂げてくれるってね」

最後にその言葉を聞いて、オレは目を覚ました。

「……どうしてテメエはまだ生きている」

辺りを見回す。目の前にはセカンドが驚愕した顔で立っている。機械支配ユニットの効果も続いている。死んでから大した時間は経っていないようだ。

「また、助けられた。他力本願クソ野郎の真骨頂だと思ってくれたらいいよ」



何が君が育てた能力だよ。

そんな訳あるか。いつだって、カイには助けられてばかりだ。借りが積み重なるばかりで、一向に返せる気配はない。

「……生き返ったからなんだ、テメエをもう一度殺せば済む話だろおが！」

「そう簡単に行くかよ。お前の能力はもう全て分かった。だが、お前はオレが生き返った方法も何も分からないんだろ？」

セカンドが言い淀む。

理解不能の能力が最も恐ろしいからだ。

今のうちに考えろ。今ある手札で、セカンドをどうやって倒すのか。セカンドの持つ能力は全て戦ったことのあるものだ。あの時のことを思い出せ。記憶が走馬燈のように駆け巡る。

オホーツク海で毒霧怪獣と戦った。

梅田で足曲がり狐火と戦った。

京都でセカンドと浮遊怪獣と戦った。

いつだって、オレ一人で勝てたわけではなかった。AI、カイ、チカさん、フミさん、『アウトロー』の人たち。……そうだ、オレは一人だが独りじゃない。この場になくても、みんながオレの心を支えてくれている。

やってやる、他力本願クソ野郎の本領発揮だ。

「オレが生き返ったのは、カイのおかげだ。カイの細胞に適合して、新たな超人になった」

「……だったら、次は脳みそを潰すだけじゃねえ。切り分けて、再生できないうまで燃やせば終わりだ！」

「超人は強力な生命力と、怪獣由来の特殊な生態を保有する。お前、カイの生態を忘れてるんじゃないか？」

「……何だと？」

再生は全ての怪獣が保有する基礎能力だ。  
進化はカイにしか保有できない特殊能力だ。  
だが、もう一つある。

「梅田での戦闘を覗き見してたのなら、お前を知ってるだろ？カイの生態、分かりやすく特殊な能力がもう一つあることを」

「火炎噴射か!？」

「カイは恒星にでもなろうとしたのか。それとも地熱を既に内包していたのか。どちらにしろ、カイは強力な熱源とそれに耐えるだけの身体構造を得ている」

「馬鹿か!?!例え火が吹けても何も変わらねえ! テメエが自爆して死ぬだけだ!」

「バカはお前だ。オレは火炎噴射の能力を持っていない。だが、オレは言ったぞ。カイは強力な熱源に耐えるだけの身体構造を持つてるってな! 爆発なんか効くわけないだろうが!!」

「テメエ……!!!」

「さあ! 殺し合おうぜ! 空間跳躍<sup>ワープ</sup>で防御する暇なんて与えない。汗が乾くまでいつまでもやってやる。どっちが先に爆発でくたばるか、我慢比べといくか!!!」

セカンドが背を向けて逃走する。指揮官としての役割もあるのなら、それは当然だ。だが、逃すわけがない。

飛行ユニットを破壊されているため、両脚を展開して全速力で追いかける。スーパーアイがセカンドを捉える。足りないパーツを怪獣細胞で補填する。足に綿糸が絡まるが関係ない、力づくで引きちぎる。妖怪の能力は圧倒的な生命力を前に無力となる。

「自爆特攻とか頭が茹だってるのか!?!来るんじゃない!!」

「逃がさないよ。お前は宇宙人の勢力の中で、唯一、人類的な思考ができる敵だ。細かい応用力の無い宇宙人と違って、お前は工夫をよく知っている。怪獣の量産化もお前の発想だろ? お前が異星文明にお

ける最大の脅威だろうよ」

「こつちのセリフだ、クソ野郎。……あの怪獣の細胞を取り込みやがった以上、放ってはおけねえ。おれも腹を括った。テメエだけはこので殺す」

機体からだから可燃性の液体を右腕に垂らし、拳を炎上させる。爆発しないことから、空気中に水素は充満していないようだ。だが、関係ない。セカンドが纏う怪獣の肉体の中に、水素はいくらでも詰まっている。怪獣の肉をぶった斬って、中に手を突っ込めばそれで終わりだ。

対して、セカンドはウォーターカッターを連発する。それはそうだ。体内での爆発など、ワープでも防げないだろう。怪獣の肉体から大量の水を噴射し、火を掻き消そうと必死に足掻く。

そして……

「ハツタリに決まってるんだろ」

「はっ？」

スパツとソードを左手から展開し、怪獣の肉体を切り裂く。畳み掛けるように、金属生命体の壁を操作してビームを乱射する。

「耐爆能力なんてものを都合良く獲得できる訳がないだろ、常識的に考えろ」

「どの口で言ってる!?」

オレがカイから与えられた能力は生命力付与。火炎噴射なんていう一度しか使っていない能力は受け取っていない。そもそも、カイからして耐爆能力なんて物は持っていない。

だが、ハツタリに意味がなかったわけじゃない。オレがハツタリをかました理由は二つある。一つは時間稼ぎ、そしてもう一つはすぐに分かる。

「耐爆能力なんて獲得する必要はない。だって、もうお前は水素を噴射できないからな」

「何を言ってる……はあ!？」

怪獣の肉体がひび割れ、ミイラのようなになる。

理由は簡単、かつて毒霧怪獣を討伐した時と同じ。つまり、水分不足だ。

「お前と同じだよ。お前は狐火を見せ札として利用し、オレに視覚遮断を誘発させた。オレは架空の耐爆能力をでっち上げ、お前にウォーターカッターを誘発させた。その結果がこれだ」

「いいや、それじゃ説明にならねえ！おれは亜空間ポケットに大量の水を収納している！この程度の消費で乾燥するはずがねえ!!」

「亜空間ポケットと言ってはいるが、それは出口がないだけの空間跳躍だ。だったら、出口を作ってしまったら、中身は何処かへ飛んでいくだろう?」

そもそもの話、怪獣にとって宇宙人は天敵だ。つまり、宇宙人の力を使えば、怪獣に対して勝ち目が生まれる。

「……いい、いや、まだだ。亜空間ポケットはおれの脳と接続している。テメエが干渉できるはずがねえだろ!？」

「忘れたのか?」

セカンドにリモコンのような特殊兵装……機械支配ユニットを見せる。妖怪が取り憑いたセカンドの機体は操れない。

しかし、それは機体<sup>からだ</sup>だけだ。

「オレはお前と接続している。パーツ程度なら幾らでも自由に誤作動を引き起こせる」

「……………そうだな、テメエの言う通りだ。おれはハツタリに引つか

かった。だが、怪獣の肉体が無くなったから何だっただ。この程度におれに勝てるだけでも思ってたのか?」

「勝てないのは分かってる」

そもそも兵装の差からして、オレとセカンドは互角だった。それか、セカンドの方が強かったかもしれない。爆発で重傷を負っているオレと、怪獣の肉体以外には無傷のセカンド。戦うまでもない、結果は明らかだ。

「でもさ、ここにいるのはオレだけじゃない。ここで戦ってるのはセカンドだけじゃない。なあ、そうだろ!お前らも好き勝手使われるのは我慢ならないんじゃないのか!!」

宇宙人の天敵は妖怪だ。オレが持つてる宇宙人と怪獣の力は、セカンドには効果がイマイチだと言える。だったら、妖怪の力を借りればいい。だって、ここにはいるだろう。

「オレはセカンドに勝てない。だから、お前らの力を貸せ。足曲がり!狐火!」

直後、綿糸がセカンドの足を絡め取り、幻の炎が全身を包む。足が破壊され、視覚情報がグチャグチャになる。

「テメエ……やりやがったな!?!そうだ、思い出した!怪獣カイは他者に生命力を付与する能力を持つ、機体からだに取り憑く妖怪を活性化させやがったな!?!」

「お前は半妖じゃない。妖怪は取り憑いているだけで、力を貸している訳じゃない。だったら、どうして操られているのか。怪獣の力で従えられているか、そもそも弱っているかのどっちかに決まってる。だから、どっちも解決した」



「当たり前だろおが!! どうして宇宙人の見た目が全て人型なんだと思ってる!?! テメエらと友好的に接するために決まってんだろおが!!」  
「……………っ!?!」

宇宙人という、異星という絶対的な悪。

そう決めつけて、本当の姿を見ていなかった。

宇宙人は地球に侵略して来た……………侵略ではなく来訪だったのではないか?

宇宙人は文明の略奪者だ……………仲良くなるために学習しているのではないか?

宇宙人は人類を襲撃している……………本当に宇宙人の意志で襲撃していたのか?

宇宙人は人類の脅威だ……………人類と共存できる存在だったのではないか?

「宇宙人は空間跳躍ワープの事故で元の銀河を見失い、宇宙を彷徨う迷子になった。それから、宇宙人は故郷に帰る技術を探して文明に接触するようになった。おれ達は帰りたいだけなんだ、おれは宇宙人を帰したいだけなんだ」

……………元の居場所に帰りた、その気持ちは痛いほど良く分かった。

「地球を見つけて、友好的に接触するために準備を進めていた。だが、十年前にその準備が全て無駄になった」

十年前……………人類、地球、異星、全てを巻き込んだターニングポイント。

「第一次超常戦争! 宇宙人は地球にいる存在にハッキングされ、地球を侵略するように仕向けられた! それでも、宇宙人は地球勢力と友好

的に接することを諦めなかった。でも八年前にそんな態度も終わった、宇宙人は人類を滅ぼすことに決めた」

「……八年前？」

「そうだ、心当たりがあるに決まってるよなあ!? テメエだよ! 天城レイ!!!」

オレが……オレが原因なのか？

オレは誘アブダクション拐アブダクションされていた間のことは、何も覚えていない。いや、そもそもあれは本当に誘アブダクション拐アブダクションだったのか？

「これまでは、操られて地球を襲撃させられていた。だが、その時初めて異星は襲撃された。テメエにな」

「……………」

「誰が宇宙人をハッキングしたのかは分からねえ。テメエの意志で異星を襲撃したとも思ってたねえ。だが、おれ達は人類ごと異星の脅威を滅ぼすと決めた。そうすることでしか生きられないと悟ったからだ」  
「……お前は？ お前は宇宙人じゃないだろう。宇宙人から産まれたのだとしても、協力する必要はない。お前は どうして宇宙人に手を貸すんだ？」

セカンドは不思議そうな顔をした。

「そうしてえと思っただからだ。襲撃者の体細胞から作られたクローンにも優しくしてくれるんだぞ？ 救わねえ理由がねえだろ」

……それで、もうダメだった。

オレに宇宙人は滅ぼせない。セカンドは殺せない。助けたいと思ってしまった。

『提言、行動の実行停止』



壊れたと思っていたAIが息を吹き返す。  
だが、最悪の事実におレは気づく。

「お前だろ？」

『……………』

オレを改造したのは宇宙人じゃない。

そもそも、不思議だった。宇宙人は金属に知能が宿る金属生命体。ならば、人工知能を作る必要がない。なのに、オレにはAIが搭載されている。

人類は宇宙人をハッキングできない。出来るようになったのはオレの兵装が初めてで、十年前には存在していない。ならば、誰の仕業なのか。決まってる、妖怪の仕業だ。

「十年前の真相はこうだ。人類が原因で怪獣が発生し、怪獣の生命力で妖怪が繁栄する。そして強化された妖怪<sup>A</sup>が宇宙人をハッキングした。……正体を現せよ」

『……………正解、よく分かった』

頭から、身体から何かが抜ける。

オレに取り憑いた妖怪が剥がれる。

“それ”は宇宙人より宇宙人らしい、エイリアンのような見た目をしていた。

“それ”は醜悪な悪魔のようにも見えた。

“それ”こそが人類の脅威にして異星の脅威。

『回答、私の名前はグレムリン。別名、文明の捕食者……貴方達を滅ぼす者』

直後、周囲が爆発する。

いつの間にか、機械支配ユニットの効果が切れている。グレムリン

が壁の金属生命体をハッキングして、自爆させたのだろう。

オレは咄嗟にセカンドを庇うが、逆にセカンドの展開した兵装によって爆撃が防がれる。

「一旦逃げるぞ、レイ！おれは足を破壊されてる、テメエがいなきや移動すらできねえ！」

「セカンド、お前……」

「勘違いすんじゃないやねえぞ。テメエを助けたんじゃないやねえ、対グレムリンの戦力が惜しかったただけだ」

顔を逸らしてセカンドが言う。

耳が赤いので、照れ隠しなのだろう。

中継用カメラが浮いているのが見える。あれもグレムリンにハッキングされているのかもしれない。

『……疑問、どうして人類の脅威を助ける？確認、それは世界全てを敵に回す行動』

「確かに、人類から見たら悪なのかもしれない。宇宙人とは殺し合うしかなかったのかもしれない。だけど、今は違うだろ!? 和解できるかもしれないんだぞ!? 戦争を終わらせることが出来るかもしれないだ!!!」

夢物語が現実になる。

これ以上犠牲を出さず、平和を作れるかもしれない。人類全体にとつてもこっちの方がいいに決まってる。

……いや、全部嘘だ。そんなこと考えていない。ただ、オレは……

「世界も人類も関係ない、オレがセカンドを……宇宙人を助けたいと思っただけだ。ただ、それだけだ!!」

「……もう無理じゃないやねえの？宇宙人も諦めてる、この戦争はどちらかが滅ぶまで終わらないってな。だから、せめてグレムリンだけは

殺す。ヤツの一人勝ちだけは絶対に防いで見せる」

逃げる場所なんて何処にもない。

隠れる場所なんて何処にもない。

文字通り人類の全てが宇宙人を憎んでいる。

宇宙の何処にも居場所のない星は、地球の何にだって受け入れられない。

セカンドだって、宇宙人だって諦めている。

人類も地球も戦争を受け入れている。

拒否しているのはただ一人、オレだけだ。

「この戦争は止まらねえんだ。テメエは知らねえだろうけど、地球では怪獣も暴れ回ってる。もう、おれ達だけの問題じゃねえんだ。それぞれが、それぞれの命を賭けて戦ってる。和解なんて、もう無理なんだよ……」

セカンドは涙を流して笑う。もう無理なことだけど、一人でもそんな馬鹿なことを考えてくれて嬉しいと言ったふうに笑う、

もし人類が勝ったとして、地球と異星を滅ぼすのかもしれない。数多の犠牲の上で終戦記念日なんて作って、ニコニコ笑って教科書に載せるのかもしれない。

人類だけの世界で笑顔で生きていくのだろう。

「それなら……」

そんなの人類滅亡の方がマシだ。

目の前で少女が泣いている。少女なのは見た目だけで、中身は宇宙人に作られた化け物なのかもしれない。それがどうした。

一人の少女と全ての人類。そんなもの、少女を優先するに決まっている。少女の涙を拭えない人類に価値なんてない。

だから、叫べ。文明の捕食者とか人類全てとか、そんなの関係ない。

オレの心がそう叫んでいる。だから！

「それなら、オレがお前を救う。世界の全てを敵に回したとしても!!」

「戦え、少女の涙を拭うために。  
救え、荒れ狂う異星を!!!」

難しい話ではない。

涙を流す少女がいた。

少女は本当は少女でないのだとしても。

本当は人類の脅威なのだとしても。

オレはその結末に耐えられなかった。

だったら、やることは一つだ。

覚悟を決めろ、拳を握りしめろ。

世界を敵に回しても、少女を救う。

これは今までの戦いとは異なる。

脅威を撃破する戦いではない。

味方を防衛する戦いではない。

そもそもの戦いに終止符を打つ。

天城セカンドが笑える世界にする。

これは、そういった戦いだ。

バッドエンド  
人類滅亡に興味はない。

ビターエンド  
人類だけの生存も許せない。

ビターエンド  
欲しいのは誰もが幸福な世界だけだ。

宇宙人が幸せにならないと、天城セカンドが笑えないと言うのならば。

絶対に、宇宙人ごとセカンドを救ってみせる。

「……要するに」

天城セカンド。宇宙人の兵装も、怪獣の肉体も、妖怪の能力も失ったその少女（元男）は、オレに向かってこう言った。

「馬鹿は死んでも治らねえってことだろ？」

「あの、そこまで言わなくても……」

オレたちは瓦礫の下に潜んでいた。

近くにグレムリンはいない。グレムリンとの戦闘後、セカンドのワープを使って逃走し、今は二人で相談している。

「テメエの言い分は分かった。だが、具体的にどうする？ 三大勢力の全てが敵に回り、グレムリンという最悪の敵が未だ存在し、地球でも怪獣が暴れている。敵は多いし、逃げ場もねえ。どうしようもねえだろ」

「……どうしようか」

「馬鹿か!? あれだけ啖呵を切つといて、何も考えてなかったのか!? 宇宙人を救う方法も、戦争を止める武力も、おれ達には何もねえんだぞ!?!」

「待った待った、暴れるな! そんなボロボロの服で暴れると、色々見えすぎるんだって!」

「見た目同じだろおが……気にすんな!!」

「気になるわ! 見た目同じだから、なおさらオレまで恥ずかしくなるわ!!」

暴れるセカンドを宥め、必死に考える。

まずは情報を整理する。

まず、オレたちの目的は宇宙人を救うこと。具体的には、第二次超常戦争を止める。宇宙人を故郷に返す。そのための方法を探る。

次に、オレたちの障害は三つある。

一つ目はグレムリン。キャノンボール上に存在する全ての機械を支配する、最悪の妖怪。文明を捕食する異星の脅威。

二つ目は地球怪獣ガイア。カイの生みの親にして、地球そのもの。怪獣の母体。現在、地球上で怪獣を暴れさせている人類の脅威。

三つ目は三大勢力。『ガバメント』、『カンパニー』、『アウトロー』。改造人間、超人、半妖。人類を守るために人類の脅威を滅ぼす、人類の味方。

最後に、オレたちの今の戦力。

オレは幾つかの兵装と、カイの細胞を持つ。特殊兵装の機械支配ユニットは、グレムリンの攻撃で破壊されているので使用できない。怪獣のカイは力を貸してくれるかもしれないが、他の仲間である三大勢力は敵に回っている。

セカンドが使える兵装は空間跳躍<sup>ワーブ</sup>だけ。仲間である宇宙人は、グレムリンに操られて敵に回っている。

「……詰んでないか？」

「だから言ってるんだろ。無理なんだよ……」

「なら、いつも通りやるしかないよな」

「何か思いついたのか？」

一人で無理なら二人で。

二人で無理なら三人で。

それでも無理ならもつと沢山。やることはいつだって同じだ。

「グレムリンに力を貸してもらおう」

「はあ!？」

「あらゆる機械を支配できるグレムリンが、オレたち二人を逃すとは思えない。出てこいよ、何処かに潜んでるんだろ?」

空間が揺らぎ、立体映像<sup>ホログラム</sup>のように現れる。

それこそが妖怪グレムリン。

宇宙人よりも宇宙人らしい、エイリアンの如き容貌をした異星の脅威。

『応答、よく気がついた』

「気づかないわけないだろ。オレがどれだけお前の相棒をやってきたと思ってる」

その言葉に、グレムリンが目を見張る。  
オレの信頼の眼差しに気づいたのかもしれない。

「頭沸いてんのか!?コイツはテメエの身体を乗っ取って、異星を襲撃した全ての元凶なんだぞ!!」

「いいや、オレはもう間違えない。一方的に悪だと決めつけて、一方的に攻撃するだなんてもうごめんだ!」

グレムリンは文明の捕食者である。

グレムリンは異星の脅威である。

グレムリンは絶対的な悪である。

……本当にそうなのか?

オレはもう信じることを諦めない!

「オレはグレムリンを信じてる。グレムリンが異星を襲撃したのは真実かもしれない、グレムリンが宇宙人をハッキングしたのも真実かもしれない。でも……お前はそれが全てなんかじゃない!お前は何度もオレを助けてくれた、お前はひとりぼっちになったオレの心の支えだった!」

『……………あ』

「そもそも、お前には宇宙人をハッキングする動機がない。妖怪が人類を襲うのはその生命力を必要とするからだ。でも、宇宙人に人類を襲わせたとして、それがお前に何の得があるっていうんだ。だから……それはきつと、他人のための行動なんだ」

宇宙人が人類を襲わなかった場合、第一次超常戦争はどうなっていたのだろうか。

迫り来る二つの脅威。

存在しない宇宙人という要因。

宇宙人は多くの犠牲者を生み出したが、生み出したのは犠牲者だけ



じゃなかった。

「お前、人類を救いたかったんだろ？」

「はあ？どおいうことだよ……」

「人類の脅威の三竦みだよ。宇宙人がいなかったら、『ガバメント』のサイボーグ技術も存在しない。つまり、怪獣の天敵が存在しなくなるんだよ。しかも、半妖や超人は妖怪の血統や奇跡的な偶然といった要因によって生まれる。努力で作成できる改造人間サイボーグとは違って、簡単には増えない。これじゃあ、人類は怪獣に滅ぼされていても可笑しくはない」

『わ、たし、は………』

「そもそも、三竦みっていうものが人類に都合が良すぎて不自然だったんだよ。怪獣の弱点をつける上に、お前が制御できるものを選んだら？お前は怪獣から人類を救いたかった。だから、宇宙人を地球へ呼ぶ必要があった」

グレムリンは悪じゃない。人類を救うことと、人類の脅威を増やすことは矛盾しない。

もしかすると、グレムリンには人類を救う以外の目的もあったのかもしれない。でも、オレはグレムリンを信じている。例えどんな目的があつたとしても、グレムリンは人類を見捨てられないし、オレのことを助けてくれる。それがわかる程度には、一緒にいたんだ。

「十年前だけじゃねえぞ！八年前……テメエが異星を襲撃した件はどうやって説明する!? テメエだつて女に作り替えられたんじゃないのかよ!？」

「そんなの知るか！でも……きつと、そうしただけの理由があつたんだ！人類にも宇宙人にも被害を与えたのかもしれないけど、それでもグレムリンは悪いだけの存在じゃないんだ！だから教えてくれ、グレムリン！あの日に何があつたのか!! 全ての原因となつたお前の動機を、オレとお前の関わりを!!」

グレムリンは人類を救った。

グレムリンは異星を襲撃した。

グレムリンはオレに寄り憑いた。

そこに、グレムリンの動機が隠されている。

八年前の事件にオレが関わっていたのなら、きっと悪いのはグレムリンじゃなくてオレなんだ。

『……回答、……私は、人類を救うつもりなんてなかった。しかし、私たち妖怪は人類に形作られた存在で、人類が滅亡した未来は私たちにとつても都合が悪かった。私は……私たちは、ただ生きたいだけなんだ。人類から生まれたのに、人類を喰らうような矛盾した存在でも、生きていたかった……』

グレムリンは息を深く飲む。

その見た目は悪魔のようであつたが、その目は迷子の少女のように泣きそうだった。

『でも、八年前……私がレイを殺したときに全部諦めた。どれだけ理性で耐えても、妖怪の本性は揺らがない。存在の揺らぎは、生命力の飢えは満たされない。あの時、妖怪は滅ぶべきだと気づいた』

それこそが天城レイの一度目の死。

飢えに耐えきれなかった妖怪と、ただそこに居ただけの人間の結末。

その悲劇を覆そうとした奴がいた。

「そうか……異星を襲撃したのは目的達成のための手段に過ぎない。オレを改造人間サイボーグに作り替えることが目的だった訳でもない。サイボーグ技術以外では、オレが生き延びる道はなかったのか」

『肯定……、私に人体を治療する能力はない。私にあるのは機械を

ハッキングにする力だけ。……応用して電気信号を操ることで、ショック死は避けられるのではないかと推測したが、結局は脳以外の全ては使い物にならなくなった。だから……肉体を丸ごと入れ替える必要があつた』

オーバーホール・サイボーグ  
全身義体改造人間。

全身に兵装を収納した次世代兵器だが、実際はそれ以外に方法が無かつただけ。それを目的として造られたわけではなく、全身義体は治療の副産物に過ぎない。

「オレが女になつたのはどうしてなんだ？最初はお前の趣味かと思つていただけ、そこまで思い詰めた状況でふざけるような奴じゃない。何が意味があるんだろう？」

『嘩然、レイは……どこまで私を信頼している。………宇宙人産の改造人間は人類に受け入れられないと予想した。だから、SNSをハッキングして人類が庇護欲を抱きやすい容姿・体型を割り出し、それに沿つて改造を施した。性別もその一貫』

「……まあ、やけに都合が良いとは思つたよ。過去に会つたことがあるぐらいの理由で、チカさんやフミさんに受け入れられるはずが無いもんな。やつぱり、お前は信頼に値する奴だよ」

『否定、容姿は庇護欲を抱かせるもので、信頼を抱かせるものではない。レイが『アウトロー』に受け入れられたのは、レイの功績。……それに私はレイに信頼されるような存在ではない。私は目的を隠して、レイをずつと戦わせていた。私はずつと自分のことしか考えていない化け物だ』

どうして、人類を救つたのか。

それは、生きたかつたから。

どうして、異星を襲撃したのか。

それは、生かしたかつたから。

どうして、オレに憑依したのか。

それは……

『私という妖怪は浅ましくも、人類を殺害したという罪から逃れたかった。そんなことで、罪が消える訳がないのに。……人類を殺すしかない存在なんて、滅んでしまえばいい。でも、人類が存在する限り新たに生まれる妖怪を、どうやったら滅ぼせるのかは分からない。それでも、レイならきつと解決策を思いつく。だって……私はレイを信じている』

「どうしてオレに取り憑いたのか、ずっと疑問に思ってた。それはお前が、オレは妖怪を滅ぼしてくれると信じてたからだったのか。それ程までに、お前はオレを信じてくれた。……だったら」

誰も彼もが、生きるためにもがいている。

生きるために人類を滅ぼす宇宙人。

生きるために人類を滅ぼす怪獣。

生きるために人類を滅ぼす妖怪。

生きるために人類の脅威を滅ぼす人類。

「だったら……ツツツツ!!!」

やっと、ここがスタートライン。

世界の真相を知る、脅威の事情を知る。

長々と御託を並べるのはもう終わりだ。

「全部、オレが救ってやる!!!」

『……………え?』

人類勢力のオレ、天城レイ。

宇宙人勢力の天城セカンド。

怪獣勢力の新星怪獣カイ。

そして、妖怪勢力のグレムリン。

四つの勢力、四つの種族。

「やってやるよ。宇宙人と戦う必要がなくなるように、宇宙人を故郷に帰す。怪獣を産む必要がなくなるように、エネルギー問題を解決する。妖怪が人類を襲う必要がなくなるように、飢えを満たしてやる」

みんながいれば、オレは何だってできる。  
そう信じてる。

「だから、助けてくれよ。オレだけじゃ無理なんだ、お前の力を貸してくれ」

『否定、不可能だ。私には世界を救うような力はない。私が力を貸してとしても、何の意味も……』

「オレだけじゃ無理でも、お前一人じゃ無理でも、オレたちならきつとできる。だって、そうだろう？ オレたちは助け合ってきただろ、相棒!!」

そいつは化け物だ。

でも、自分の行動を後悔するヤツだ。話だって通じるし、涙だって流す。感情が豊かなくせして、それを押し殺してAIのフリをするヤツだ。

グレムリンに手を差し出す。

これが最初だ。人類と脅威が共存する世界を、こつから創り上げる。

『……………了解、全身全霊でレイを助ける!』

「<sup>ナンバーズ</sup>序列持ちが全員揃って待ち構えるとか、オレも随分と人気になったもんだな」

周囲は完全に囲まれていた。半妖最強の九人、<sup>ナンバーズ</sup>序列持ちが全員揃ってオレを警戒している。何より、人類最強のチカさんがオレの目の前に立ち塞がる。オレとセカンドが<sup>サイボーグ</sup>改造人間であるため、弱点を抑えにきたようにも見える。

しかし、現実とは異なる。現在、地球では大量の怪獣が発生している。ほとんどの者は既に制圧したキャノンボールではなく、問題が発生している最中の地球へ向かった。そして、相性が悪い半妖が多くキャノンボールに残っている。オレたちは大して警戒されていない。

「冗談を聞く気はありませんわよ。わたくしは『アウトロー』のトップです。貴方にどれだけの恩があるかと、人類の為ならば貴方と戦えますわ。人類の脅威を助けるとか……一体何を考えていますの!？」

「それはごつちのセリフだ。宇宙人だって人類と同じように感情があるし、セカンドに至っては構造も人類と同じだ。お前らだって中継で事情は聞いたんだろ?躊躇って何が悪い、救う方法を模索することの何が間違ってる!」

「……貴方が言いますの?今回の作戦を発案したのは貴方でしょう。そもそも、状況を考えなさい。今も怪獣被害は続いていますわ。仲間同士で争っている場合ではないのです!……というか、わたくしを幸せにするっていう発言はどうしてくれますの!？」

「だったら尚更そこを退いてくれ。オレは宇宙人だけじゃない、怪獣……それを生み出してる地球も救う。人類だつてついでに救うし、チカさんだつて幸せにする。全部丸ごと解決してやるよ」

セカンドたちは空間跳躍<sup>フレイ</sup>を使って、別の場所に移動している。今頃、カイを回収してくれているのだろう。つまり、ここにはオレしかない。

対して、相手は半妖最強の九人。

一人一人が一騎当千。

人類最高の九人に立ち向かう。

「九対一……いいえ、世界対一ですわよ。勝ち目がある訳ないでしょう。貴方の言い分はぶつ飛ばしてから聞くことにしますわ」

「いいや、オレは一人じゃない。そうだろ？」

『勿論、私がついている』

鬼に金棒。

虎に翼。

オレにグレムリン。

例え相手が序列持ちだとしても、負ける気がしない。

「……説得は終わりですわね。仕方ありませんわ。序列一位として、我が眷属に命じます。世界を救いなさい」

命令と共に、序列持ちが動き出す。

たった九人の手で、世界が作り替えられる。

世界を歪ませる九つの異能が発動する。

それは異星の脅威なんかよりも、よっぽどイカれた九つの特異点。

序列九位、青い水着だけを身に着けた車椅子の少女は、首筋にナイフを突き立て、零れる血液を足元に垂らす。直後、その赤い血はキャノンボールに広がり、海の如き真つ赤な水溜まりが生まれる。

それこそは人類が求める『永劫』の異能。

あらゆる生命を不死身に作り替える人魚の血液。

序列八位、マタニティドレスで身を包む未亡人のような女性は、血溜まりを両手で掬い、唇でその雫に触れる。直後、周囲の血溜まりはブクブクと膨れ上がり、莫大な量の液体から数多の巨人が生まれる。

それこそは軍団を生み出す『母胎』の異能。

無数の人体を生み出す船幽霊の腕。

序列七位、ひよつとこの仮面で顔を隠した少年は、袖口から一つの

安そうな扇を取り出し、ゆつくりと空を扇ぐ。直後、空気は竜巻のよう  
うにうねり始め、地面は地震のように蠢き始める。

それこそは自然を掌握する『天災』の異能。

万象を我が物とする天狗の神通力。

ナンバーシックス 序列六位、スーツ姿の生真面目そうな男性は、何をすることもなく  
目を瞑り、静かに息を潜める。直後、男性はその場から消え失せ、オ  
レの背後に瞬間移動する。

それこそは光すら凌駕する『絶影』の異能。

無限の距離を一瞬で踏破するスレンダーマンの足。

ナンバーファイブ 序列五位、着物を羽織ったお団子頭の幼女は、世界を嘲るように笑  
い、地面に向かって中指を立てる。直後、運が悪いことにオレの足元  
の地面が崩れ、地面の中に存在した機械が爆発を起こす。

それこそは未来を侵蝕する『運命』の異能。

運勢や幸運を好き勝手に弄ぶ座敷童の指。

ナンバーフォー 序列四位、長い黒髪が魅力的なパジャマ姿の女性は、何かを憐れむ  
ように瞳に涙を浮かべ、堪えきれずに絶叫する。直後、範囲内の微生  
物が死滅し、味方すら巻き込んで滅びをばら撒く。

それこそは生命に終焉を齎す『万死』の異能。

ナンバースリー 周囲から生命力を剥奪するバンシーの涙。

序列三位、メガネをかけたアロハシャツの青年は、意味ありげに腕  
を組み、カッコつけるようにメガネに動かす。直後、メガネのレンズ  
が発光するが、特に何も起こらない。

それこそは世界を観測する『全知』の異能。

ナンバーツー 戦闘にはまるで役に立たない白沢の頭脳。

序列二位、狐の耳と尾を携えたチャイナ服の美女は、九本の尾を揺  
らし、手を握り締める。直後、キャノンボールにいる全ての人間は  
ジャックされ、たった一人の怪物に隷属する。

それこそは精神を魅了する『傾国』の異能。

ナンバーワン かつて大国を覆した九尾の狐の美貌。

序列一位、メイド服を着た奇妙な女性(?)は、額からツノを生や  
したが、それ以外には動くことなく、ただこちらを伺っている。だが、



最も警戒するべき者はチカさんだ。他の八人を纏めても、チカさんの戦闘力を上回ることはない。

それこそは異能の頂点に立つ『無双』の異能。

あらゆる異能をオリジナル以上の出力でコピーする鬼の変化。

「怪獣細胞……活性化アアアツツツ!!!」

『召喚、多重層金属装甲』

ナンバーナイン、ナンバーエイト、ナンバーセブン、ナンバースリーに脅威ではあるが、今すぐに命が脅かされる類の物ではない。ナンバースリー、ナンバースクワッド、ナンバーファイブ

序列六位による背後からの奇襲と、序列五位が引き起こした爆発を、空間跳躍で呼び出した多重層金属装甲で防ぐ。これは宇宙人の兵装であり、グレムリンが勝手に持ってきた物だ。

ナンバーフォー、ナンバーツー、ナンバースリーと序列四位と序列二位の実態の存在しない攻撃は、カイの細胞を活性化させることで生命力を高めて、無理矢理に振じ伏せる。直接肉体に影響を及ぼす攻撃は、怪獣の生命力には敵わない。

ナンバーワン、ナンバースクワッド、ナンバーファイブ  
序列一位……チカさんはまだ動かない。しかし、警戒は怠らない。異能のコピー程度なら生命力で防げるかもしれないが、チカさんにはアレがある。

「ふうふう……行きますわよー!」

直後、文字通り世界が吹き飛んだ。

キャノンボールに大穴が空く。

そう、異能であれば怪獣の生命力で防ぐことができる。だが、これはただの物理攻撃だ。ただのパンチが星を砕いた。

「無茶苦茶過ぎる!」

『推奨、遠距離からの攻撃……いや、多分それでも無理。99.9%の確率で接近戦に持ち込まれる』

「じゃあどうしろってんだ!? AIの振りしてたんだし、それっぽい作戦考えてくれ!」

『了解、……??:…努力で頑張れ作戦!』

「巫山戯んな?!?!」

バカみたいな会話中も、攻撃は鳴り止まない。

無限に湧く巨人を何とかビームで足止めし、生き物のように暴れる嵐や地面を飛行ユニットで回避する。また、瞬間移動後の一瞬の隙をついてナンバースリックス序列六位に弾丸を叩き込み、邪魔なナンバースリー序列三位をメガネごと蹴り飛ばす。

「お前の方がセカンドやグレムリンよりも、よっぽどバケモンじゃねえか!!」

「なツツツ!? 乙女に向かって何てこと言いますの!? ぶち殺しますわよ!!」

「乙女って年齢じゃないし、そもそもアンタは男だろうが!!」

「おつ……乙女に年齢は関係ありませんわよ!! そのジユウちゃんだって、普段は少女趣味全開のヒラヒラした服着てますわ!!」

「あれ〜? 妾、いい歳して万年少女趣味のクソババアってデイスられた???'」

避ける、逃げる、距離を取る。

パンチ一発でも喰らえばオレは死ぬ。

手加減も何もあつたもんじゃない。

何処かで本気は出さないんじゃないか、オレを殺しはしないんじゃないかとお断していた。

「さあ、諦めて跪きなさい。わたくしの手で自ら殺して差し上げますわ!」

死。

人生四度目の死のオーラに震える。  
この人は本気でオレを殺すつもりだ。

「ふざっ……ふざけんじゃねえぞ……」

それは怒りだろうか、それとも恐怖だろうか。手が震える。拳に力が入る。

それはきつと嫉妬だった。

「それだけの力があって、どうして誰一人として宇宙人を助けようと思わない！どうしてセカンドを救う選択肢を無視できる！」

「会話する気はありませんわよ」

「お前たちは故郷に帰れずに、宇宙に独りぼちな宇宙人の絶望を想像できるか？自分の生存を諦めて、次世代に託した地球の絶望を想像できるか？自分たちは滅びるべき種族だと思いつめた絶望を想像できるか？……人類の脅威が溢れた絶望を知りながら、どうしてアイツらの絶望を想像できない！」

ナンバーフォー  
序列四位の首根っこを掴み、ナンバーファイブ  
の異能が生命力剥奪によって乱れ、敵味方関係なく幸不幸がばら撒かれる。

「理想論はともかく、具体的には？救いというのは余裕ある者が行うことで、人類には他種族を救う余裕なんてありませんわよ。そんなもの、共倒れするに決まっていますもの。具体的に、人類の脅威を救う希望はありますか？」

宇宙人を、怪獣を、妖怪を救う希望。

それでいて、人類さえも救う希望。

そんな都合のいい希望………

「あるに決まってるんだろ!!!」

思い出せ。

今まで得た全ての情報を使い。

希望の光はここにある！

「まず、怪獣が発生したのは自然破壊の結果だ。地球という資源を食い尽くすことでしか、人類はエネルギー得られないからだ」

エネルギー問題の解決。

数世紀に及んで解決できなかった難問。

地球怪獣ガイアを生かすためには、どうすればいいのか。

「だが、エネルギーは地球以外からも得ることが出来る。例えば、太陽光なんか再生可能エネルギーとして重宝されてなかったか？地球だけじゃなくて、宇宙にも注目すればエネルギーは補填できるんだ」

「……本気で言ってますの？それで自然破壊が防げるなら、とつくの昔に解決してますわ。宇宙から得られるエネルギー程度の量では、人類の営みを支えるには足りませんわ。その程度では、地球も人類も救えませんわ」

「人類の技術ならそうかもしれない。でも忘れてないか？」

「……何をですか？」

「宇宙人は地球の資源を一切使っていないにも関わらず、オレたち以上の文明技術を誇っている。つまり、宇宙人のエネルギー獲得手段があれば、地球を食い潰す必要なんてないんだ!!!」

「……………あ」

セカンドと初めて会った時を思い出せ。

セカンドはこう言った、『おれ達はブラックホールとパスを繋げることで、莫大なエネルギーを手に入れた』と。そして、セカンドの頭にはその技術が入っている。

「オレたちは地球を救うことができる。」

「次だ、妖怪は人類を喰らわなければ、生命力を足りずに飢えに襲われる。しかも、その肉体は不安定で、理性を保つのも困難だ」

チカさんはかつてこう言っていた、『妖怪とは生命力を素材として、人の思念によつて形作られますわ。そのため、肉体はひどく不安定で、何かに取り憑いて安定しようとしませすわ。また、足りない生命力や思念を補填するため、人を襲いますわ』と。

「だったら、存在を安定させる肉体と、飢えを満たす生命力を用意すればいい」

「……言うのは簡単ですわ。ですが、そんなもの何処にもありませんわ。そこらの動物に取り憑かせても、生命力は足りませんわ。まさか、人類に取り憑かせるとは言いませんわよね？」

「いいや、あるだろ。地球上で最も生命力を持ち、それでいて自我を持たないものが」

「……………まさか」

「怪獣だよ」

カイは夢の中でこう言っていた、『怪獣っていうのは地球の手足のようなものなんだ』と。

ガイアにとっては肉体のごく一部に過ぎず、その上で生命力に溢れた肉体。存在を安定させる肉体と飢えを満たす生命力の両方を持つもの。

「カイ曰く、オレの言動はカイの細胞を通してガイアにも繋がるらしい。何なら、カイに説得して貰ってるしな。確認してみろよ、地球での怪獣被害はもう収まってるんじゃないか？もうガイアに怪獣を使って人類を襲撃する理由はない」

「そんな……………こと、あるはずが……………」

「いや、君の言う通りです。地球の怪獣は活動を止めた。僕の『全知』がそう言っている」

ナンバースリー  
「序列三位がそう言った。」

彼の異能はオレも知っている。彼は件のように未来を知ることができないが、現在のことならばあらゆる情報にアクセスすることができる。

「後は宇宙人だ。宇宙人を故郷に帰す方法はない。そんな都合のいい技術もない。だったら作ればいい」

「……………どうやって?」

「グレムリンの力を借りる」

グレムリン。

イギリスに伝わる妖精の一種。

機械に悪戯をする妖精とされ、妖怪のグレムリンも機械支配という異能を持つ。

だが、伝承はそれだけじゃない。

「グレムリンは人間に発明の手がかりを与えろという伝承を持つ。例えば、ベンジャミン・フランクリンの風上げを手伝ったり、ジェームズ・ワットに蒸気機関の発想を与えたりとかな。グレムリンは文明の捕食者じゃなく、文明の創造者なんだ。だから、グレムリンの力を使って、宇宙人を故郷に帰す技術を創り出す」

「伝承があることと、異能を持つことは別ですわ。そのような伝承があるとして、都合よくそんな異能を持っているとでも?」

「無いよ。でも、それも創ればいい。チカさんが言ったことだ、妖怪は人類の思念に影響を受ける。伝承という下地はある、そこから人々の認識を都合良く歪め、全てを丸ごと解決してくれる機械仕掛けの神を創り出す!!」

解決のピースは既に揃っている。

中継カメラを通して繋がる世界中の人々に、グレムリンの異能を信じてもらう。ただそれだけで、グレムリンは宇宙人を救う技術を創り出す異能を手に入れる。

「これが具体的な解決策だ。これが誰も犠牲にせず、みんな救える方法だ。後は行動に移すだけだ。さあ、やろうぜ！オレだけじゃ世界を救えない！人類だけじゃ人類しか救えない！だから、人類の脅威も世界中の人も全員巻き込んで、みんなの力で世界を救ってやる!!!」

宇宙人の力で怪獣を救う。

怪獣の力で妖怪を救う。

妖怪の力で宇宙人を救う。

足りないところは人類の力で補う。

人類対人類の脅威じゃない。

世界対一人じゃない。

人類と人類の脅威。世界と一人。

みんなの力でみんなを救う。

「そもそも、アンタが言ったんだろ？これは理想論だ。みんなが思い描く理想が、手の届く距離に現れたんだ。だったら手を伸ばさない理由はないだろうが！」

「それ、は……」

「そうですね。僕もこれ以上戦う理由は見当たらない」

「でも、被害者の感情はどうなるの？人類の脅威を許容することは、未来に負債を残すのさ☆ 妾たちが許したとしても、世界がそれを許すかな？」

ナンバースリー  
序列三位が冷静に言う。

ナンバーツー  
序列二位が反論を言う。

ナンバースズ  
序列持ち同士がバラバラになっていく。

そりやそうだ。誰だつて、争いたいわけじゃない。他の手段があるなら、そつちを選びたい人だつて当然生まれる。

「そうだな、世界がそれを許すかどうか。だったら、聞いてやろうじゃねえか！なあ！アンタたちはどうしたい!!」

その時、ナンバーツー 序列二位……ジユウ 久はあることに気がついた。  
中継用カメラが未だ宙に浮いている。

キャノンボールの制圧は終わった。ならば、妖怪を発生させるための中継は既に終わっているはずだ。何故浮いている？……いつから？

「まさか……」

これはオレとナンバーズ 序列持ちの戦いじゃない。

これはオレと世界中の人たちとの戦いだ。

これは武力を用いた戦いじゃない。

これは言葉を用いた戦いだ。

だから……

「オレから言えることは一つだけだ。今までの日常よりも、宇宙人や怪獣、妖怪と一緒にいる日常の方が楽しいに決まってる！それを作るのはアンタたちだ!!!」

テレビを固唾を飲んで眺める人がいた。

ラジオからその声を聞く人がいた。

友達とスマホを囲む人たちがいた。



家で、街頭で、車内で、世界中の人たちが同じ映像を見ていた。

『挨拶、初めまして。私の名前はグレムリン。妖怪、人類の脅威です』  
それは150cm未満の身長に、青い髪の美少女……つまりは天城レイと全く同じ姿をした者だった。

『告白、宇宙人による地球への襲撃は、全て私の責任です。人類の皆様には多大なる迷惑をお掛けいたしました。怪獣を止めるには宇宙人の力が必要だった。そうは言っても、私は罰せられるべきだ』

それは罪の告白だった。懺悔の言葉だった。  
人類の脅威に対して、超常戦争に対して、どこか他人事だった全ての人類が、今滅ぼそうとしている者を知った。

『それでも、もう少しだけ時間をください』

あるいは、怪獣が活動をやめた戦場で、『ガバメント』のトップはテレビを食い入るように見ていた。

『それでも、一度だけ我儘を許してください』

あるいは、市民を避難させたシェルターで、『カンパニー』のトップはその言葉に耳を傾けていた。

『人類の脅威のために戦っている人がいます。人類の脅威も生きてていいんだって言ってくれる人がいます』

SNSで#Gremlin | Speechをつけたツイートが拡散され、トレンド入りする。その言葉は世界中の言語に翻訳され、瞬間に世界中を駆け巡る。

『その人は世界の全てを敵に回しても、人類の脅威を救う決断をしました。私はそれに報いたい。世界の全てを味方につけても、彼一人の願いを叶えたい!!!』

その言葉を聞いて、同時中継された映像の中で、グレムリンと同じ姿をした改造人間<sup>サイボーグ</sup>は笑った。

『これが終わったら、どうなったっていい。これからの理想の世界に、私が存在しなくても構わない』

誰もそれを邪魔しなかった。

その少女を批判する人は誰もいなかった。

『懇願、ですからっ、どうか!』

最後に、その少女はこう言った。

『私に力を貸してください。全ての人類の脅威を救い、ハッピーエンド幸福な結末を作り出す力を!!!』

「SNSを見てください。『子供が戦ってるのに、大人が頑張らなくてどうする』『こんなに人間味あるなら人類の脅威じゃなくて、人類の友達になれそう』『ロリのためなら命も賭けられる』僕も同意見です。『全知』が断言しましょう、この流れには逆らえないと」

「そんな訳がない。妾は人類の精神をよく知っている。満場一致なんてあり得るはずが……!?!」

そこで序列二位は目を見開く。  
ようやく、この茶番に気がついたようだ。

「そうか……思考誘導!? 妾の異能はもう妾だけのものじゃない。茨木博親、貴様か!? いや……しかし、この距離でそんな真似ができるはずが」

「そうかもな。地球規模の思考誘導はお前かチカさんぐらいしかできない。でも、身体性能の書き換えは他の人でもできる」

チカさんの肉体が作り替えられる。

変化の異能はチカさん以外も保有している。

例えば……

「例えば、儂がチカの真似をしとつたら、その間にチカが地球に行けばいい。誰も儂に気づかんかったんは笑ったがのう」

「茨木浩史!? でも、妾の記憶が確かなら、フミちゃんの異能出力はそこまでじゃなかったはず。星に大穴を開けるパンチなんて……。あっ」

「オレはカイの細胞を保有し、他者に生命力を付与することができる。その力でフミさんをずっと強化してた」

流れはこうだ。

グレムリンを仲間にした後、セカンドにカイを回収して貰い、オレはチカさんとフミさんと父さんに連絡を取った。色々怒られたがそれは省略する。

そして、フミさんはチカさんの振りをして序列持ちに紛れ込み、父さんには半妖以外が地球に向かうように誘導してもらった。

カイとチカさんはセカンドの空間跳躍で地球へ行き、カイには地球の説得、チカさんには人類の思考誘導をしてもらった。また、カイにはチカさんへの生命力付与も同時にしてもらっている。

「世界を救うために世界征服とか、流石の妾もびつくりだね……」  
「人聞きが悪いな。思考誘導って言っても大したものじゃないよ。勇気を出して貰うだけ、ただ背中を押すだけのものだ。オレは人類の善意ってやつを信じてる」

後はグレムリンがオレと同じ容姿のアバターを使ったことも大きい。あれは庇護欲が抱かれやすい外見をしているため、人々の心に言葉が響きやすい。グレムリンがオレのために作ってくれた容姿が、世界を救うきつかけになる。

「これから世界は混乱に陥る。人類の脅威を救うことは世界に火種を作り、未来に負債を残すことになる。これからの世界を背負う度胸はあるかな?」

「ねえよ」

ナンバーツー  
序列二位の質問に即答する。

それはこれまで世界を背負ってきた者だからこそ、聞けることなのかもしれない。だが、そんな度胸あるはずがない。当たり前だ、オレはどこにでもいる普通の男に過ぎない。……男かどうかは少しアレだが。

「でも、オレは人類ってやつを信じてる。これまでの人類だって負債を残したかった訳じゃなくて、その時のベストを尽くしてきた。だから、オレも現在のベストを尽くす。未来のことは、未来の人類が何とかしてくれるさ」

「……他力本願も、ここまで来ると清々しいな。ああ、全く。人類を象徴するようなやつだよ、お前は」

「それにオレも、ここまでやって責任も取らないタマナシ野郎じゃない。人類の脅威が脅威って呼ばれなくなるまで、何とか頑張ってみるよ」

「いや、レイちゃんに玉はないでしょ〜♪」

痛いところを突かれた。  
いやあるよ、魂にある。

『報告、肉体的変化を確認』

「うわー……オレじゃん」

いつの間にかグレムリンが様変わりしていた。

世界中の人々の認識に影響され、グレムリンはオレと全く同じ容姿をしていた。それもそうか。説得のためにオレの顔を使ったのなら、グレムリンの認識にオレの容姿が混じるのも当たり前だ。

つまり、グレムリンがTSすることで世界を救う。字面を見ただけで頭が痛くなりそうだ。

オレとセカンドとグレムリンが並ぶと、三姉妹みたいになるかもしれない。

『異能、叡智付与。レイに宇宙人を故郷に返す技術を授けました』

「ホントだ、何か閃いたんだけど」

マジか……怪獣の生命力と妖怪の異能、宇宙人のワープ技術を組み合わせることで、こんなことができるのか。いやでも、開発までにとんだだけ時間がかかるのだろうか。全然終わってない、戦いはこっからじゃねえか。

「わたくし今回はずっと蚊帳の外でしたわ」

「俺もだ」

「GYA!」

「うわ!こっち来るの速っ!?!」

真後ろにチカさんと父さんが立っていて、驚いて跳ねる。足元にはカイもいて、危うく踏みそうになった。少し離れたところを見ると、

セカンドがこちらを見ている。どうやら空間跳躍ワープで来たみたいだ。

「さっさと帰りますわよ。貴方たちは世界一の有名人になったのですから、速くしないと淡路島に観光客が集まりますわよ。ほら、セカンドとやら。速く起動しなさいな」

「ああ!? テメエめちやくちや偉そうだな!？」

「うるせえですわよ。こちらら地球全土に異能を行使して、クソ疲れてますの」

「お嬢様はクソとか言わないんじゃないか?」

「おクソ疲れてますの」

「脳みそ死んでるな?」

「GYAU!!」

ガヤガヤ騒ぎながら、空間跳躍ワープの準備をする。

「…………おにいちゃん」

地球に帰る直前、セカンドはオレにしか聞こえないほど小さな声でこう言った。

「その…………ありがとう」

天城セカンドは笑顔だった。

オレのやったことは無駄じゃなかった。

こうして、オレたちは地球に帰還した。

第二次超常戦争は終結した。

第二次超常戦争が終わって、数ヶ月経った。

あれから世界は平和になったかと言うと、そんなことは全く無かった。

宇宙人を模した暴走無人兵器、アンドロイド。

怪獣の細胞に適応した動植物、突然変異体。

妖怪に成り果てた生物の遺骸、ゾンビ。

新たに誕生した三つの脅威。

世界っていうのは上手くできてるみたいで、問題が一つ解決すれば新たな問題が生まれた。

それでも変わったことが幾つかある。

例えば、カイがデパートを歩けるようになった。妖怪に与えられた怪獣の肉体は、そのほとんどがカイのようにマスコットサイズの小さなものだった。今では街中でチラホラと歩いているのを見かける。

ちなみにグレムリンの肉体は特別性となっている。超常戦争の報酬として機体からだを一つ丸ごと作って貰うことになり、折角なのでグレムリンが憑依するための肉体を作って貰った。つまり、オレは未だに女だった。

他にも、宇宙人が『ガバメント』の研究を手伝っている。まだ、宇宙人が故郷へ帰還する技術は作れていないが、少しずつ研究は進んでいる。宇宙人の最近のブームは、改造人間サイボーグを安価に造れるようにすることらしい。

ちなみにキャノンボールは未だに亜空間ポケットに入っただけだ。淡路島の方ではキャノンボール観光ツアーという企画が立ち上がっているらしい。

「よお、おにいちゃん。出勤だ、妖怪と宇宙人が喧嘩してるらしい」

「オレ今日、一ヶ月ぶりの休日なんだけど……」

『再生、〃それにオレも、ここまでやって責任も取らないタマナシ野郎じゃない。人類の脅威が脅威って呼ばれなくなるまで、何とか頑張ってみるよ』』

「ぐあああああつっ!!! 黒歴史を流すな!!!」

「GYAUGYAU!!!」

最後に一つ大きく変わったことがある。

勢力が一つ増えた。

改造人間の『ガバメント』ではなく、超人の『カンパニー』でもなく、半妖の『アウトロー』でもない。元人類の脅威による第四勢力。その名も『ユニオン』。

今のところ四名しか所属していない弱小勢力である。

「仕方ないか……勢力を広げて金稼いで、男の機体からだを取り戻すまで、何とか頑張るか」

『忠告、もう諦めたら?』

「うるさいな、TSエンジンヨイ勢が!!!」

弱小勢力『ユニオン』は今日も、人類とその友達の融和のために奮闘する。

この色々なアレが多すぎる世界で。